

はか
博 多 77

博多遺跡群第116次・119次調査概要

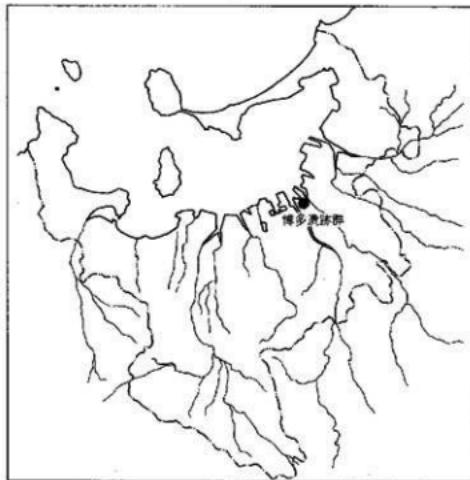


2001

福岡市教育委員会

はか
博 多 77

博多遺跡群第116次・119次調査概要



遺跡略号 HKT116
遺跡調査番号 9917

遺跡略号 HKT119
遺跡調査番号 9941

2001

福岡市教育委員会



博多遺跡群第116次調査地点周辺



第119次調査包含層出土銅鏡（八花鏡、Fig-112-1）

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、博多遺跡群第116次・第119次調査の成果を報告するものであります。本調査では古代から近世にかけての集落遺跡の一部を調査し、博多遺跡群の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとする御協力を賜りました株式会社大林組・井上組の皆様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

- 本書は、博多区奈良屋町（第116次）、中呉服町（第119次）における共同住宅建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成11年度（1999年度）に実施した博多遺跡群第116次・第119次調査の発掘調査報告書である。
- 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
- 本書に使用した遺構実測図は本田・伊藤健太・今村佳子・坂本真一・石井淳子・金子朋子・能登原が作成した。また、製図には本田・山根ひろみがあたった。
- 本書の遺構実測図中に用いていた方位は、すべて磁北である。
- 本書に使用した遺物実測図は本田・今村が作成し、本田が製図した。
なお遺物実測図の縮尺は土器類を1/3・1/4に統一し、銅製品・石器を1/1・1/2・1/3で統一した。
- 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
- 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
- 本書で使用した写真は本田が撮影した。
- 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

第一章 博多遺跡の立地と環境	1
第二章 博多遺跡群第116次調査の記録	3
1. はじめに	4
(一) 調査にいたる経緯	4
(二) 調査体制	4
2. 発掘の記録	5
(一) 調査の概要	5
(二) 基本層序	7
(三) 遺構と遺物	7
3. まとめ	49
第三章 博多遺跡群第119次調査の記録	53
1. はじめに	54
(一) 調査にいたる経緯	54
(二) 調査体制	54
2. 発掘の記録	55
(一) 調査の概要	55
(二) 遺構と遺物	58
3. まとめ	83

表紙写真 第116次調査097号遺構出土 銅製仏像（十一面觀音像、Fig-27-1）

裏表紙写真 第116次調査097号遺構出土・銅製仏像頭部（Fig-27-2）

第一章

博多遺跡の立地と環境

博多遺跡は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東には江戸時代に開拓された石堂川（御笠川）、南は石堂川開拓以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画されている。

この御笠川と那珂川によって挟まれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡が集まる地域でもある。上流側より著名な遺跡名を列挙していくと、奴国の中核地である須恵岡本遺跡を中心とした一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が大量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られている板付遺跡、弥生時代の青銅器鑄造地のひとつである那珂遺跡群、弥生時代後期の環溝群と「那津官家」と推定される倉庫群で知られる比恵遺跡群などがある。これらの遺跡群は、ほぼ直線上に並んでいる。博多遺跡群で検出・報告されている弥生時代中期・後期の集落・墳墓群は、これらの遺跡群の延長上で理解されよう。さらに、この延長でそのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴國王」の金印出土推定地にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動を支える拠点集落の一つとして理解することができよう。律令時代にはいると、御笠川の最上流地域に大宰府が設置され、九州の政治・軍事的中心地となる。また、博多湾岸には、博多遺跡群と共に入り海ひとつ離れた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館が置かれた。博多遺跡群内に官衙が設置されたという記録はないが、石壇・銅製帶金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝錢・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が出土しており、律令官人・それに伴う施設の存在が推定される。平安時代後期になり律令体制が弛緩すると、对外貿易に管理も中央政府の直接的な管理・掌握から、大宰府を通じての管理に変質し、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11世紀に入り博多において宋商人の居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半に入ってからであるが、該期の膨大な量の輸入貿易陶磁器がこれまでに出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人網羅の援助のもとに、相次いで建立され、周辺の都市かが急速に進行し、宮崎宮周辺に展開する箱崎遺跡群と共に中世都市群として発展していくことが現在までの調査成果から分かっている。

鎌倉時代には、二度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13世紀末には鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。調査成果から13世紀末から14世紀初めにかけて、道路遺構が各調査地点で確認されており、それらは戦国期まで存続していることが分かっている。これらの道路は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半を通じての博多の都市景観はここに確立されたといえよう。

室町時代後半の博多は境と並んで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼亡している。1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼と帰する。しかし、翌年には豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町創であり、この時点では鎌倉時代以降続いていた博多の街区・道路は廃止され、博多全体は長方形街区と短冊形地割で仕切られた。こうして、中世都市博多は近世都市博多として再生された。しかし、江戸時代に入り、鎖国政策がとられ、貿易都市としての博多は幕を下ろし、商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和57年から始まった博多遺跡群の発掘調査は平成13年現在128次調査を数える。中世都市「博多」の様相が遺跡の破壊と共に着実に明らかにされつつある。

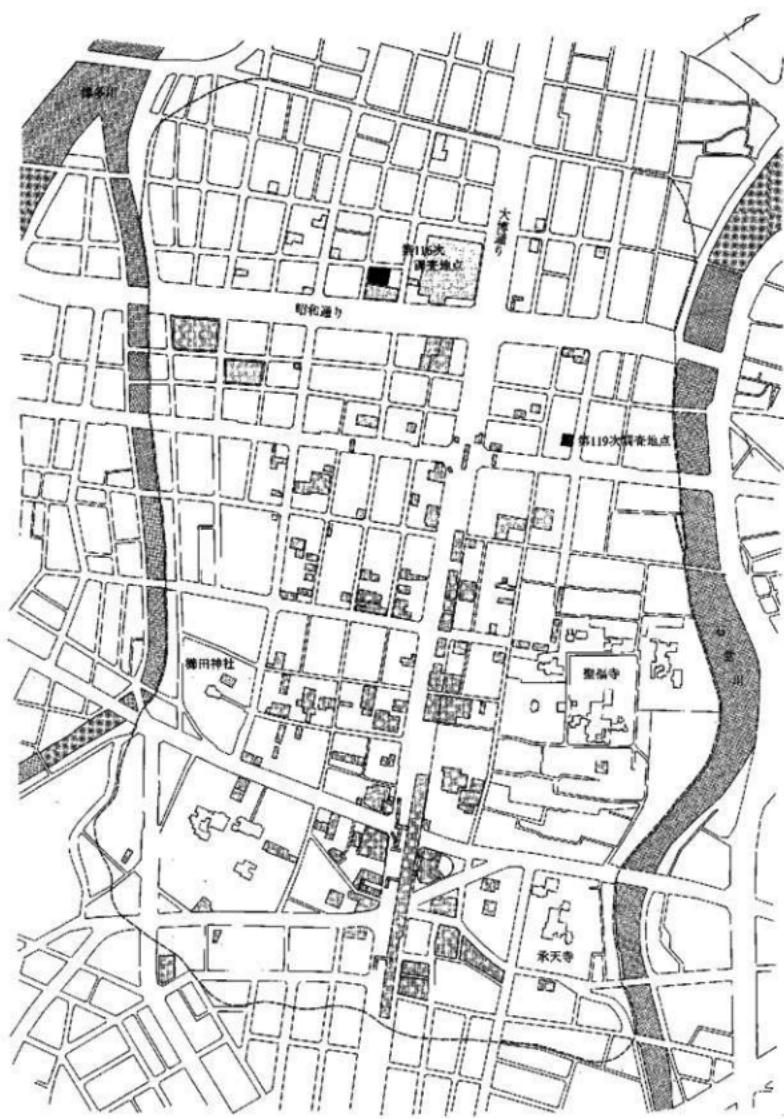


Fig-1 博多遺跡群内調査区位置図 (S=1/8000)

第二章
博多遺跡群第116次調査



猿面 (Fig-61-28)



鳥形水注 (Fig-61-29)



馬形人形 (Fig-61-21)



土製鈴 (Fig-21-9)

2001

福岡市教育委員会

1. はじめに

(一) 調査にいたる経緯

平成10年12月14日、株式会社大林組より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区奈良屋町2-12他におけるビル建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の遺跡である博多遺跡の北側に位置しており、これを受けて埋蔵文化財課では平成11年4月13日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から150~180cm程掘り下げる褐色粗砂層上面において中世から近世にかけての溝、土坑、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成11年6月1日に着手し、平成11年9月24日に終了した。

(二) 調査体制

調査委託	株式会社大林組九州支店				
調査主体	福岡市教育委員会 教育長		西 憲一郎		
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長	山崎 純男		
	同	埋蔵文化財課 第2係長	力武 卓治		
調査庶務	同	文化財整備課	谷口 真由美		
			御手洗 清(現任)		
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係	宮井 菩朔		
			屋山 洋(試掘調査)		
		第2係	本田 浩二郎(本調査)		
調査作業	朝倉浩司	伊藤健太	岩本三重子	牛島 靖	大賀規矩雄
	木原保生	近藤澄江	澄川アキヨ	玉川重人	豊永裕保
	中村フミ子	西山徳子	野田淳一	羽岡正春	平井武夫
	村田敬子	播磨千恵子			藤野トシ子
	今村佳子	石井淳子	金子朋子	能登原孝道(以上九州大学)	
	坂本真	(福岡大学)	山口耕平	田中真美(別府大学)	
整理作業	有島美江	野副けいこ	鳥飼悦子	室 以佐子	

調査期間中には大林組九州支社の方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	9917	遺跡略号	HKT116
調査地番	博多区奈良屋町2-12他	分布地図番号	千代・博多48
開発面積	1.181m ²	調査面積	430m ²
調査期間	1999.6.1~1999.9.24		

2. 発掘調査の記録

(一) 調査の概要

博多遺跡群は、福岡平野の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川（石堂川）の河口に挟まれた三角州平野上に形成される遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は、南から大きく「博多浜」と「息浜」（おきのはま）の二つに分けられる。現在の博多は、この砂丘地形の上に人工的に2m程盛り土され形成されたものであるが、現状でも埋没した旧地形の起伏を、比較的よく反映していることがこれまでの調査成果から伺える。

今回報告を行う第116次調査地点は、息浜中央部南側に位置しているが、息浜はこれまでの調査成果より11世紀末に徐々に陸地化がはじまり、それ以後の様々な生活痕跡が確認されている。調査地点は現在の昭和通り沿い北側、第83次調査地点の北側に隣接する地点で、息浜の頂部付近に位置していると考えられる。

発掘調査は既存建物の解体・建築廃材の場外への搬出終了後に着手した。試掘調査の成果をもとに、現地表面から150~180cm程の近代から現代までの整地層を重機により除去し、暗褐色砂質土層面において第一・遺構面を設定、遺構検査を行った。第一面の標高は3.6~3.8mを測る。

調査対象地は16世紀後半に行われた「太閤町割」以来存続する「博多」の町割りをよく留める区画で、調査区は長方形区画500m²の平面形を設定した。第83次調査地点と隣接する部分約300m²は試掘調査の成果より、すでに過去の建物建設・解体工事作業により擾乱されており、遺構の大部分が消滅していることが確認されていたため、部分的な調査を行うにとどまった。調査は上層トレンチ断面観察から、三面までの遺構面を設定して行った。

第一面の調査では、15世紀から18世紀にかけての井戸遺構・石組遺構・掘立柱建物の柱穴列・土坑などを検出した。これらの遺構の多くは、「太閤町割」で施された長方形街区とは異なる区画性を持ち、太閤町割以前の中世後半期の「博多」の街区を示すものと考えられる。調査区内には既存建物の基礎

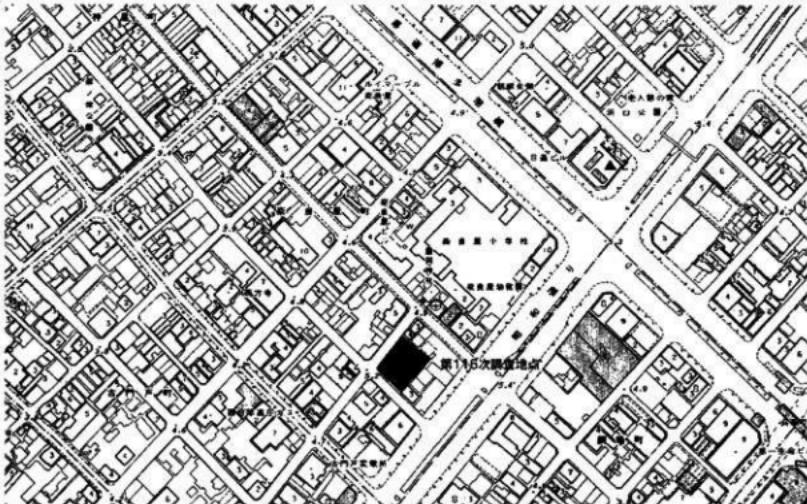


Fig-2 第116次調査区位置図 (S=1/4000)

杭が乱立しており、杭付近の遺構は小規模であるが擾乱を受ける。

遺構面とした暗褐色砂質土層は、調査区の中央から南側に向かって堆積しており、北側では褐色粗砂層が遺構面となる。この褐色粗砂層は博多遺跡群の基盤層とされる自然堆積の砂丘砂層であり、これ以下では遺構の検出は、周辺の調査においても報告されていない。調査区南側では白色粘質土を用いた整地面が一部確認されたが、小規模な範囲での整地であることから、土間などに用いられたものと考えられる。

第二面の調査は褐色粗砂層面を遺構面として行った。この褐色粗砂層面の標高は2.8~3.2mを測る。調査区北側では、この褐色粗砂層が第一面調査の段階で既に検出されていたことから、北側については掘り下げを行わず、粗砂層以下の堆積状況を土層トレンチ断面で確認した。

第二面で検出された遺構は、井戸遺構・石組遺構・掘立柱建物・柱穴列・土坑などがある。これらの遺構は、第一面で検出された遺構とはほぼ同じ主軸方向・規格性を持つことから、建て替えなどの連続する遺構群であることが推測される。第一面・第二面でみられる褐色粗砂層の観察より、第116次調査地点付近の地形は、南側に緩やかに傾斜する砂丘の背面上に位置していたこと、息浜の最後尾の尾根線から派生する別の尾根線が北側（博多湾側）に存在していた事などが推測されよう。

第三面の調査は、調査区南側の約40m²の部分について行った。第二面の調査後に、調査区南側で浅い窪み状に暗褐色粗砂が広がっていたことから、土層トレンチにより確認し掘り下げを行った。暗褐色砂除去後の褐色粗砂層面を第三面とした。第三面の標高は2.4m前後を測る。遺構は少数の土坑が検出されたのみである。窪みは土層断面でレンズ状に堆積する炭化物・貝殻・焼土が確認されたが、明瞭な立ち上がりは確認されなかった。これ以下では遺構の検出はなかったが、褐色粗砂層中に白磁片などが混入しており、調査区付近の砂丘生成・陸地化の年代を示すものと考えられる。



Ph. 1 調査区周辺（左：第111次調査地点、右：第116次調査地点）

(二) 基本層序

本調査地点では、前述のように三面までの調査を行った。調査区南側は大規模な擾乱のため遺構が消滅しており、地山層も標高土 0 m付近まで搅乱されていたため、隣接する第83次調査地点で検出された地山層（褐色粗砂層、標高2.9~3.6m）との連続性は不明確である。しかし、今回の調査では部分的に南側に落ちる褐色粗砂層面の地形が検出され、両調査地点の間には15世紀代までに人工的に埋め立てられた小規模な谷地形が存在していたことが推測される。この谷地形を埋めた暗褐色砂からは白磁碗の小片などが出土する。

調査区の現地表面は標高5.0~5.2mを測る。現在の地表面の観察では、昭和通りに息浜の尾根線が存在し、調査区周辺は北側（博多湾側）に向かって緩やかに傾斜している。試掘調査の成果では、地表面以下1.50~1.80m程は近代から現代の整地層が堆積している。この整地層中には戦災に伴う廃材や焼土などもが多く含まれている。第一面とした暗褐色砂質土層面は標高3.6~3.8mを測り、前述のように調査区中央から南側に向かって堆積する。北側では博多遺跡群の基盤層である褐色粗砂層が検出される。第二面は暗褐色砂質土を除去した褐色粗砂層面で標高2.8~3.2mを測る。調査区南側ではこの面に浅い窪み状に堆積する暗褐色砂が検出され、これを除去した面を第三面とした。下部には炭化物・被熱した貝殻・焼土などがレンズ状に堆積する。調査区内での褐色粗砂層面の傾斜は、現地表面の勾配とは逆に南側に向かう緩やかな勾配を持ち、北側では標高3.6m前後、南側では2.4m前後を測り、調査区南西側隅部では急速に落ちる。この落ちに対応する褐色粗砂層の立ち上がりは本調査区内では検出されていない。なお、本調査地点では標高80cm前後で涌水する。

(三) 遺構と遺物

次に、各遺構検出面と主要な遺構・遺物の概要について述べる。

第一面で検出した戸戸遺構や土坑などの検出面から1m以上の深さを測る遺構は安全性を考慮し、第二面において完掘を行った。遺構は種別を問わず、検出順に遺構番号を付与していった。

第一面では001号~176号遺構、第二面では200号~292号遺構、第三面では293号~295号遺構まで遺構の調査を行った。遺物はコンテナボックスで合計96箱分が出土した。遺物としては、土師器、白磁器・青磁器などの貿易陶磁器、国産陶器、銅錢・仏像などの銅製品、石錘・石鍋などの石製品、墓石などがある。



Ph. 2 第一面全景（東から）



Ph. 3 第一面全景（東から）

(a) 第一面の調査

第一面とした遺構面は、近代からの整地層直下で検出した遺構面であり、現代までの時期の新しい多くの廃棄坑が検出された。これらの廃棄坑の中からはガラス製の薬瓶や陶器類が出土した。前述のように調査区南側は、過去の搅乱によって遺構の大部分が消滅しており、搅乱の底部際にかろうじて井戸遺構などが検出された。調査区中央部には整地層中から掘り込まれた廃棄坑があり、大量の陶器類が建築廃材と共に投棄されていた。これらを除去した後に遺構検出を行った。

検出された遺構は、井戸遺構・方形土坑・石組遺構・溝状遺構・掘立柱建物・建物基礎状石敷遺構などである。井戸遺構で明らかに現代に属するものは、作業工程の都合から掘削を行わなかった。第一面で検出された遺構の大部分は主軸方向において規則性を持つものが多く、遺構の存続した時期の周辺街区の方向性を示す資料として注目される。博多遺跡群の他の調査区で見られるような何層にも及ぶ、丁寧な広範囲の整地面は本調査地点では検出されず、調査区南東隅部で検出された小範囲の整地が見られるだけであり、調査地点における該期の生活形態がある程度は頗推されよう。

本調査地点においても方形石組遺構が数基検出されているが、この遺構の用途は現状では解明されていない。隣接する第83次調査地点や、大博通りを挟む地点に位置する第113次調査地点、旧奈良屋小学校内で行われ石墨状遺構を検出した第111次調査地点においても数多く検出されているが、これらの調査区は14世紀後半に構築された「元寇防壁」の推定線周辺に位置しており、これらの石組遺構に防壁の石材が転用され構築された可能性も考えられる。これまでの報告では石組遺構の多くは15世紀以降の年代を示す。



Ph. 4 第一面西側調査状況（南東から）



Ph. 5 第一面西側調査状況（東から）



Ph. 6 第一面北東側調査状況（南から）



Ph. 7 第一面東側調査状況（南東から）

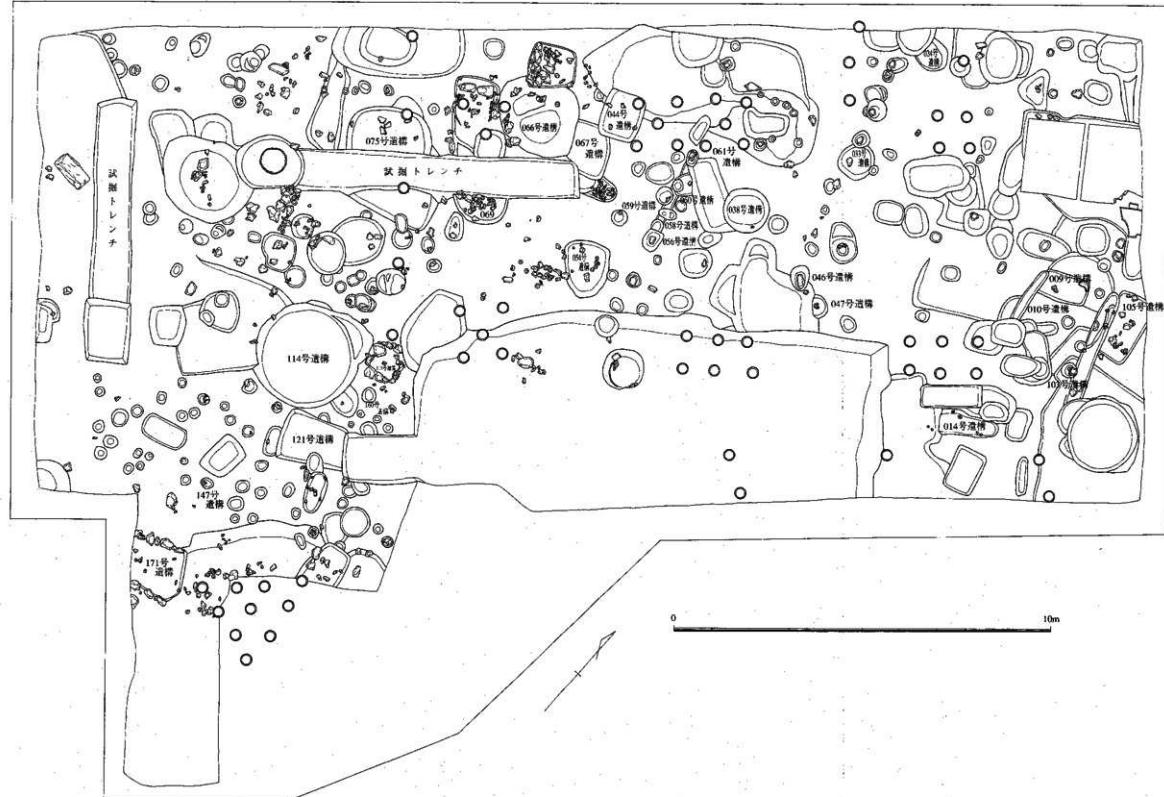


Fig-3 第一回遺構配置図 (S=1/100)

005号遺構 (Fig-4)

調査区東側壁際で検出した土坑である。平面形は方形を呈し $1.8m \times 1.0m$ を測る。検出面から床面までの深さは $15cm$ を測る。土坑内からは $10cm \sim 20cm$ 大の砾が検出されるが意図的に配置されたものではなく投棄されたものである。主軸は $N - 15^{\circ} - W$ の方向をとる。埋土は暗褐色砂質土で焼土・炭化物を含んでいる。

出土遺物をFig-6に示す。

1は土師皿である。口径 $7.8cm$ 、底径 $5.8cm$ 、器高 $1.8cm$ を測る。底部は糸切り調整され、外器面には蓮弁文が線刻される。色調は暗褐色を呈する。出土遺物より15世紀代後半頃の年代が考えられる。

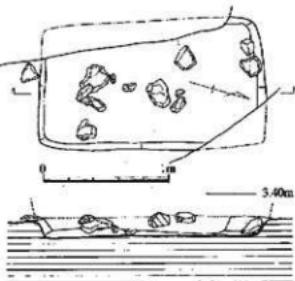


Fig-4 005号遺構実測図 ($S=1/40$)

009号遺構 (Fig-5)

調査区東側壁際で検出した土坑である。平面形は方形を呈し $1.2m \times 0.7m$ を測る。検出面から床面までの深さは $15cm$ 前後を測る。上坑北側隅部に瓦質土器の火鉢がつぶれた状態で出土した。主軸は $N - 25^{\circ} - E$ の方向をとる。

出土遺物をFig-6に示す。

2~5は土師皿である。口径は $6.6cm$ 、 $7.1cm$ 、 $7.0cm$ 、 $8.0cm$ を測る。Fig-5 009号遺構実測図 ($S=1/40$)
底部はすべて糸
切り調整され
る。6・7は土
師器杯である。
口径は $11.1cm$ 、
 $11.8cm$ を測り、
底部は糸切りさ
れる。

8は掲輪陶器の
捕鉢である。9
は瓦質土質の火
鉢である。口径
 $30.2cm$ 、器高
 $30.8cm$ を測る。
色調は黒灰色を
呈する。出土遺
物より15世紀代
後半~16世紀前
半の時期が考
えられる。

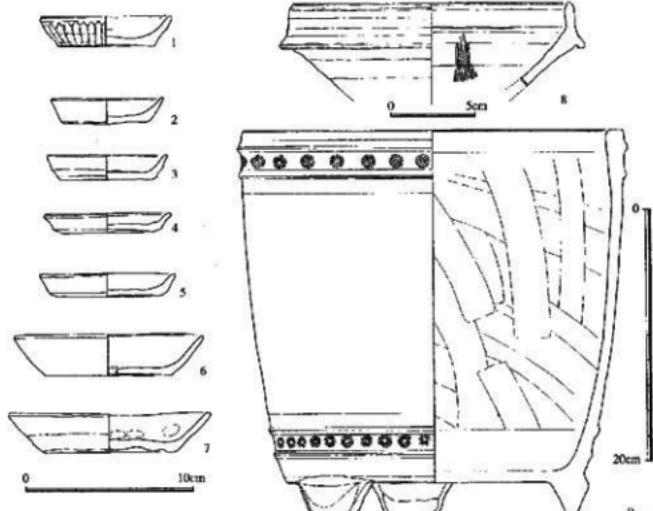


Fig-6 出土遺物実測図 ($S=1/3 \cdot 1/4$)

038号遺構 (Fig-7)

調査区中央部東側で検出した土坑である。平面形は不整円形を呈し、直径1.2m前後を測る。検出面から底面までの深さは95cm前後を測る。掘削開始段階では井戸遺構と考えていたが、掘り下げを行うと標高2.20m前後で底面が検出されたため、廃棄土坑と考えた。埋土は上層では炭化物を多く含んだ暗褐色砂質土で、下層では暗褐色砂となる。

出土遺物をFig-8に示す。

1は土師皿である。口径6.8cm、底径5.8cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切り調整され、色調は赤褐色を呈する。2は土師器坏である。口径10.8cm、底径6.0cm、器高2.4cmを測り、底部は糸切り調整される。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。3は土師器坏である。口径10.6cm、底径6.8cm、器高2.1cmを測る。底部は糸切り調整されるが、全体的に摩滅が激しい。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。4は土師器坏である。口径1.2cm、底径4.8cm、器高3.5cmを測る。外反する体部を持ち、外器面にはナデ調整の痕跡が明瞭に残る。底部は糸切り調整され、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。搬入品である。5は唐津青磁小碗である。口径10.0cm、高台径4.6cm、器高3.2cmを測る。内面見込みには治具の痕跡が四カ所観察できる。釉調は暗オリーブ色を呈する。

この他には龍泉窯系青磁碗、陶器、土師質土器、瓦質土器などの遺物が出土している。これらの出土遺物よりこの遺構の年代は15世紀後半～16世紀代前半の時期が考えられる。

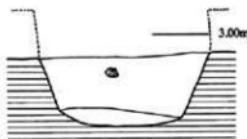
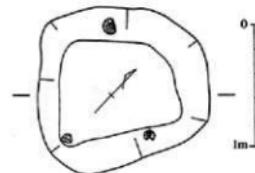


Fig-7 038号遺構実測図 (S=1/40)

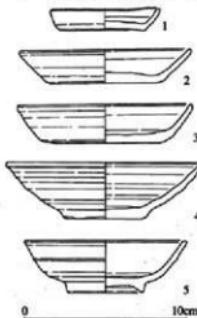


Fig-8 出土遺物実測図 (S=1/3)

040号遺構 (Fig-9)

調査区中央部北側で検出した土坑である。平面形は長方形を呈し、2.1m×1.7mを測り、検出面から底面までは60～80cmを測る。

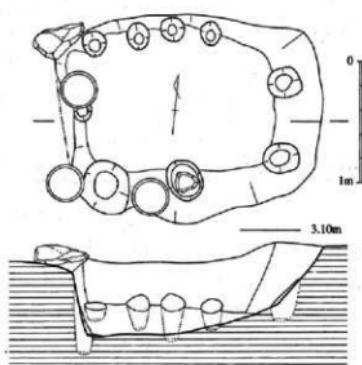


Fig-9 040号遺構実測図 (S=1/40)



Ph.8 040号遺構完掘状況 (南東から)

上坑底面周囲には直径20cm前後の柱穴が複数検出された。遺構の主軸はN-84°-E方向を探る。半地下式倉庫の下半部と考えられる。出土遺物をFig-10に示す。

1は土師皿である。復元口径8.6cm、底径7.3cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切り調整され、焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。2~4は土師器壺である。口径は11.2cm、11.8cm、11.4cm、底径は2.2cm、8.2cm、7.5cmを測る。底部はすべて糸切り調整される。内外器面にナデ調整の痕跡が観察できる。5は土師器壺の口縁部である。小破片であるため、全体の器形は伺いしれない。外器面はナデ調整、内器面はナデ調整の後、刷毛目調整が施される。これらの出土遺物より、この遺構の年代は15世紀代後半頃の時期が考えられる。

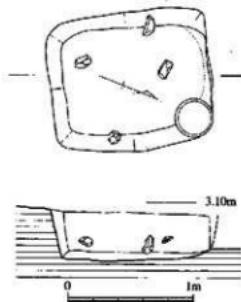


Fig-11 044号遺構実測図 (S=1/40)

1は土師皿である。口径10.0cm、底径5.8cm、器高1.7cmを測る。底部は糸切り調整され、色調は淡褐色を呈する。2は土師器の壺である。復元口径13.2cmを測り、色調は淡褐色を呈する。3は土師器の壺である。復元口径15.8cmを測り、器厚は2mm前後の薄手の造りである。色調は淡灰褐色を呈する。4は土師質土器の捏鉢である。復元口径22.4cmを測り、口縁部下には煤が付着する。内器面の上半部には細かい刷毛目調整が施される。5は土師質土器の鉢である。復元口径20.4cmを測る。これらの出土遺物より、この遺構の年代は15世紀前半頃の時期が考えられる。

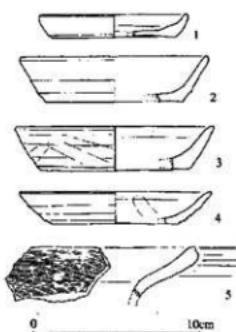


Fig-10 出土遺物実測図 (S=1/3)

044号遺構 (Fig-11)

調査区中央部西側で検出しした土坑である。平面形は方形で1.2m×1.0mを測り、検出面から底面までの深さは40cm前後を測る。土坑北側隅部は建物基礎杭により搅乱される。床面から5~10cm程度浮いた状態で礫が数点出土したが、配石されたものではなかった。遺構は褐色砂層面に掘削され、埋土は炭化土を含む暗褐色砂質土であった。この遺構の主軸はN-22°-E方向を探る。

出土遺物をFig-12に示す。

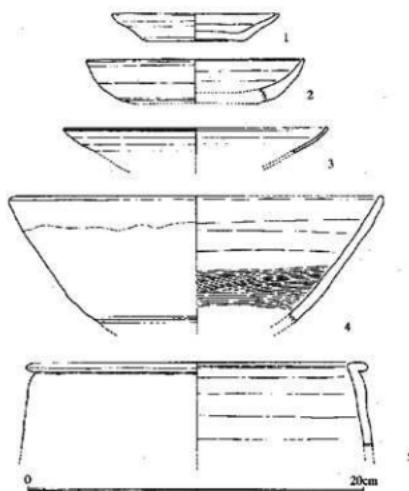


Fig-12 出土遺物実測図 (S=1/3)

047号遺構 (Fig-13)

調査区中央部南側で検出した土坑である。南側半分は他の遺構に切られ消滅しているが、平面形は復元で円形となり、直径60cm前後を測る。検出面から底面までの深さは20~30cmを測る。遺構は褐色砂層面に掘削され、埋土は暗褐色砂質土となる。底面から20cm程浮いた状態で土師皿が数個体分出土した。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物をFig-14に示す。

1は土師皿である。口径7.6cm、底径5.2cm、器高1.3cmを測る。体部は横ナギ調整で成形され、底部は静止糸切り調整される。色調は淡赤褐色を呈する。2は土師皿である。口径7.8cm、底径5.6cm、器高1.4cmを測る。底部は回転糸切り調整される。3は土師器の壊である。口径12.8cm、底径8.2cm、器高3.0cmを測る。底部は静止糸切り調整される。色調は赤褐色を呈する。4は土師器の壊である。口径12.6cm、底径7.6cm、器高2.8cmを測る。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。この他には青磁・瓦質器などが出土している。これらの遺物より15世紀代中頃の年代が考えられる。

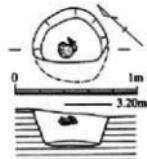


Fig-13 047号遺構実測図
(S=1/40)

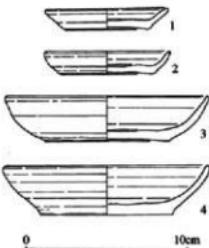


Fig-14 出土遺物実測図 (S=1/3)

054号遺構 (Fig-15)

調査区中央部付近で検出した土坑である。平面形は歪んだ円形を呈し、1.6m×1.2mを測る。検出面から底面までの深さは10~30cmを測る。遺構は暗褐色砂質土層に掘削され、埋土は粗砂を多く含む暗褐色土であった。遺構の床面から10~15cm程度浮いた状態で土師皿・国産陶器などが出土した。出土状況より土師器などの遺物は、遺構がある程度埋没した段階の、窪みの状態の時に投棄されたものと考えられる。

出土遺物をFig-16に示す。

1・2・10は土師皿である。口径は7.0cm、7.2cm、9.6cm、底径は5.0cm、4.8cm、7.6cm、を測り、器高は2.0cm、1.9cm、1.1cmを測る。底部は共に糸切り調整される。色調は暗褐色・褐色を呈する。3~9・11~15は土師器の壊である。

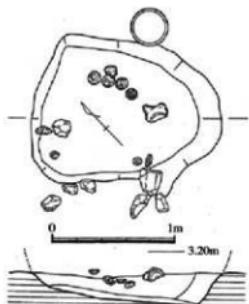


Fig-15 054号遺構実測図
(S=1/40)



Ph. 9 054号遺構調査状況 (南から)

- 3は口径10.4cm、底径6.8cm、器高2.5cmを測る。
- 4は口径11.4cm、底径8.0cm、器高2.4cmを測る。
- 5は口径12.0cm、底径8.0cm、器高2.3cmを測る。
- 6は口径12.6cm、底径8.8cm、器高2.5cmを測る。
- 7は口径12.2cm、底径8.0cm、器高2.1cmを測る。
- 8は口径13.2cm、底径8.8cm、器高2.6cmを測る。
- 9は口径12.0cm、底径7.4cm、器高2.9cmを測る。
- 11は口径12.6cm、底径8.6cm、器高2.8cmを測る。
- 12は口径12.4cm、底径8.4cm、器高2.4cmを測る。

13は口径12.4cm、底径9.0cm、器高2.6cmを測る。14は口径12.4cm、底径7.4cm、器高3.4cmを測る。15は口径12.8cm、底径8.8cm、器高2.6cmを測る。底部はすべて糸切り調整されるが、6・9・11・13・15は板目圧痕をもつ。焼成はすべて良好で、色調は淡赤褐色から暗褐色を呈する。これらの土器の胎土には金雲母が多く含まれているのが特徴として挙げられる。16は土師質土器の擂鉢である。底部のみの残存で、全体の法量は不明であるが、底径は14.2cmを測る。被熱しており器面の状態は悪い。これらの出土遺物より、この遺構の年代は15世紀代後半の時期が考えられる。

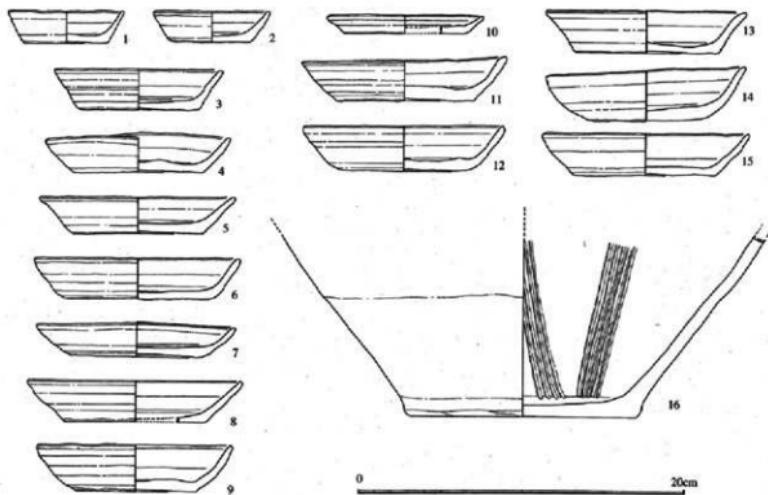


Fig. 16 出土遺物実測図 (S=1/3)

066号遺構 (Fig. 17)

調査区中央部北側で検出した円形の廃棄土坑である。検出した段階では、土坑上面に拳大の礫に混じって陶器片・瓦片が散乱する状況であった。上面に散乱する遺物・礫を除去し、掘り下げを行った。上面ではコンテナケース2箱分の遺物が出土した。掘削した段階では、埋没した井戸遺構内に大量的の遺物が廃棄されているものとも考えられたが、遺構底面での井筒などの検出はなかった。上面では概円形の平面プランを呈するが、底面はほぼ円形を呈する。上面で直徑2.5m×2.0m、底面で直徑1m前後を測る。検出面から底面までの深さは1.6m前後を測る。第一面では掘り下げ時に周囲が崩落する可能性があったため、第二面において完掘した。埋土は固くしまった暗褐色砂質土で、炭化物を多く含む。土坑西側壁面に貼り付くような状態で擂鉢・土師皿などが出土した。遺構上面では、人頭大の礫が数点検出されていたが、配石された状況ではなく、遺構埋没途中



Ph. 10 069号遺構遺物出土状況 (東から)

の窓みに投棄されたものと考えられる。

出土遺物をFig-18、19に示す。

1~46は土師皿である。法量・焼成・色調・底部の調整は以下の表に列記した。

	口径	底径	器高	焼成	色調	底部				
1	6.4	3.8	1.2	良好	淡褐色	糸切				
2	6.6	4.2	1.2	良好	赤褐色	糸切				
3	6.9	4.7	1.3	良好	暗褐色	糸切				
4	7.1	5.2	1.3	良好	赤褐色	糸切				
5	7.0	5.3	1.5	良好	赤褐色	糸切				
6	7.0	4.8	1.5	良好	赤褐色	糸切				
7	6.8	4.7	1.3	良好	暗褐色	糸切				
8	7.2	5.0	1.2	良好	淡褐色	糸切				
9	7.1	4.8	1.7	良好	淡褐色	糸切				
10	6.4	4.8	1.2	良好	淡褐色	糸切				
11	6.4	4.4	1.5	良好	淡褐色	糸切				
12	9.2	6.7	1.5	良好	暗褐色	糸切				
13	8.8	6.5	1.4	良好	淡褐色	糸切				
14	9.5	7.5	1.6	良好	淡褐色	糸切				
15	9.6	7.8	1.6	良好	赤褐色	糸切				
16	7.4	5.3	1.2	良好	暗褐色	糸切				
17	8.9	6.9	1.8	良好	淡褐色	糸切				
18	12.2	9.2	1.8	良好	淡褐色	糸切				
19	13.0	8.8	2.2	良好	淡褐色	糸切				
20	8.6	6.9	1.8	良好	淡褐色	糸切				
21	8.6	5.5	1.4	良好	淡褐色	糸切				
22	9.0	6.0	1.7	良好	淡褐色	糸切				
23	8.5	6.4	1.5	良好	淡褐色	糸切				
24	8.8	6.8	1.6	良好	淡褐色	糸切				
25	9.6	7.0	1.6	良好	淡褐色	糸切				
26	9.1	7.1	1.7	良好	褐色	糸切				
27	8.4	5.7	1.5	良好	淡褐色	糸切				
28	9.6	7.5	1.7	良好	赤褐色	糸切				
29	9.6	7.8	1.6	良好	淡褐色	糸切				
30	9.4	7.0	1.4	良好	淡褐色	糸切				
				31	9.0	6.7	1.6	良好	淡褐色	糸切
				32	9.6	7.0	1.5	良好	赤褐色	糸切
				33	8.6	6.9	1.6	良好	淡褐色	糸切
				34	8.8	6.6	1.5	良好	淡褐色	糸切
				35	9.2	7.0	1.4	良好	淡褐色	糸切
				36	9.0	7.4	1.6	良好	暗褐色	糸切
				37	9.3	4.8	1.8	良好	淡褐色	糸切
				38	8.1	6.6	1.5	良好	暗褐色	糸切
				39	9.4	6.7	1.6	良好	暗褐色	糸切
				40	9.6	6.9	1.5	良好	淡褐色	糸切
				41	9.2	7.4	1.4	良好	淡褐色	糸切
				42	8.8	6.5	1.6	良好	淡褐色	糸切

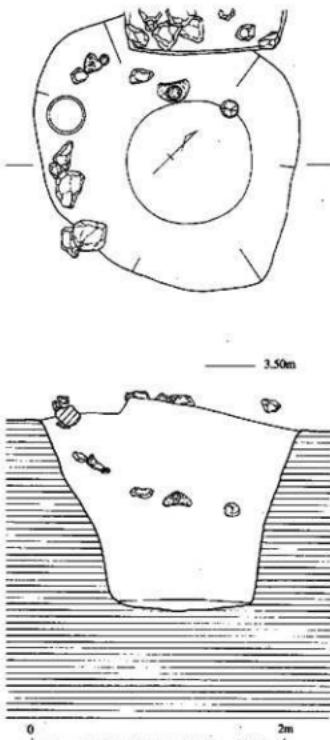


Fig-17 066号遺構実測図 (S=1/40)

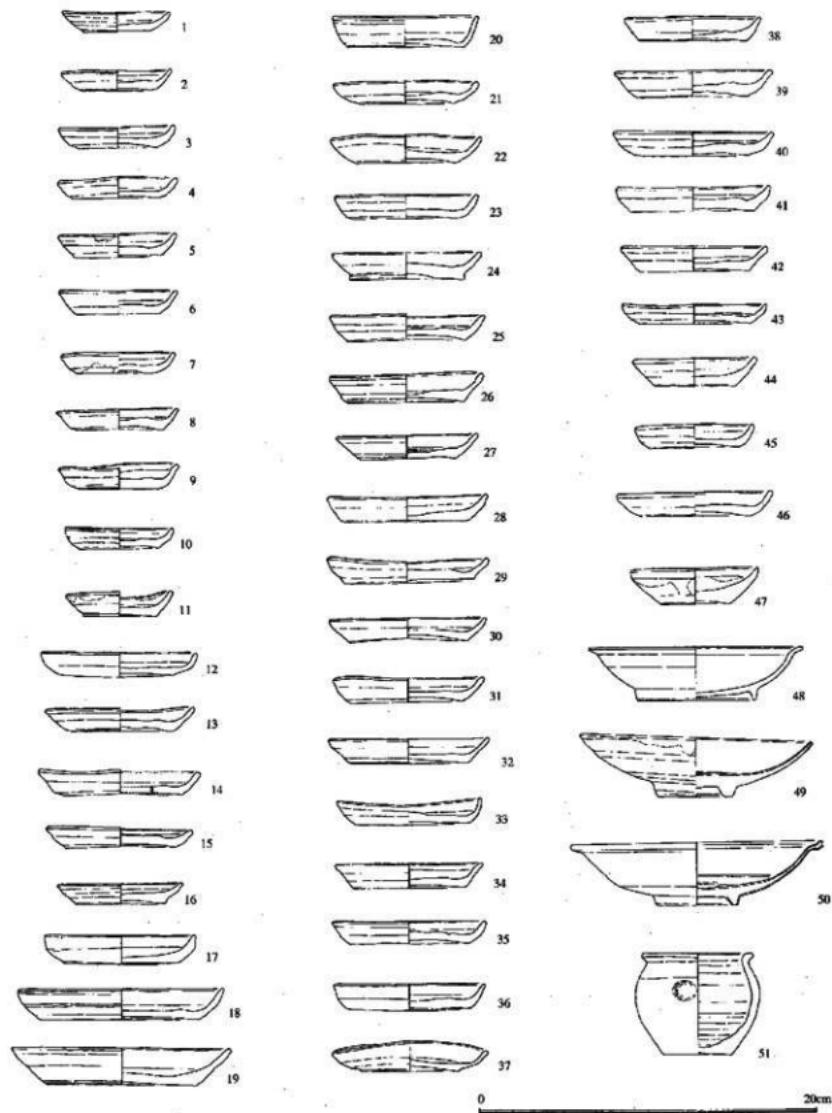


Fig-18 出土遺物実測図 (S=1/3)

43	8.6	6.6	1.3	良好	暗褐色	糸切	45	7.0	5.2	1.4	良好	赤褐色	糸切
44	7.4	4.8	1.6	良好	暗褐色	糸切	46	9.1	6.6	1.4	良好	淡褐色	糸切

Fig-18-47は褐釉陶器の小皿である。口径7.6cm、底径4.0cm、器高2.0cmを測る。48は白磁の碗である。口径12.8cm、高台径6.8cm、器高3.2cmを測る。49は青磁皿である。口径13.8cm、高台径4.7cm、器高3.8cmを測る。内面見込みの周囲の輪を搔き取る。50は白磁碗である。51は褐釉陶器の小壺である。52は青磁花瓶である。獸面の耳を両側面に配する。53は陶器片口鉢である。口径28.2cm、器高12.2cmを測り、色調は暗赤褐色を呈する。54は陶器擂鉢である。口径27.2cmを測り、器高は12.2cmを測る。口縁部下に段を有する。55は土鍤である。残存長4.3cmを測り、最大径は1.4cmを測る。56は土鍤である。全長5.0cm、最大径1.3cmを測る。57は青磁小碗の底部片である。底径は3.8cmを測る。体部には鏡蓮弁文が密に施される。内面見込みには片切彫りで文様が施される。釉調は淡オリーブ色を呈する。58は土製土鈴である。全高3.4cm、全幅2.6cmを測る。型造りの張り合わせで成形される。色調は淡灰褐色を呈する。59は土製人形である。猫の人形である。これも型造りの張り合わせ成形される。60は土製人形である。頭部を欠損するが、体部の表現より犬の人形と考えられる。片側ずつ型で成形し、張り合わせて接合面をナデ調整する。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は17世紀代後半の時期が考えられる。

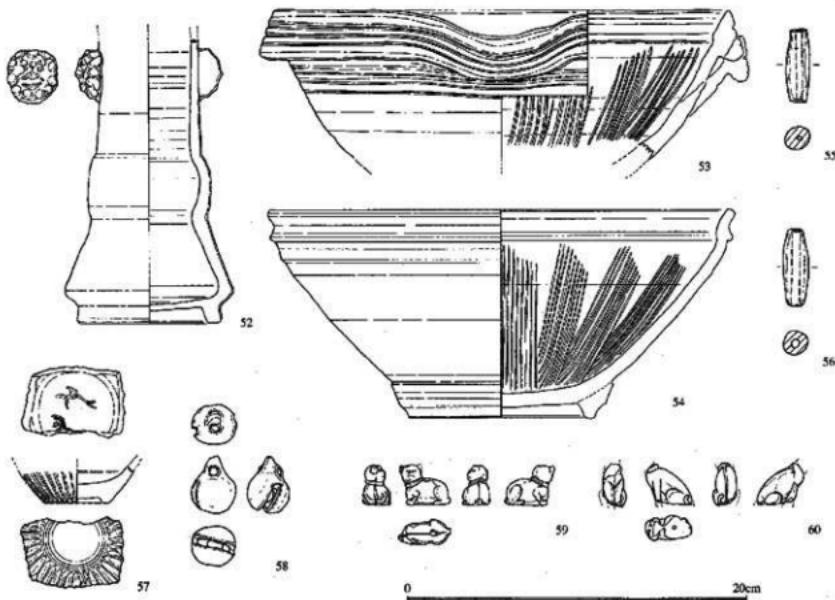


Fig-19 出土遺物実測図 (S=1/3)

069号遺構 (Fig-20)

調査区中央部で検出した上坑である。上坑北側は試掘トレンチによって搅乱・消滅する。平面形は現状では半円形を呈し、直径1.5mを測る。遺構自体は暗褐色砂層面に掘削され、遺構の埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土で、この上層部分に拳大から人頭大の礫・土器などの遺物が含まれる。検出面から底面までの深さは30cm~40cmを測る。検出された礫群は配石されたものではなく、遺構壠没時に投棄されたものと考えられる。

出土遺物をFig-21に示す。

1は土師皿である。口径9.8cm、底径6.2cm、器高1.6cmを測る。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。底部は糸切り調整される。2は上師皿である。口径8.6cmを測り、底部は糸切り調整される。3は褐釉陶器の小皿である。口径7.4cm、底径3.8cm、器高2.0cmを測る。4も褐釉陶器の小皿である。口径8.8cm、底径4.0cm、器高2.4cmを測る。5は褐釉陶器の灯明皿である。上部口径は5.0cm、下部口径は8.0cmを測り、底径は3.3cm、器高は2.7cmを測る。6は唐津焼きの刷毛目碗である。口径10.6cm、高台径3.4cm、器高4.8cmを測る。胎土の色調は暗茶褐色を呈し、内外器面とも横位の刷毛目調整が施される。7は染付け茶入れである。口径7.6cm、底径5.8cm、器高6.1cmを測る。8は陶器の小壺である。口径5.8cm、胴部最大径8.0cmを測り、残存高は6.9cmを測る。色調は暗オリーブ色を呈する。9は上鉢である。片側ずつ型造りで成形した後、張り合わせてナデ調整を施す。刀子状の工具で切り込みを入れる。完形品である。10は陶器の鉢である。口径25.0cm、底径11.4cm、器高10.6cmを測る。底部はヘラ切り調整され、色調は赤褐色を呈する。体部中程に注口を設ける。この他には、青磁・白磁・明染付・瓦質土器などが出土している。066号遺構の出土遺物との接合資料があり、同時期の遺構と考えられた。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は17世紀後半~18世紀前半の時期と考えられる。

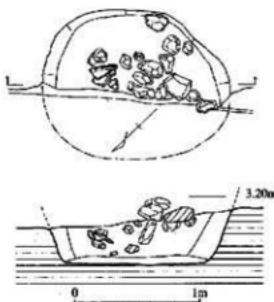


Fig 20 069号遺構実測図 (S=1/40)

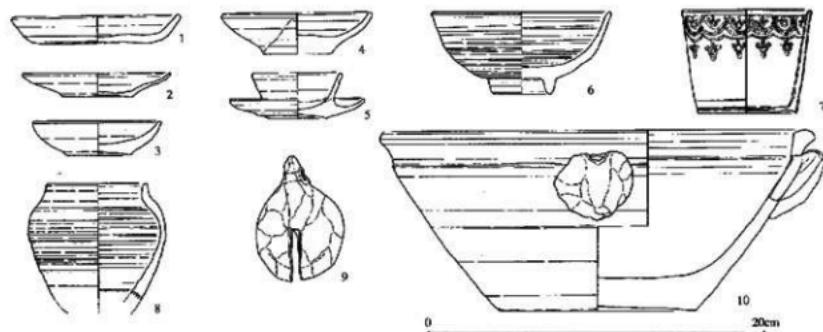


Fig-21 出土遺物実測図 (S=1/3)

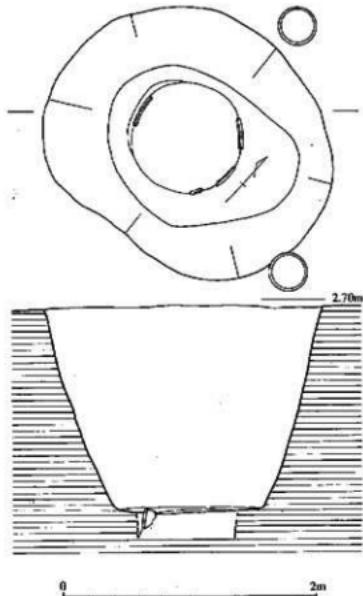


Fig-22 075号遺構実測図 ($S=1/40$)

青磁統である。外器面には鑄連弁文が施される。6は染付碗である。口径13.9cm、高台径8.0cm、器高4.4cmを測る。高台内は二段に削り取られる。内面見込みには文様が施されるが、欠損のため判別できない。7は上箇質上器である。復元口径12.6cm、底径8.4cm、器高1.7cmを測る。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。内面見込みは刷毛目調整が施される。これらの出土遺物よりこの遺構の年代は17世紀後半の時期が考えられる。

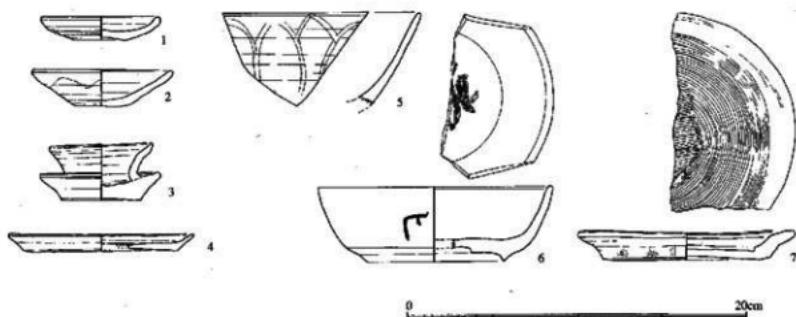


Fig-23 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

075号遺構 (Fig-22)

調査区東側で検出した井戸遺構である。瓦を井筒に使用した井戸で、廃絶時に瓦は抜き取られ、破損した瓦のみが遺存する。平面形はほぼ円形で、直径2.2~2.5mを測る。検出面から底面までの深さは1.7mを測り、底面では井筒の周りに堆積した白色粘土が検出される。本調査地点の現在の涌水点は標高80cm前後であり、井筒は標高1m以下で検出された。遺構上面は廃棄土坑として利用されており、土器片・人頭大の礫が投棄されていた。

出土遺物をFig-23に示す。

1は褐釉陶器の小皿である。口径6.9cm、底径2.9cm、器高1.4cmを測る。底部はヘラ切り調整の後ナデ調整が加えられる。2は褐釉陶器の小皿である。口径8.2cm、底径2.8cm、器高2.3cmを測る。釉調は明褐色を呈する。3は褐釉陶器の灯明皿である。上部口径は5.9cmを測り、器高は3.4cmを測る。焼成は良好で、釉調は赤褐色を呈する。4は土師皿である。口径10.9cm、底径8.9cm、器高1.0cmを測る。底部は糸切りされる。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。5は青磁碗口縁部片である。いわゆる龍泉窯系

17世紀後半の時期が考えられる。

089号遺構 (Fig-24)

調査区東側で検出した土坑である。遺構上面に搅乱が切り込んでいたため、検出段階では平面プランは捉えられなかった。搅乱底部まで掘り下げを行った結果、歪んだ梢円形を呈する土坑となり、堆積状況を観察しながら掘り下げを行った。底面から1m程度のところに人頭大の砾が数点検出されたが、出土状況から埋没途中に投棄されたものと考えられる。検出面から底面までの深さは1.7mを測る。輝土は黒色粘質土をブロック状に挟む暗褐色砂質土である。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物をFig-25に示す。

1は土師皿である。口径6.9cm、底径5.1cm、器高1.0cmを測る。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。底部は糸切り調整される。2は土師皿である。口径6.8cm、底径4.2cm、器高9mmを測る。焼成は良好で色調は明褐色を呈する。3は土師皿である。口径7.5cm、底径5.8cm、器高1.1cmを測る。4は土師皿である。口径8.3cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切り調整される。5は土師皿である。復元口径6.9cm、底径5.0cm、器高1.1cmを測る。底部に穿孔があり、土錐として転用されたものと考えられる。6は土師皿である。口径9.1cm、底径7.5cm、器高1.4cmを測る。7は土師器杯である。体部に穿孔される。8は土師器杯である。外器面に墨書きを持つが、小破片のため判読できない。9は白磁小碗である。口径4.3cmを測る。10はるつぼである。口径4.1cm、器高3.8cmを測る。手捏ねで成形され、内外器面に銅が付着する。銅製品の工房の存在が推定される。11は土錐である。全長3.5cm、最大径1.5cmを測る。12は土錐である。全長4.4cm、最大径1.4cmを測る。

これらの出土遺物よりこの遺構の年代は17世紀代の時期が考えられる。

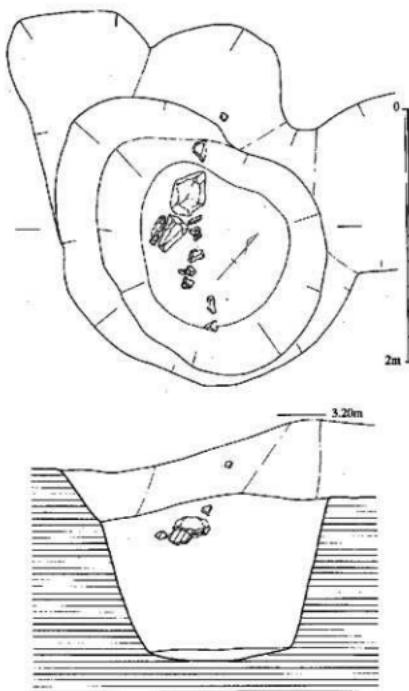


Fig-24 089号遺構実測図 (S=1/40)

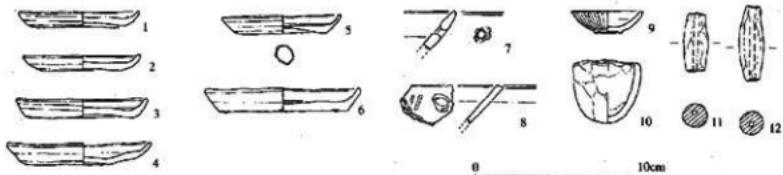


Fig-25 出土遺物実測図 (S=1/3)

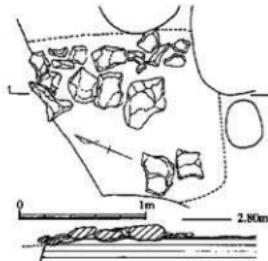


Fig-26 097号遺構実測図
(S=1/40)

097号遺構 (Fig-26)

調査区中央部東側で検出した石組遺構である。1.0m×1.5mの範囲で人頭大の礫を敷き詰めた状況が検出された。東側では比較的、礫が直線的に敷き詰められた状況が検出されるが、遺構北西側は他の遺構などにより消滅していた。東側一辺のみで観察すると、主軸はN-20°-Eの方向を探る。この遺構の南側1m地点では、この軸に直交する方向で3個の礫が検出されており、同一の遺構とすれば、建物の基礎遺構の南東隅部を検出したことになる。礫は扁平なものがほとんどで、標高3.25m前後に面をそろえている。遺物はこの礫群の間から出土した。

出土遺物をFig-27に示す。

1は銅製の仏像である。全高4.4cmを測る。铸造で鋳上がりが悪く、さらに全体に摩滅が進んでおり、細部は観察できないが、頭部の形状より、十一面觀音像と考えられる。立像で天衣が表現される。蓮華座は省略され、方形の台座とする。十一面觀音の名は、本体上に上面ないし十一面の面を持つ事に由来している。十一面の配置は正面三面が慈悲、右側面三面が忿怒、左側面三面が牙をむき、後背一面は大笑、頂上一面が仏果を示す阿弥陀仏面といわれる。2は銅製の仏像頭部片である。残存高2.7cmを測る。中空の铸造仏像である。これも摩滅が激しく、細部は観察できない。頭部の表現より阿弥陀如来仏と考えられる。

3は白磁碗架付けである。高台径4.7cmを測り、見込みには花鳥を配する。高台内には「宣徳年造」の銘が施される。この他には龍泉窯系青磁碗・白磁碗・天目茶碗・師器・土師質土器・陶器などの遺物が出土している。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は16世紀前半頃の時期を考えることができる。



Fig-27 出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)

114号遺構 (Fig-28)

調査区南東側で検出した井戸遺構である。他の遺構に切られるが、平面形は円形で、直径2.8m前後を測る。検出面から1.3m程掘り下げたところで、中央部に井筒の痕跡が検出された。井筒は有機質のものが使用されていたため、腐食し遺存はしていなかったが、壁面に縦方向に残存する繊維の痕跡が観察された。井筒の直径は70cm前後を測る。標高80cm前後の涌水点付近まで掘り下げたが、これ以下は涌水が激しく崩壊するため掘り下げは行わなかった。井筒掘方内からは瓦片などが出土したが、後世に投棄されたものと考えられる。

出土遺物をFig-29に示す。

1は土師皿である。口径8.6cm、底径6.0cm、器高1.1cmを測る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。底部はヘラ切り調整の後、板目圧痕が施される。2は土師皿である。口径9.0cm、底径7.5cm、器高1.9cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で色調は橙色を呈する。3は土師皿である。口径7.0cm、底径4.6cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切り調整される。4は青磁碗である。復元口径13.0cmを測る。5は青磁碗である。龍泉窯系青磁碗である。復元口径は17.8cmを測る。

6は染付碗である。口径14.2cm、高台径8.6cm、器高4.2cmを測る。7は明染付基筋底皿である。口径10.2cm、底径2.2cm、器高2.6cmを測る。内面見込みには梅の文様が施される。この他には白磁・青磁・陶器・土師質土器・瓦質土器・羽口・瓦などの遺物が出土した。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は15世紀後半～16世紀前半の時期が考えられる。

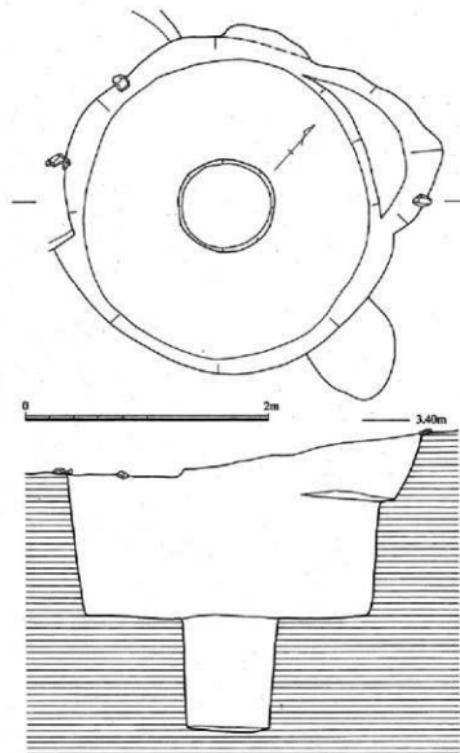
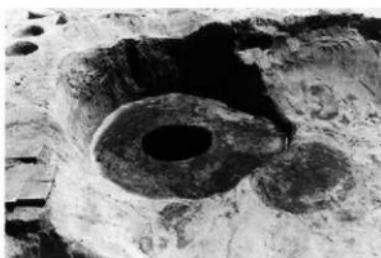


Fig-28 114号遺構実測図 (S=1/40)



Ph.11 114号遺構完掘状況 (北西から)

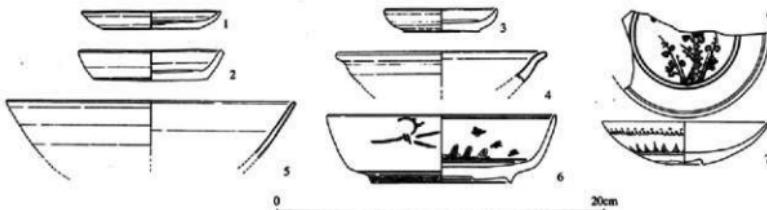


Fig-29 出土遺物実測図 (S=1/3)

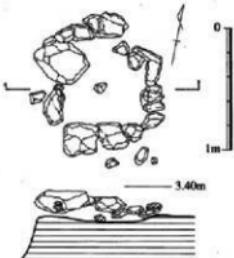


Fig-30 115号遺構実測図
(S=1/40)

1は土師器壺である。復元口径8.2cmを測る。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。2は白磁碗である。復元口径13.8cmを測る。直線的に開く体部を持つ。被熱のため釉は溶け落ちる。3は土師器壺底部である。底径は8.0cmを測り、糸切り調整される。この他には黒釉陶器片・土師質土器捏鉢などが出土している。これらの出土遺物よりこの遺構の年代は16世紀代の時期が考えられる。

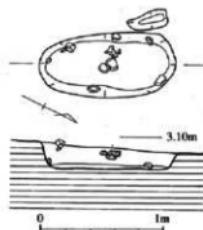


Fig-31 124号遺構実測図
(S=1/40)

115号遺構 (Fig-30)

調査区中央部南東側で検出した方形石組遺構である。約1.0m×1.0mの範囲に拳大から人頭大の礫を用いて方形の石組を造る。この石組遺構の主軸はN-14°-Eの方向を探る。検出した石組は最下段の一段分のみであるが、本来は二段以上の石組が組まれていたものと考えられる。現状で石組の上面は標高3.4m前後を測る。石組内には炭化物などを含む暗褐色砂質土が堆積していたが、その用途を推測できるような所見や遺物の検出はなかった。このような石組遺構は博多遺跡群内の他の調査区でも検出されるが、その用途は解明されていない。地下式貯蔵庫の下部・便所などの用途が考えられている。出土遺物をFig-32に示す。



Ph.12 115号遺構検出状況（東から）

124号遺構 (Fig-31)

調査区南側で検出した土坑である。平面形は梢円形で、長軸1.1m×短軸0.5m前後を測り、検出面から底面までの深さは25cmを測る。土坑壁際に数点の礫が検出されるが、意図的に配置したものではなく投棄されたものと考えられる。遺構の主軸はN-26°-Eの方向を探る。埋土は暗褐色砂質土で、少量の炭化物を含む。埋土に含まれる砂粒は他の遺構の埋土に比べ細かい。

出土遺物をFig-32に示す。

4は土師器壺である。復元口径は14.8cmを測る。器厚はたいへん薄

く2mm前後を測る。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。5は糸切の土師皿である。口径8.4cm、底径6.6cm、器高1.5cmを測る。6は土師器坏である。口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.6cmを測る。7は土師皿である。口径7.4cm、底径5.4cm、器高1.5cmを測る。8は土師器坏である。口径12.9cm、底径9.0cm、器高2.9cmを測る。9は瓦質土器の捏鉢である。色調は灰白色を呈する。

これらの出土遺物よりこの遺構の年代は15世紀後半～16世紀前半の時期が考えられる。

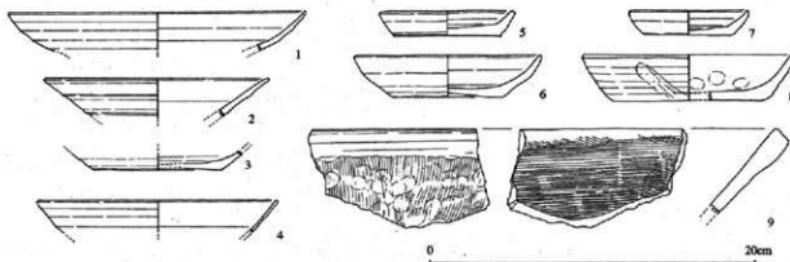


Fig-32 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

柱穴列（掘立柱建物）(Fig-33・Fig-34)

調査区全域で検出された柱穴列群であり、調査区内では掘立柱建物としてはまとめられないが、一定の規則性を持って構築された遺構群である。検出された柱穴列はN-19°~20°-Eの方向、またはそれに直交する主軸方向を探る。柱穴は90cm前後の間隔で検出され、調査区中央部付近で検出された柱穴列は布壠状の溝を伴い、底面には扁平な根石を据えている。調査区北側は第一面の調査においては、すでに基盤層である褐色砂層面が検出されており、柱穴列もこの褐色砂層面上で検出されていた。調査区南側では柱穴列は暗褐色砂層面上で検出されていたため、第二面の調査にあわせて掘り下げを行ったところ、第二面においても同じような主軸方向を持つ柱穴列が検出された。本調査区において検出された遺構の多くは、この柱穴列とほぼ同じ主軸方向を持って構築されている。隣接する第75次調査地点・第83次調査地点においても、本調査区で検出された柱穴列と同方向の軸を持つ遺構群が検出されており、付近一帯の街区の方向性を示すものと考えられる。

第一面においては、標高3.30m付近で検出され、第二面においては標高2.80m前後で検出される。この区画は太閤町割以前、比較的長期間にわたって存続していたものと考えられる。

出土遺物をFig-35に示す。



Ph.13 柱穴群検出状況 (北から)



Ph.14 柱穴群検出状況・部分 (北から)

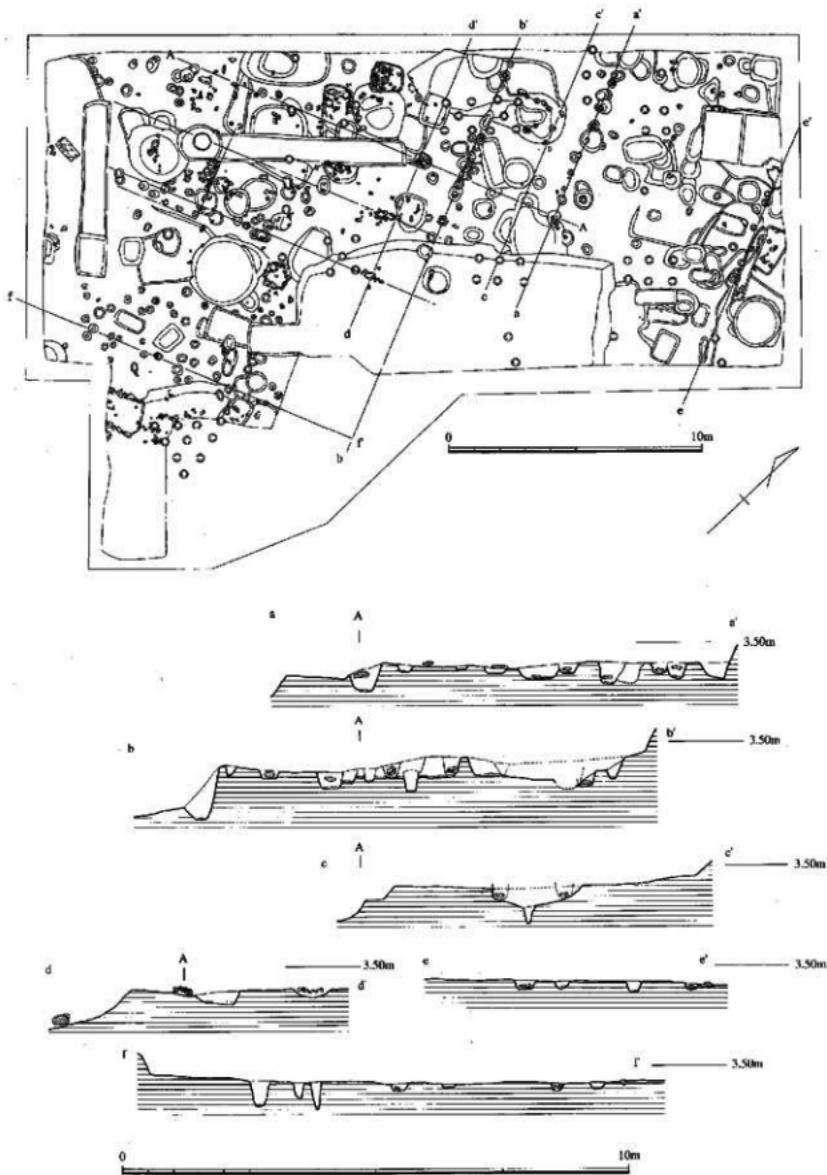


Fig-33 造構実測図 ($S=1/200 \cdot 1/100$)

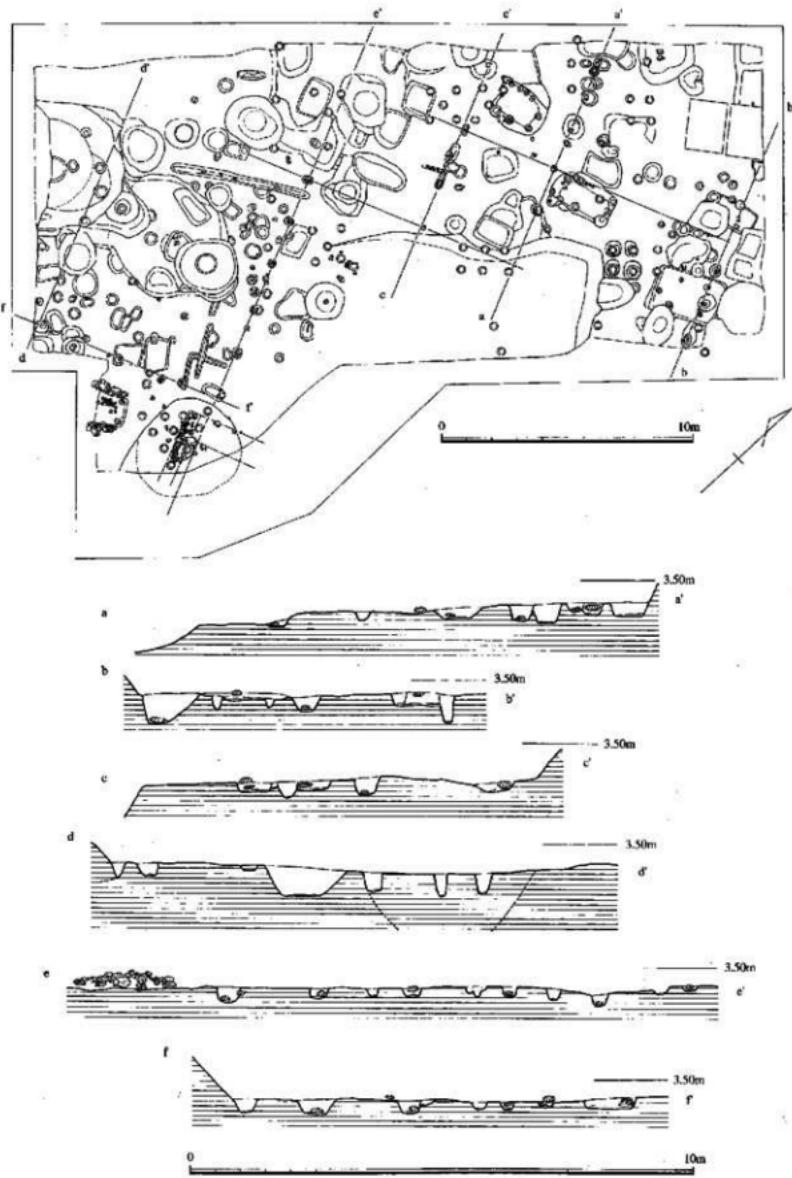


Fig-34 遺構実測図 ($S=1/200 \cdot 1/100$)

Fig-35-1・2は土師器坏である。小片であるため、法量は計測できない。底部はともに糸切り調整される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。3・4・6～18は土師器の坏である。3は口径11.2cm、底径7.8cm、器高2.7cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。4は口径12.4cm、底径8.7cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。6は口径11.5cm、底径8.2cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。7は口径11.4cm、底径8.0cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。8は口径12.1cm、底径8.0cm、器高3.0cmを測る。底部は糸切りで板目圧痕を持つ。色調は淡褐色を呈する。9は口径13.0cm、底径8.4cm、器高2.8cmを測る。10は口径13.5cm、底径10.2cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切り調整され、色調は淡褐色を呈する。11は口径13.0cm、底径9.8cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。12は口径8.4cm、底径6.6cm、器高1.9cmを測る。色調は褐色を呈する。13は口径13.0cm、底径8.6cm、器高2.6cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。14は口径12.4cm、底径8.0cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。15は口径12.4cm、底径7.4cm、器高3.1cmを測る。色調は淡褐色を呈する。16は口径11.4cm、底径6.8cm、器高2.7cmを測る。色調は淡褐色を呈する。17は口径13.4cm、底径9.2cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。18は口径14.0cm、底径9.6cm、器高2.9cmを測る。底部は糸切りで色調は淡褐色を呈する。5は青磁碗高台である。龍泉窯系青磁碗である。高台内に墨書きを持つが判読できない。19は東播系須恵器の鉢である。口径は22.2cmを測る。色調は濃灰色を呈する。

これらの出土遺物より、この遺構群の年代は15世紀後半～16世紀初頭の時期が考えられる。

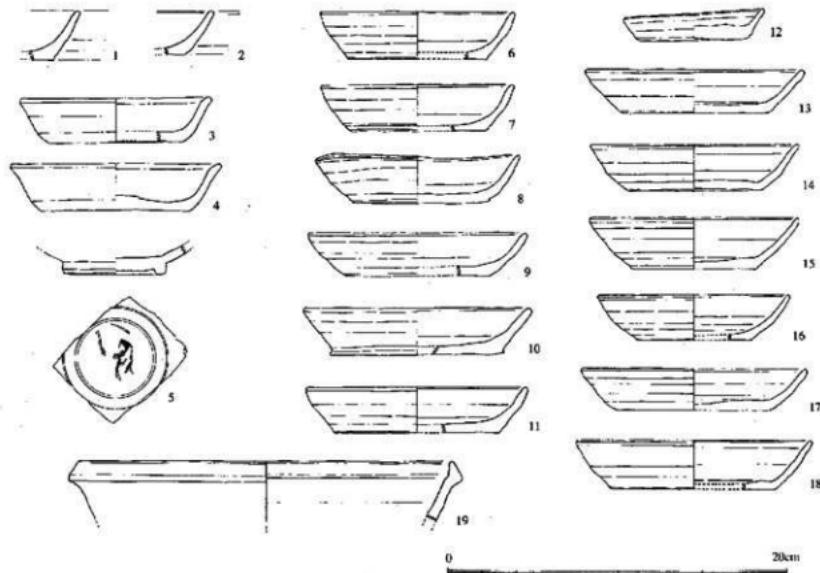


Fig-35 出土遺物実測図 (S=1/3)

(b) 第二面の調査

第一面調査終了後に、褐色粗砂層面上に堆積する暗褐色砂質土層を除去し検出した遺構面である。前述のように、調査区北側半分では褐色粗砂層面は第一面において既に検出されていたため、調査区南側部分のみ掘り下げを行い、第二面の遺構検出を行った。

第二面において検出された遺構は、井戸遺構・方形土坑・石組遺構・溝状遺構・掘立柱建物などの遺構群である。また、遺構検出と同時に第一面で完掘できなかった遺構の掘り下げを行った。

第二面において検出された井戸遺構は、調査区西側に集中する。掘方の直径は4m以上を測り、井筒は桶などの有機質のものが使用されていたとみられ、壁面に痕跡が確認されるだけで桶などは遺存していない。なお、本調査地点での涌水は標高80cm前後である。

040号・238号遺構などの方形土坑は、土坑底面にはば等間隔で並ぶ柱穴を備えていることより、何らかの覆い屋状の施設が上部に伴うことが考えられる。これらの遺構もまた第一面で検出される遺構群と同様の主軸方向で構築されている。長屋などの集住施設に伴う半地下式の倉庫などの貯蔵施設としての用途が考えられる。

調査区東側で検出された掘立柱建物の柱穴は、人頭大の扁平な根石を持ち、約1.4m前後の間隔で掘削されている。第一面では布掘状遺構が伴うが、第二面では検出されなかった。この掘立柱建物の柱穴群は、第一面すでに検出されていたものもあるが、暗褐色砂質土を除去するとわずかに主軸を達えた柱穴群が新たに検出される。遺構の検討を行った結果、柱穴群はわずかに切り合いながらも、主軸方向を逸れて掘削されたものであることが判明したため、建物の建て替えに伴う柱穴遺構の重複と考えた。隣接する第83次調査地点では同様な遺構が柵遺構として報告されていたが、本報告では他の遺構との位置関係より短冊状の地割り内に建てられた建物遺構として取り扱った。

今回検出された多くの遺構の主軸方向は、磁北より $19\sim20^\circ$ 東側に偏った主軸方向を探る。16世紀末に行われた太閤町割によって区画された街区は、磁北より西側へ 34° 偏っており、現在の博多の町並みは基本的にこの街区を継承している。これまで博多跡遺群の博多浜側で行われた調査では、太閤町割が施行される直前まで存続していた道路とそれによって区画される街区が検出されている。道路遺構は13世紀末から14世紀初頭頃に整備が実施され、縱筋（南東～北西方向）の基幹道路とそれをつなぐ数条の支線道路が造られている。中世後半期の景観としては、太閤町割ほど全域に渡って施されたものには及ばないが、小規模な長方形区画と短冊状地割りが採用されていたものと考えられる。博多浜東側に位置する聖福寺付近で行われた調査においても、現在の町筋とは異なる主軸の建物遺構が検出されており、これらの建物遺構は聖福寺の伽藍配置と方向を同じく探る。聖福寺付近では太閤町割以後も、今まで中世後半期の街区を留めている地点もある。



Ph.15 第二面全景（東から）



Ph.16 第二面全景（南東から）

博多浜に対する息浜側では、太閤町割以前の街区を示す遺構の検出事例は断片的で少ないが、第68次地点・第75次地点・第83次地点などからは、太閤町割以前の街区の方向を示す遺構が検出されている。これらの調査成果より当時の息浜では博多浜と異なる主軸方向で街区が設定されていたことが伺える。息浜南部域の陸地化は11世紀末頃の時期と考えられており、12世紀初頭には博多浜と結ぶ陸橋部が埋め立てて造られ、息浜北側にくらべ比較的早い時期に開発されたものと考えられる。博多浜で検出される幹線道路も息浜南端部付近まで整備されていたことが確認されており、この道路によって区画された遺構が検出される。

291号遺構とした石組遺構は、既存建物の杭によって部分的に擾乱されているが、建物の基礎遺構の北西隅部と考えられる。この遺構もまた磁北より20°程度東側に偏った主軸方向で構築されている。

南東側は擾乱のため消滅している。292号遺構とした井戸遺構は、291号遺構の構築以前に掘削された井戸遺構であるが、この遺構の南側では博多跡群の基盤層であり、第二面の隣層である褐色粗砂層は検出されず、井戸遺構自体も暗褐色砂の整地土中に構築されていた。遺構完掘後に南側土層を観察したところ、井戸底の標高1m以下にも暗褐色砂が堆積していたことから、この暗褐色砂が谷地形を埋めた際の埋土であることが判明した。この遺構掘方付近と砂丘の落ちが同じ位置にあったため、掘削時には判明しなかった。調査終了後に確認のため、南側部分において土層トレントを設定・掘り下げを行ったが、標高0m以下まで暗褐色砂は堆積していた。

土師器一括廃棄遺構として、171号・224号・225号・226号遺構などを検出した。171号遺構では石組の中に30枚以上の土師皿が床面より15cm程浮いた状態で検出された。279号遺構からは人骨の上腕部が出土した。本来は土塙墓などに埋葬された遺骸が、後世に井戸掘削などの理由で一部が掘り出され改葬したものであろうか。本調査区では土塙墓などの埋葬遺構は検出されなかった。



Ph.17 第二面西側調査状況（南東から）



Ph.18 第二面東側調査状況（南から）



Ph.19 第二面北西側調査状況（東から）



Ph.20 第二面全景（東から）

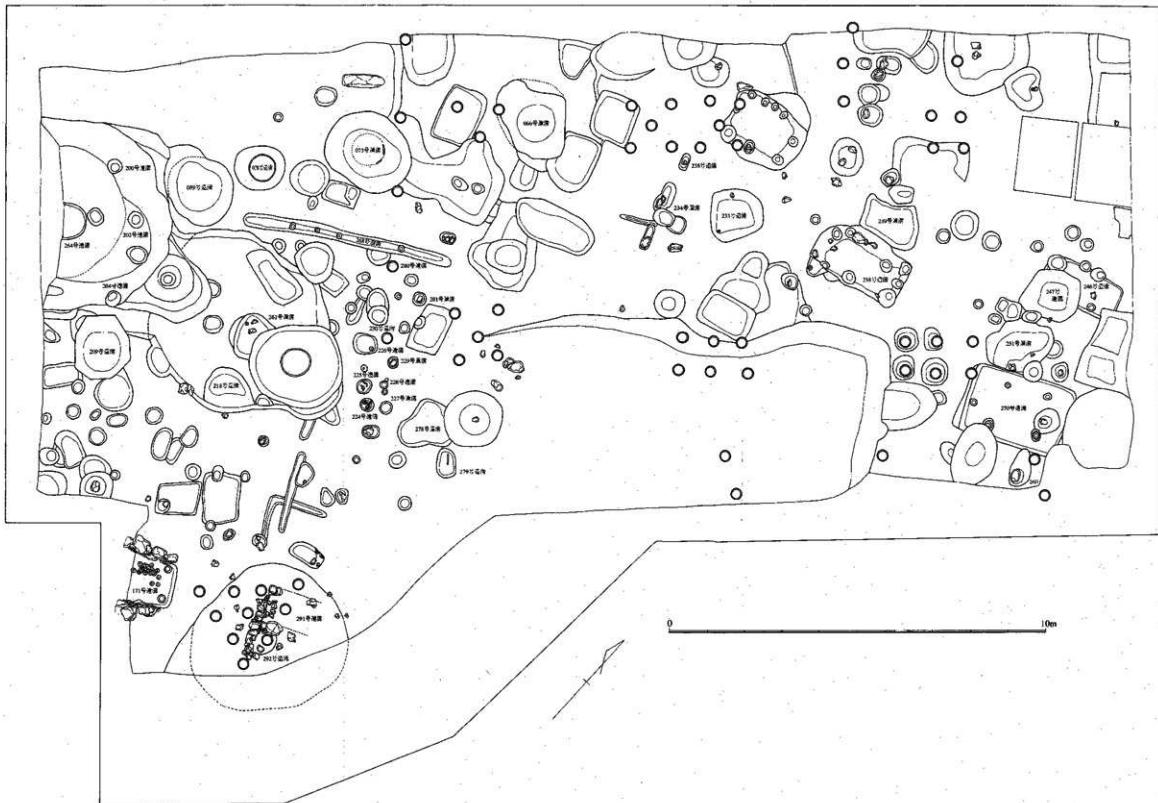


Fig-36 第二面造構配置図 (S=1/100)

171号遺構 (Fig-37)

調査区南端部で検出した石組遺構である。石組の上面は第一面の調査の時点においても検出されており、その段階では115号遺構同様に石組一段の残存と考えていたが、遺構内部の掘り下げを行った結果、石組が良好に残存していることが確認された。南側半分は掘削に伴う壁面崩壊のおそれがあるため、北側半分のみ調査を行った。石組遺構は褐色砂層面上に方形土坑を掘削した後に構築されており、石組に使用されている礫は10cm程度のものから30cm以上の人頭大のものがあり、遺構内面に向けて面をそろえるように構築される。調査した部分での石組は三段分が検出され、底面からの高さは約1m前後を測る。内面の幅は底面で1.2m、上部で1.3m前後を測り、上方に向かってやや開き気味に構築されている。遺構底面の北側両隅には柱穴が検出され、これを繋ぐような形で暗褐色砂の溝状の落ち込みが検出された。このような状況から、この石組遺構は北側一辺を除いた三辺が石組で構築され、残る北側一辺は木材などを壁材として用い、裏から杭で土留めしていたことが想定される。

遺構内には上層より、暗褐色砂質土・暗褐色砂・褐色砂の三層が交互に堆積し、土層の中央部はレンズ状に堆積する。遺構の底面から高さ40cm付近には暗褐色粘質土が堆積しており、埋没が一時中断し、上部が解放されていた時期があることが分かる。この時点では、この遺構は廐棄土坑として利用されていたと考えられ、暗褐色粘質土層面の上部には土師皿が大量に投棄されていた。土師皿は合計28枚以上が検出され、すべて正位の状態で検出された。

出土遺物をFig-38に示す。

1~31は土師皿である。底部はすべて糸切り調整される。3と5には板目圧痕が見られる。1は口径6.7cm、底径3.6cm、器高1.4cmを測る。2は口径7.3cm、底径4.2cm、器高1.5cmを測る。3は口径10.6cm、底径7.1cm、器高2.1cmを測る。4は口径10.2cm、底径6.6cm、器高2.2cmを測る。



Ph.21 171号遺構遺物出土状況（東から）



Ph.22 171号遺構遺物出土状況・部分（東から）



Ph.23 171号遺構石積北側（南から）



Ph.24 171号遺構石積南側（北から）

5は口径10.8cm、底径6.0cm、器高2.5cmを測る。6は口径10.1cm、底径6.5cm、器高2.0cmを測る。7は口径10.6cm、底径7.1cm、器高1.9cmを測る。8は口径10.2cm、底径6.7cm、器高2.2cmを測る。9は口径10.1cm、底径6.8cm、器高2.1cmを測る。10は口径9.8cm、底径6.8cm、器高2.1cmを測る。11は口径10.2cm、底径6.6cm、器高2.3cmを測る。12は口径9.9cm、底径6.5cm、器高2.0cmを測る。13は口径

10.0cm、底径7.1cm、器高2.2cmを測る。14は口径10.2cm、底径6.9cm、器高2.2cmを測る。15は口径9.9cm、底径6.6cm、器高2.0cmを測る。16は口径10.6cm、底径7.2cm、器高2.2cmを測る。17は口径9.8cm、底径7.2cm、器高2.4cmを測る。18は口径10.2cm、底径6.7cm、器高2.4cmを測る。19は口径10.3cm、底径6.4cm、器高2.1cmを測る。20は口径9.8cm、底径7.2cm、器高2.4cmを測る。21は口径9.9cm、底径6.8cm、器高2.3cmを測る。22は口径10.2cm、底径6.9cm、器高2.1cmを測る。23は口径10.2cm、底径7.1cm、器高2.2cmを測る。24は口径10.3cm、底径7.0cm、器高2.2cmを測る。25は口径9.9cm、底径6.9cm、器高1.8cmを測る。26は口径9.9cm、底径6.6cm、器高1.9cmを測る。27は口径10.0cm、底径6.7cm、器高2.1cmを測る。28は口径10.8cm、底径6.6cm、器高2.3cmを測る。29は口径10.4cm、底径7.2cm、器高2.2cmを測る。30は口径9.7cm、底径6.6cm、器高2.1cmを測る。31は口径11.5cm、底径4.8cm、器高3.0cmを測る。32は白磁碗である。口径14.8cm、高台径5.5cm、器高6.2cmを測る。33は白磁高台付皿である。34は上鍤である。35は染付碗である。36は土師質土器の擂鉢である。これらの出土遺物より、この遺構の年代は15世紀後半から16世紀前半頃の時期を考えることができる。

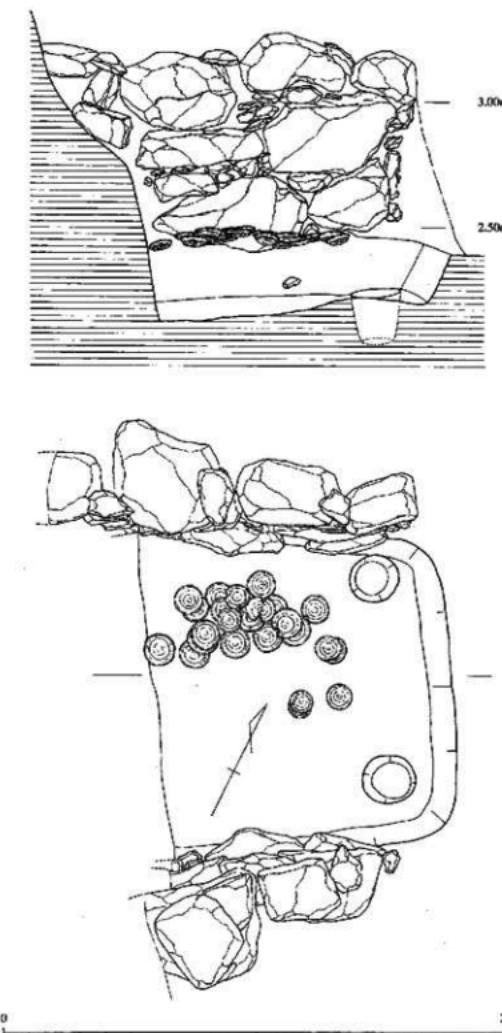


Fig-37 171号遺構実測図 (S=1/20)

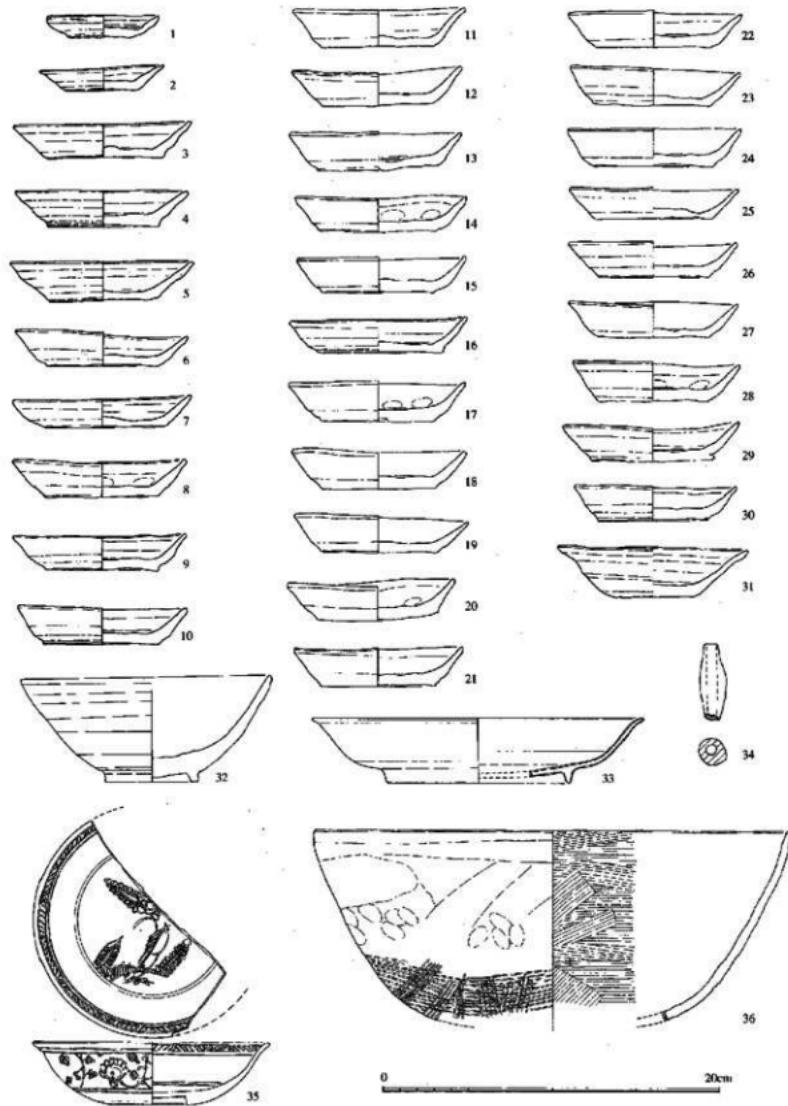


Fig. 38 出土遺物実測図 (S=1/3)

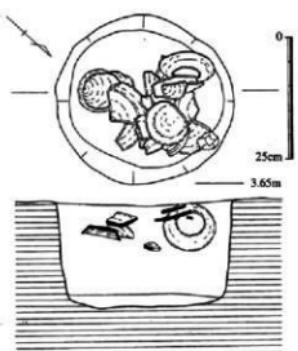


Fig-39 224号遺構実測図 (S=1/10)

師器の壊である。6は口径13.4cm、底径8.8cm、器高2.8cmを測る。7は口径13.4cm、底径9.6cm、器高2.5cmを測る。8は口径13.2cm、底径9.8cm、器高2.6cmを測る。9は口径13.0cm、底径7.8cm、器高2.4cmを測る。10は白磁蓋筒底皿である。口径10.3cm、底径4.6cm、器高2.3cmを測る。これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀前半頃の時期が考えられる。



Ph.25 224号遺構遺物出土状況 (南から)

224号遺構 (Fig-39)

調査区中央部南側で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、直径35cmを測り、検出面から底面までの深さは20cm前後を測る。遺構は褐色砂層面に掘り込まれ、埋土は炭化物を多く含んだ暗褐色砂質土である。埋土中からは廃棄されたと考えられる破損した土師皿・完形の白磁皿が検出された。

出土遺物をFig-40に示した。

1～5は土師皿である。2は口径8.8cm、底径6.4cm、器高1.4cmを測る底部は糸切りされ、板目圧痕が施される。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。3は口径9.0cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切りされ、ナデ調整が施される。4は口径8.4cm、底径6.0cm、器高1.5cmを測る。5は口径9.0cm、底径6.8cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切りの後、ナデ調整が加えられる。6～9は土

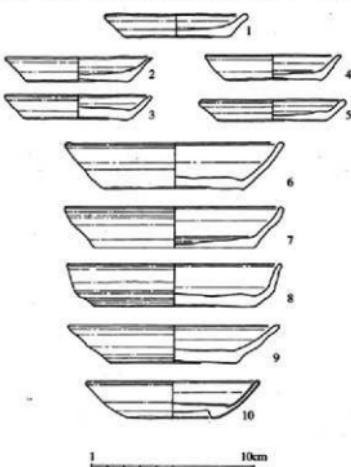


Fig-40 出土遺物実測図 (S=1/3)

225号遺構 (Fig-41)

調査区中央部南側で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で40cm×35cmを測る。遺構の主軸はN-8°-Eの方向を探る。検出面から底面までの深さは10cm前後を測る。224号遺構同様に褐色砂層面上において検出され、埋土は5mm程度の小砾を含む暗褐色砂質土である。この土坑からも廃棄されたと考えられる土師皿・白磁碗が検出された。

出土遺物をFig-42に示した。

1～4は土師皿である。1は口径7.8cm、底径5.2cm、器高1.3cmを測り、底部は糸切りされる。

焼成は良好で、色調は褐色を呈する。2は口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.0cmを測る。底部は糸切りの後、板目圧痕が施される。3は口径9.4cm、底径7.0cm、器高1.0cmを測る。4は口径9.6cm、底径8.0cm、器高1.8cmを測る。底部は糸切り調整され、板目圧痕が加えられる。焼成良好で、色調は淡赤褐色を呈する。5は土師器の坏である。口径13.2cm、底径7.5cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りされ、板目圧痕が加えられる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。6は白磁碗である。復元口径11.0cmを測る。これらの出土遺物から、この遺構の年代は13世紀後半から14世紀前半の時期を考えることができる。

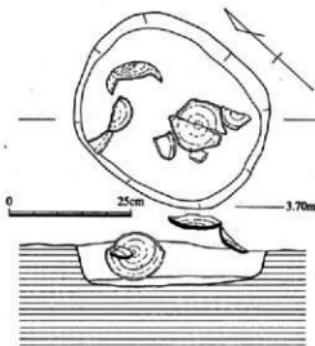


Fig-41 225号遺構実測図 ($S=1/10$)

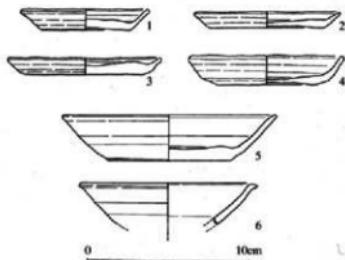
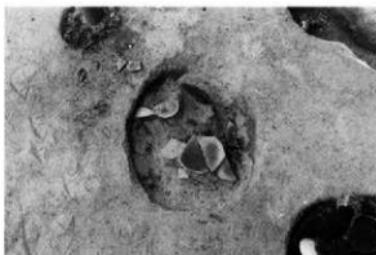


Fig-42 出土遺物実測図 ($S=1/3$)



Ph.26 225号遺構遺物出土状況 (南から)

226号遺構 (Fig-43)

224号遺構・225号遺構と隣接して調査区中央部南側で検出された土坑である。平面形は西側が歪んだ椭円形で直径50cm前後を測る。検出面から底面までの深さは15cm前後を測り、遺構底面の北側砂層面には鉄分が沈着している。埋土は炭化物・焼土・粒子の粗い粗砂を含んだ暗褐色砂質土である。遺構の底面西側で逆位の状態で土師皿を検出した。

出土遺物をFig-44に示した。

1・2は土師皿である。口径は8.6cm、9.2cmを測る。3・4は土師器の坏である。口径は11.0cm、12.8cmを測り、底部は共に糸切り調整される。これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀代と考えられる。

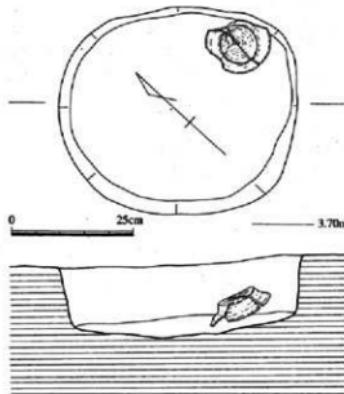


Fig-43 226号遺構実測図 ($S=1/10$)

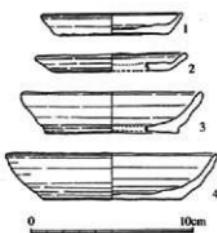


Fig-44 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph.27 226号遺構遺物出土状況 (西から)

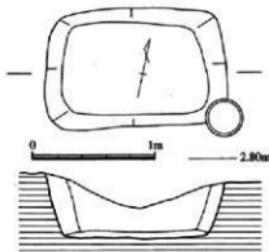


Fig-45 233号遺構実測図 (S=1/40)

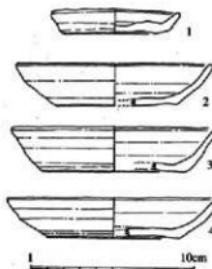


Fig-46 出土遺物実測図 (S=1/3)

238号遺構 (Fig-47)

調査区中央部東側で検出した土坑である。平面形は長方形で、 $2.4m \times 1.3m$ を測る。遺構の主軸はN-80°-Eの方向を探る。検出面から底面までの深さは40cm~50cmを測る。第一面で検出された040号遺構と同様に土坑底面壁際に直径20cm~40cmの柱穴状の土坑が検出された。土坑四隅とそれを繋ぐ形で柱穴は検出されたことから、この遺構にもむらかの上部構造が伴っていたことが考えられる。柱穴は20cm~60cmの深さを測る。根石などは検出されなかった。遺構は褐色砂層面で検出され、埋土は

233号遺構 (Fig-45)

調査区中央部東側の擾乱際で検出した土坑である。平面形は長方形で、 $75cm \times 50cm$ を測る。検出面から底面までの深さは40cm~50cmを測る。遺構長軸の主軸はN-77°-Wの方向(短軸側ではN-13°-E)を探る。遺構は褐色砂層面で検出され、埋土は粗い暗褐色砂であった。底面はほぼ平坦で、遺構内部では柱穴などは検出されなかつた。半地下式の貯蔵用施設の下半部と考えられる。

出土遺物をFig-46に示した。

1は土器皿である。口径7.8cm、底径5.7cm、器高1.5cmを測り、底部は糸切り調整される。焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈する。

2~4は土器器坏である。2は口径11.8cm、底径7.5cm、器高2.6cmを測る。3は口径12.6cm、底径8.8cm、器高2.7cmを測る。4は口径12.8cm、底径8.0cm、器高2.5cmを測る。いずれも底部は糸切り調整され、焼成は良好である。色調は暗褐色から淡褐色を呈する。

これらの他に、白磁口禿皿・龍泉窯系青磁碗などの遺物が出土している。出土遺物より、この遺構の年代は14世紀前半頃の時期と考えられる。

上層が暗褐色砂質土、下層には暗褐色砂が堆積していた。土坑上面には人頭大の礫が検出されたが、これは遺構廃絶後に建てられた掘立柱建物の根石と考えられる。遺構の性格としては040号遺構同様の半地下式の貯蔵施設と考えた。

出土遺物をFig-48に示した。

1は土師皿である。口径7.6cm、底径5.4cm、器高1.7cmを測る。底部は糸切り調整の後、板目圧痕が加えられる。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。2は土師皿である。口径8.0cm、底径5.9cm、器高1.7cmを測る。3は土師器壺である。口径14.8cm、底11.0cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りされる。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。4は土師器壺である。口径15.2cm、底径10.0cm、器高2.6cmを測る。底部は糸切り調整され、焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈する。5は陶器鋤鉢である。復元口径は31.2cmを測る。外器面はナデ調整され、内器面は上方へのナデ調整が施される。この他には、白磁碗・龍泉窯系青磁碗・東播系須恵器鉢などの遺物が出土している。これらの遺物より、この遺構の時期は14世紀前半頃の時期が考えられる。

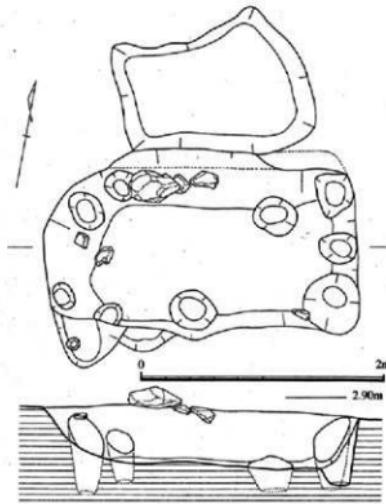


Fig-47 238号遺構実測図 (S=1/40)

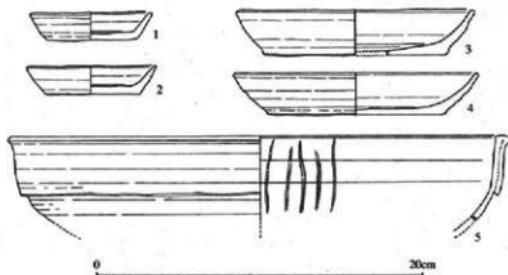


Fig-48 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph.28 238号遺構完掘状況（西から）



Ph.29 238号遺構完掘状況（東から）

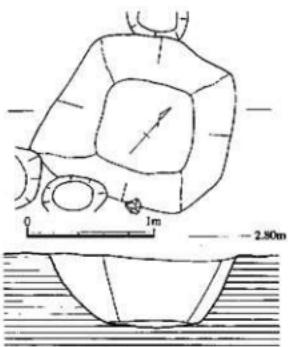


Fig-49 247号遺構実測図 (S=1/40)
調査区北東側で検出した土坑である。平面形は現状では南西側が歪んだ方形で、およそ1.4m×1.3mを測る。このゆがみは崩壊のためである。検出面から底面までの深さは60cm前後を測る。埋土は炭化物を含んだ暗褐色砂質土で、暗黄褐色粘質土のブロックが混入する。遺構底面はほぼ平坦であり、部分的に灰褐色粗砂が検出された。遺構の上軸はN-71°-Eの方向を探る。

247号遺構 (Fig-49)

調査区北東側で検出した土坑である。平面形は現状では南西側が歪んだ方形で、およそ1.4m×1.3mを測る。このゆがみは崩壊のためである。検出面から底面までの深さは60cm前後を測る。埋土は炭化物を含んだ暗褐色砂質土で、暗黄褐色粘質土のブロックが混入する。遺構底面はほぼ平坦であり、部分的に灰褐色粗砂が検出された。遺構の上軸はN-71°-Eの方向を探る。

出土遺物をFig-50に示した。

1は李朝粉青沙器碗である。口径16.8cm、高台径5.2cm、器高7.4cmを測る。外器面はヘラナデで成形された後に、斜位の刷毛目調整が施される。内器面もヘラナデ調整の後に、刷毛目調整が施される。内面見込み付近には指頭圧痕が観察できる。高台は削りだしで、露胎となる。胎上は灰白色を呈する。2は瓦質土器の火鉢である。復元口径42.8cm、復元底径38.0cm、器高11.4cmを測る。この他には、白磁碗・陶器などの遺物が出土している。出土遺物より、遺構の年代として14世紀後半から15世紀前半の時期が考えられる。

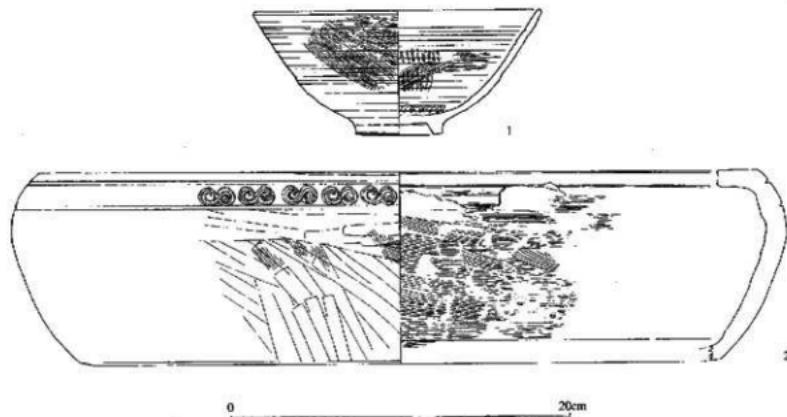


Fig-50 出土遺物実測図 (S=1/3)

261号遺構 (Fig-51)

調査区中央部東側で検出した井戸遺構である。東西方向で114号遺構・208号遺構などの他の遺構に切られ、掘方の一部が崩壊しているが、平面形は円形を呈する。直径は4.8m前後を測り、検出面から井筒の痕跡を検出する面までの深さは80cm~90cmを測る。遺構周辺では汚れた褐色砂層面が遺構面となり、遺構の埋土はほぼ同質の褐色砂であったため、掘り下げを行いながら掘方壁の確認を行った。井筒の部分には黒褐色砂質土が堆積していたため、有機質の井筒の検出が予想されたが、すでに腐食・消滅しており井戸枠自体の検出はなかった。井筒は標高80cm前後の深さまで掘削されており、涌

水点まで達していた。遺物の出土量は少量で、いずれも細片である。井筒痕の中からは廃絶時に投棄されたと考えられる碟・瓦片が数点出土した。

出土遺物をFig. 52に示した。

1は土師皿である。口径9.2cm、底径6.8cm、器高1.3cmを測る。2は上師器の壺である。口径11.2cm、底径9.0cm、器高2.5cmを測る。1・2ともに底部は糸切りされ、板目压痕が見られる。焼成は良好で、色調は暗褐色・淡赤褐色を呈する。3は瓦質土器の擂鉢である。復元口径は25.0cmを測る。外器面は

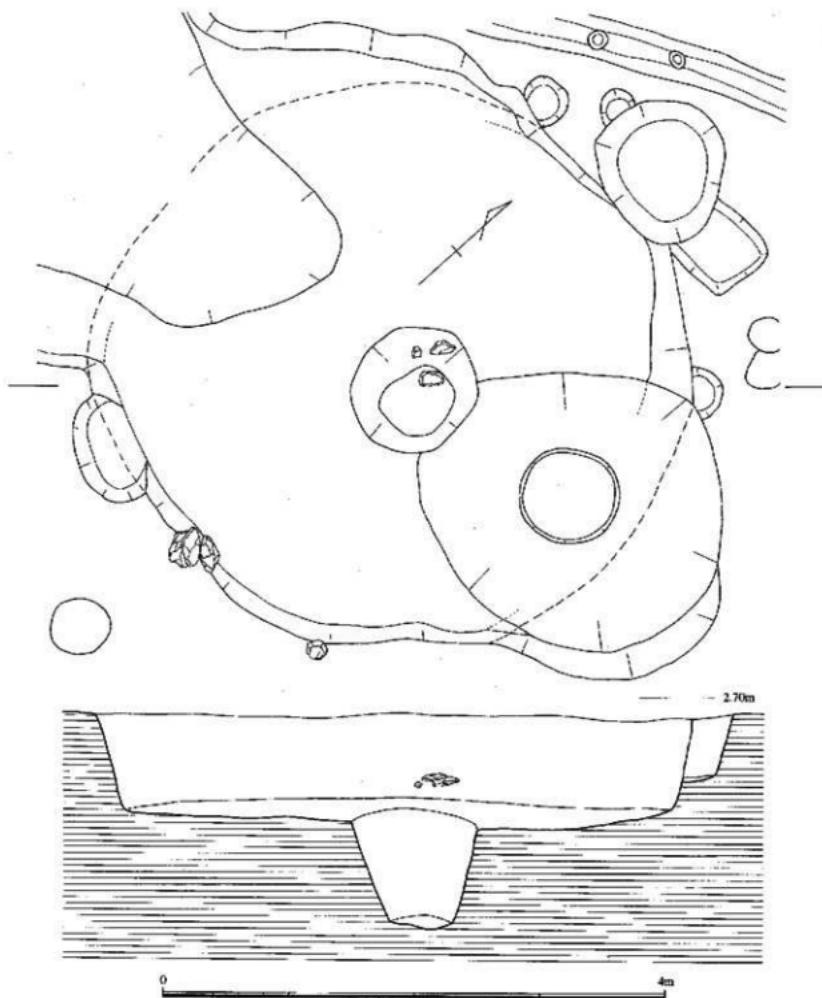


Fig. 51 261号遺構実測図 (S=1/40)

横位の刷毛目調整が施される。この他には、白磁壺・龍泉窯系青磁碗・陶器などが出土している。遺物より、この遺構の年代は14世紀後半の時期が考えられる。



Fig-52 出土遺物実測図 (S=1/3)

264号遺構 (Fig-53)

調査区西側端部で検出した井戸遺構である。南側半分は調査区外に位置しており、北側半分のみ調査を行った。復元すると平面形は円形で、直径は5.5mを測る。検出面から1.3mの深さで掘方の底面が検出され、その中心付近に井筒の痕跡が検出された。掘方内部には暗褐色砂と褐色砂が5cm程度の厚さで交互に堆積していた。井筒内からは縱方向の炭化した木質の圧痕が検出され、井戸枠には桶などの有機質のものが使用されていたことが推定される。井筒の直径は1m前後を測り、掘方底面から深さ30cm前後で涌水する。井筒内には粘性のある黒褐色砂質土が堆積する。出土した遺物は土師器皿のみで、出土量は少なくいずれも細片である。

出土遺物をFig-54に示した。

1は土師皿である。口径7.4cm、底径5.4cm、器高1.2cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。2は土師器の壺である。口縁部は欠損する。底径は8.6cmを測り、

底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。3は土師器の壺である。口径15.0cm、底径10.2cm、器高2.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。図示した遺物の他には土師器の皿・壺のみが少量出土しただけであるため、時期は特定しがたいが、他の遺構との切り合いにより14世紀代の時期が考えられる。



Ph.30 264号遺構完掘状況（東から）



Ph.31 268号遺構完掘状況（東から）

268号遺構 (Fig-53)

調査区中央部西側で検出した溝状遺構である。幅30cm前後、断面は逆台形を呈し、検出面からの底面までの深さは20cm~25cmを測る。底面には約60cm間隔で直径10cm前後、溝底部よりの深さ10cm前後の柱穴が検出される。検出された溝の主軸はN-61°-Eの方向を探る。埋土は暗褐色砂であり、少量の炭化物を含んでいた。この他にも調査区内第二面では複数の溝状遺構が検出されているが、そ

の方向はおおむね N-60°-E (=N-30°-W) 前後の方向を探る。屋敷などに伴う一連の遺構群として捉えることができよう。これらの遺構は、第一面・第二面で検出された N-19°-E 前後の主軸方向を持つ柱穴列群 (Fig-33・34) に切られており、それ以前の街区・町割の方向性を示しているものと考えられる。

出土遺物を Fig-54 に図示した。

4 は土師皿である。口径 9.2cm、底径 7.4cm、器高 9 cm を測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。5 は土師皿である。口径 9.2cm、底径 6.6cm、器高 1.2cm を測る。底部

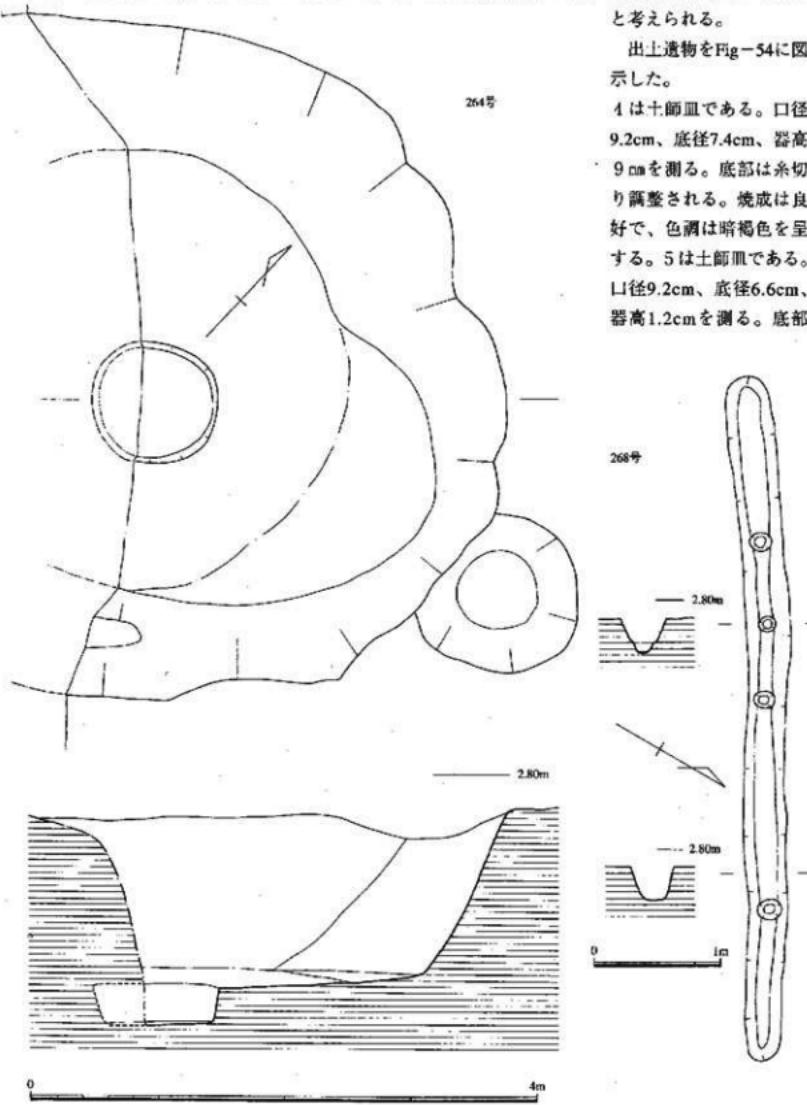


Fig-53 264号・268号遺構実測図 (S=1/40)

は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は暗赤褐色を呈する。6は白磁碗である。口縁部の軸を拭き取った口禿碗である。復元口径は17.2cmを測る。この他には龍泉窯系青磁碗などが出土している。出土遺物より、遺構の時期は13世紀後半から14世紀前半の時期が考えられる。

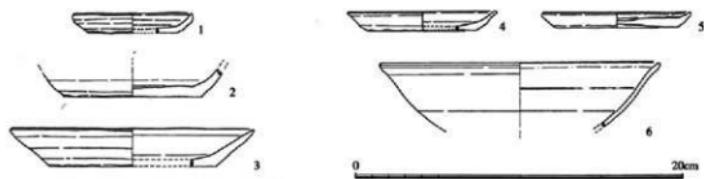


Fig-50 a Fig-54 出土遺物実測図 (S=1/3)

270号遺構 (Fig-55)

調査区東側隅付近で検出した土坑である。平面形は長方形で、 $2.7m \times 1.9m$ を測る。検出面から底面までの深さは20cm前後の浅いもので、上部は大幅に削平されているものと考えられる。遺構底面には直径15cm～20cm前後の柱穴が検出される。柱穴は遺構の底面から深さ10cm前後を測る。根石などは検出されなかった。遺構の埋土は炭化物を含んだ暗褐色砂で、焼土などが混入する。遺構の主軸はN-63°～E前後の方向を探り、268号遺構などとほぼ同じ方向性で構築されている。遺物は白磁碗・青磁碗などの貿易陶磁器、土師器、瓦質土器などが出土した。いずれも細片で出土量も少ない。

出土遺物をFig-56に示した。

1は土師器の壺である。小片であるため、法量などは計測できない。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。2は土師器の壺底部片である。復元底径は9.0cmを測る。底部は糸切り調整され、色調は淡褐色を呈する。3は白磁碗である。小片であるため法量は計測できない。玉縁状の口縁を持つ。体部

上半部まで施釉し、それ以下は露胎とする。釉調は乳白色を呈する。4は瓦質土器の擂鉢である。復元口径23.2cmを測る。外器面には指頭圧痕が残り、内器面は刷毛目調整が施される。色調は濃灰色を呈する。出土遺物より、この遺構の時期は13世紀後半から14世紀前半までの時期が考えられる。

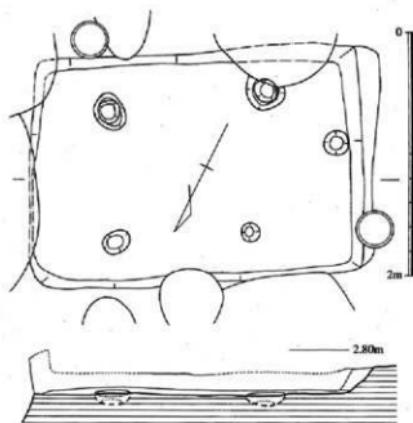


Fig-55 270号遺構実測図 (S=1/40)



Ph.32 270号遺構完掘状況 (東から)

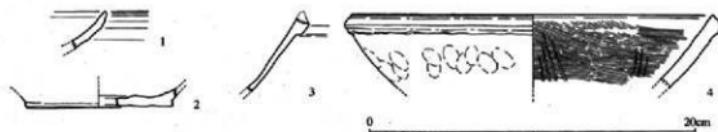


Fig. 56 出土遺物実測図 (S=1/3)

279号遺構 (Fig. 57)

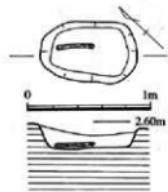


Fig. 57
279号遺構実測図
(S=1/40)

調査区中央部南側で検出した土坑である。平面形は椭円形で長軸80cm、短軸50cm、検出面から底面までの深さは20cm前後を測る。土坑底面からは人骨の上腕骨が検出された。両端部は欠損しているが、残存長30cm前後を測り、全体的に遺存状態はよい。井戸などの掘削作業中に一部だけが出土し、再埋葬されたものと考えられる。調査区内では土壙墓などの埋葬遺構は検出されていない。博多遺跡群の他の調査区でも人骨の一部分のみだけが出土する場合があり、それらの場合も再埋葬と考えられる。出土した遺物は土師皿の細片一点だけで、遺構の時期は確定できない。

291号遺構 (Fig. 58)

調査区南西隅部で検出した建物基礎遺構である。西側の一辺だけが残存しており、他の三辺は過去の擾乱によって失われていた。使用されている磚は15cm程度の拳大のものから40cm前後の人頭大のものがある。石組は現状で二段分の長さ2m分が残存している。石組の上面は標高2.9m前後でそろえられる。遺構の主軸は、残存する一辺で計測するとN-22°-Wの方向を探る。石組の北端からは東側に展開する石列の一部が検出されており、建物基礎の北西隅部を検出したものと考えられる。この遺構は第一面においても石材の散乱した状況が検出されていたが、攪乱され石列として検出されなかったため、第二面まで掘り下げて調査を行った。遺物は龍泉窯系青磁碗、土師器皿、土鍋片など出土した。

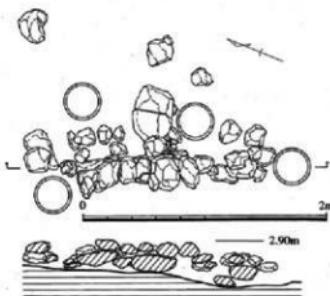


Fig. 58 291号遺構実測図 (S=1/40)



Ph.33 291号遺構検出状況（南から）



Ph.34 291号遺構検出状況（東から）

遺構の範囲・規模などは現状からは推測できる部分が少なく、遺物も細片であり、時期を特定することはできなかったが、検出された主軸方向などから14世紀代の時期を考えることができる。

292号遺構 (Fig-59)

調査区南西隅部で検出した井戸遺構である。南東側半分は調査区の都合により調査できなかつたため、北西側のみの調査となつた。平面形は東西方向に伸びる楕円形で、直径は4.5m前後を測る。井戸の掘方に過去の建物の基礎杭が位置していたため、これらの隙間を掘削する形で調査を行つた。遺構の埋土は暗褐色砂質土で、これに黒褐色粘質土が挟まる形で堆積する。井戸壁面を観察すると北西側では褐色砂が基盤層となるが、南西側では暗褐色砂の壁面となる。南側では褐色砂は検出されず、標高80cmの涌水点以下も暗褐色砂の堆積が続く。井筒は検出面から1.4m程掘り下げた地点で検出された。有機質の桶などが使用されていたものと考えられ、遺存していなかつた。井筒の周囲には灰色粘土が検出される。涌水は標高80cmの地点である。この井戸遺構上面には291号遺構とした建物基礎遺構が構築されており、検出時には井戸遺構に伴う井桁施設の基礎遺構とも考えられたが、291号遺構は井筒の直上に位置していることから、関連性のないものと考えた。

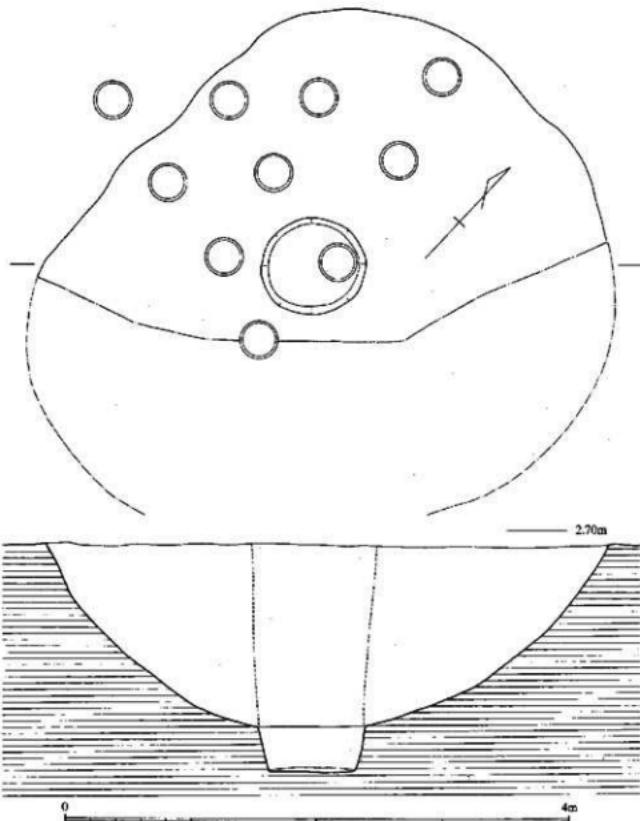


Fig-59 292号遺構実測図 (S=1/40)

291号遺構は、この井戸遺構廃絶後に構築されたものであろう。遺物は白磁器・青磁器などの貿易陶磁器、土師器皿、火舎などの瓦質土器、国産陶器などが出土している。

出土遺物をFig-60に示した。

1は土師皿である。口径8.4cm、底径6.8cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切り調整で切り離される。2は土師皿である。口径8.0cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測る。底部は静止糸切りされる。3は土師皿である。口径8.2cm、底径6.8cm、器高1.6cmを測る。底部は糸切りされる。4は土師器の坏である。復元口径11.4cmを測る。薄手の造りで、器厚は2mm前後を測る。5は玉縁白磁碗である。復元口径17.4cmを測る。釉調は乳白色を呈する。6は龍泉窯系青磁鉢である。復元口径は16.0cmを測る。内外器面とも氷裂が走る。釉調は緑白色を呈する。7は龍泉窯系青磁碗である。復元口径は17.8cmを測る。体部上半部まで施釉し、下半部は露胎とする。釉調は緑灰色を呈する。8は備前焼の擂鉢である。復元口径25.2cmを測る。釉調は淡茶褐色を呈する。これらの出土遺物より、遺構の年代は13世紀後半の時期を考えることができる。



Ph.35 292号遺構完掘状況（北から）

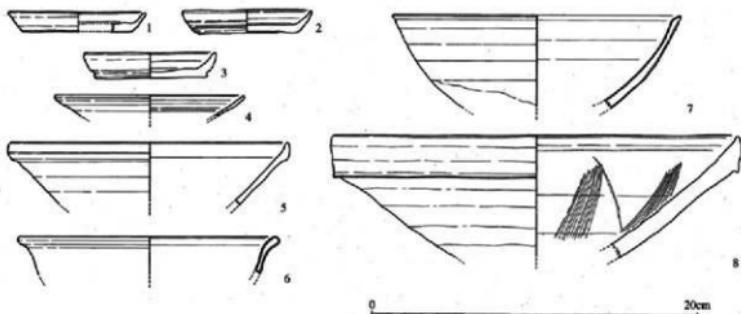


Fig-60 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

(c) 第三面の調査

第三面の調査は、調査区南側の約40m²の部分について行った。第二面は褐色砂層面上で遺構面を設定し調査を行ったが、調査区南側では一部暗褐色砂が遺構面となっていたことから、第二面の調査終了後に掘り下げを行った。この暗褐色砂を除去した褐色砂層面を第三面として調査を行った。第三面の標高は2.4m前後を測る。遺構は少数の土坑・溝状遺構が検出されただけである。土坑も平面形を確実に検出できるものではなく、浅い窪み状を呈するものばかりであった。このような土坑内の埋土は上層より、赤褐色焼土と暗褐色砂質土の混合層、炭化物と貝殻の混合層、焼土と炭化物の混合層、白色粘土と貝殻の混合層と堆積する。これらの土層は明瞭な立ち上がりを検出することができなかつたが、調査区北側に向かって徐々に立ち上がりを見せ、調査区南側へ向けて下がる状況であった。本調査区付近は、海岸近くに位置するものの貝殻等が検出されたのは、この第三面のみであった。陸地化直後の漁業活動などの生活痕跡であろうか。この第三面とした褐色砂層面を掘り下げると、白磁の破片が出土する。これらの白磁は12世紀代に属するもので、付近一帯が陸地化した年代を示すものであると考えられる。また、土坑の堆積状況の観察から本調査区が砂丘南側斜面上に位置していることが

確認され、陸地化直後は砂丘背面に位置した比較的安定した地点であったことが推測される。これまで行われた周辺の調査からは、息浜の頂部は調査区南側に位置する現在の昭和通り付近にあったことが判明している。この頂部は息浜の南側部分に東西方向に伸びる形で位置している。今回の調査成果から、この頂部より北側に別の尾根線が存在していたことが推定される。おそらく、この尾根線も息浜頂部より派生するものであると考えられる。



Ph.36 第三面遺構検出状況（西から）



Ph.37 調査区西側土層堆積状況（東から）

(d) その他の出土遺物 (Fig-61・62)

Fig-61-1～16は土錘である。各法量は以下の表に列記した。17は石製品である。全長4.2cmを測る。18は土製紡錘車である。直径5.2cm、厚さ4mmを測る。19・20はるつばである。銅が器面全体に付着する。21は馬の土製人形である。22は犬の土製人形である。23は褐釉陶器の灯明皿である。接合痕より剥離する。24は青磁灯明皿である。25は李朝粉青沙器碗である。26は白磁皿である。27は白磁碗底部片である。28は土製の型である。猿面の型である。29は陶製鳥形水注である。30は磁器の人形灯心押である。15世紀後半のものである。31は白磁染付碗である。32は白磁染付碗である。

土錘計測表 () 内は残存長

	全長	最大径	焼成・色調		全長	最大径	焼成・色調
1	4.7cm	1.9cm	良好・赤褐色	9	4.8cm	1.5cm	良好・茶褐色
2	4.6cm	1.6cm	良好・灰褐色	10	(3.9cm)	1.6cm	良好・暗褐色
3	4.2cm	1.2cm	良好・赤褐色	11	4.5cm	1.8cm	良好・灰褐色
4	(3.8cm)	1.4cm	良好・茶褐色	12	5.0cm	1.3cm	良好・赤褐色
5	4.3cm	2.0cm	良好・明褐色	13	(4.9cm)	1.8cm	良好・赤褐色
6	4.6cm	1.2cm	良好・赤褐色	14	4.8cm	1.6cm	良好・茶褐色
7	(4.0cm)	1.2cm	良好・赤褐色	15	(3.0cm)	1.5cm	良好・赤褐色
8	4.5cm	0.8cm	良好・茶褐色	16	4.3cm	1.6cm	良好・赤褐色

Fig-62-1・2・4・6・7・9～11・15～18・22・24・29～32は土師皿である。口径は5.8cm～9.40cmを測り、底部はすべて糸切り調整される。18は墨書きを持つが小片であるため、判読できない。3は青磁高坏である。口径7.4cm、底径4.2cm、器高5.7cmを測る。5は鉄軸陶器の灯明皿である。8は軒丸瓦である。12・13・14・25は土師器の坏である。口径10.8cm～13.0cmを測り、底部は糸切り調整

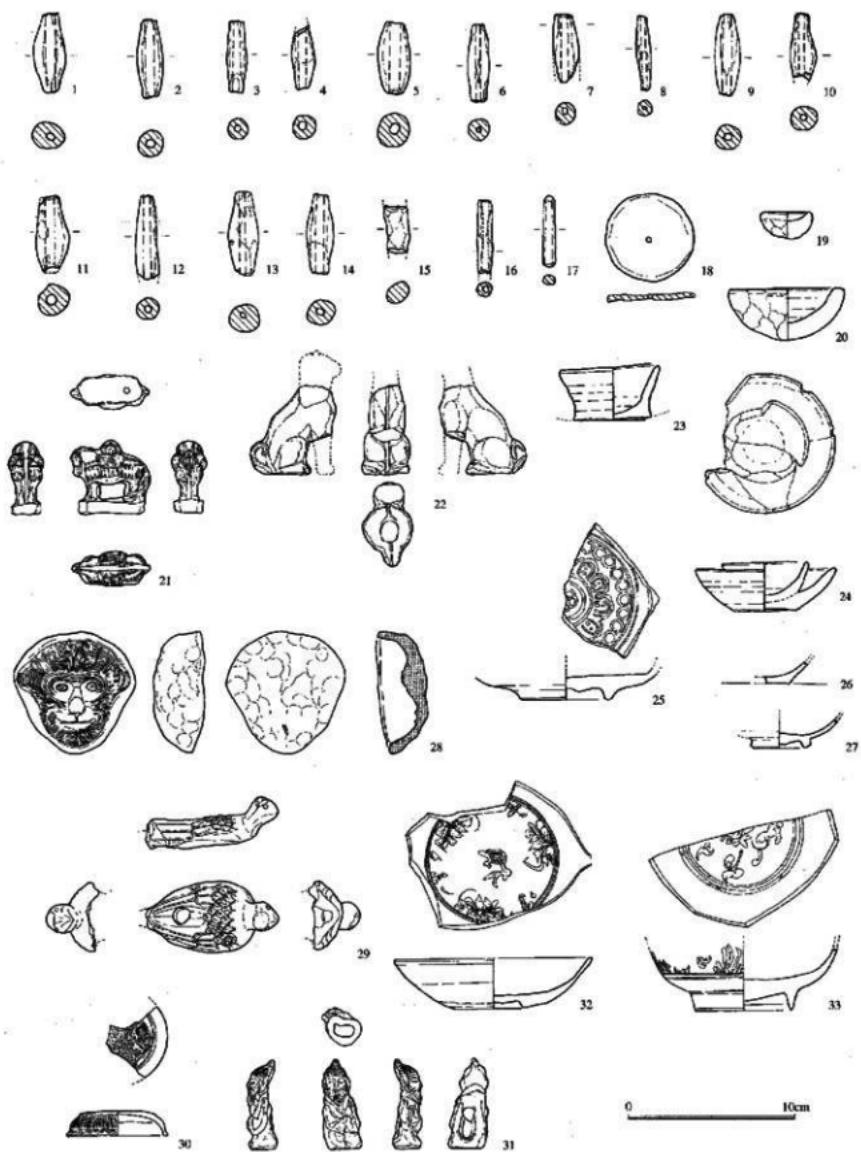


Fig-61 その他の出土遺物実測図1 (S=1/3)

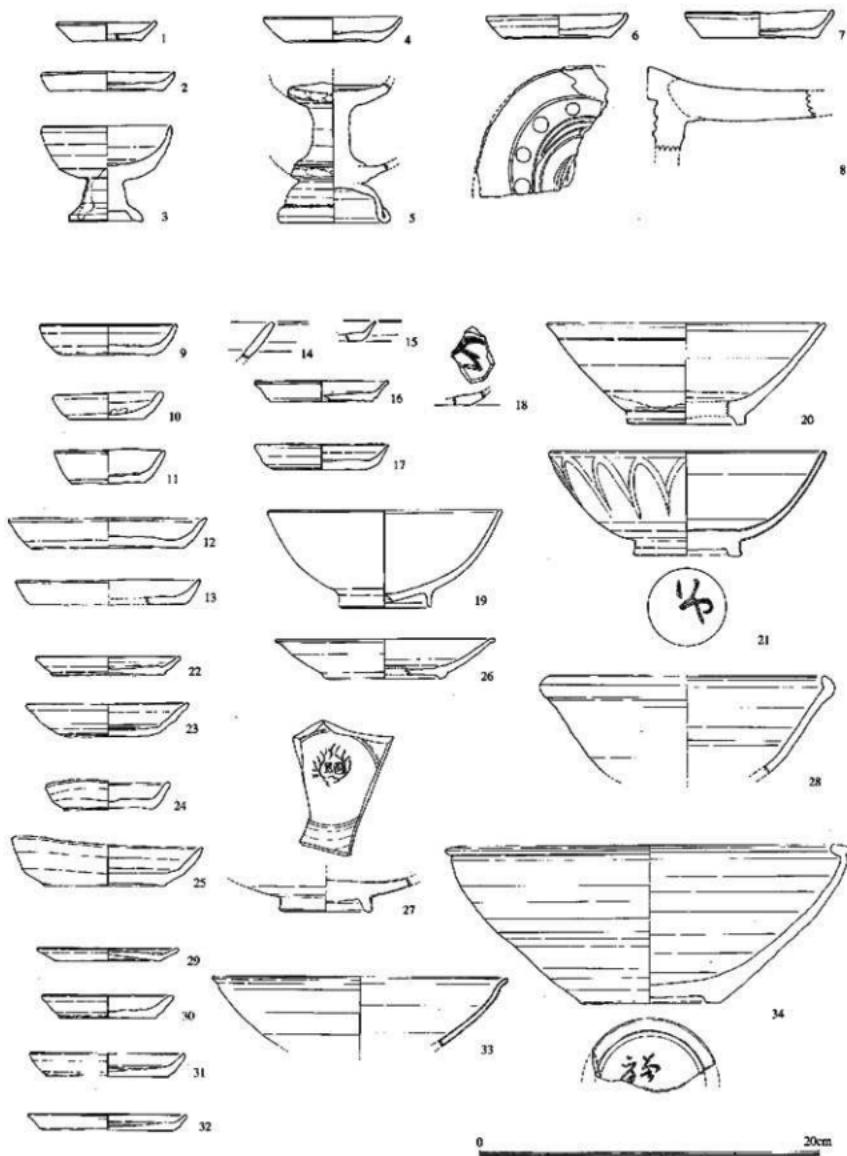


Fig-62 その他の出土遺物実測図 2 (S=1/3)

される。19は白磁蓮子碗である。20は白磁碗である。口径16.6cm、器高6.1cmを測る。21・27・33は龍泉窯系青磁碗である。21は口径16.6cm、高台径6.4cm、器高6.3cmを測り、高台内に墨書を持つ。27は高台部片で内面見込みに草花文と線刻を持つ。33は復元口径17.4cmを測る。23は陶器小皿である。口径9.6cm、底径4.6cm、器高2.0cmを測る。26は白磁浅碗である。口径13.0cm、高台径6.6cm、器高2.4cmを測る。28は瓦質土器の擂鉢である。復元口径は17.6cmを測る。34は中国陶器B群鉢である。底部には墨書を持つ。「祥」か。



Ph.38 出土遺物・磁器人形 (Fig-61-30)



Ph.39 出土遺物・銅製皿 (Fig-63-1)

(e) 銅製品 (Fig-63)

1は銅製皿である。下半部の大部分は欠損する。復元口径9.0cm、器高3.6cm前後を測る。器壁は0.8mm～1mm前後を測る。叩き出し成形されたものである。仏具の一種と考えられる。2は066号遺構出土の銅製の飾金具である。下半部は欠損しているため、全体の形状は不明である。残存長4.5cm、残存幅1.8cm、器壁の厚さは0.8mmを測る。3は069号遺構出土の飾金具である。直径3.8cm、器高0.6cmを測る。上面は金メッキが施される。錫のため表面の文様は全体を知り得ないが、柄の文様の一部が観察できる。型抜き成形されたものであろう。4は291号遺構出土のガラス玉である。直径3.4mm、厚さ2.4mmを測る。緑青色の本体の周囲に白色のガラスを帯状に巡らす。

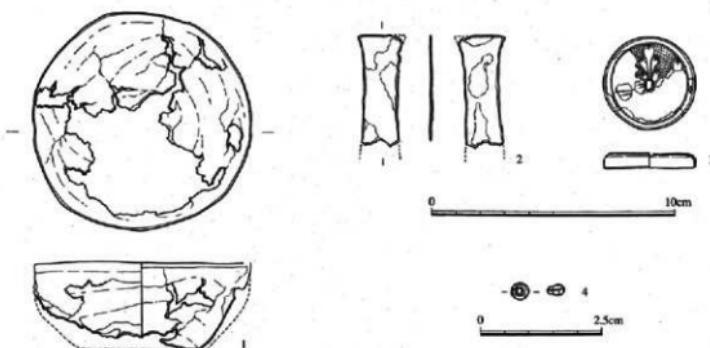


Fig-63 銅製品実測図 (S=1/1・1/2)

(f) 銅銭 (Fig-64)

第116次調査では、計25枚の銅銭が出土した。この内の半分が鋳・欠損のため、判読できない状態であった。判読できたうちの45%が北宋銭である。これらの銅銭のうちの56%が遺構から出土したもので、残りの44%の銅銭は、遺構検出・掘り下げ作業中に出土したものである。

出土遺構を見ると、第一面では各遺構から一枚ずつといった状況で出土しているが、第二面では208号遺構から集中して出土している。

錢貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数	錢貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数
淳化元寶	990	北宋	淳化元年	1	大觀通寶	1107	北宋	大觀元年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寛元元年	1	洪武通寶	1368	明	洪武元年	2
嘉祐通寶	1056	北宋	嘉祐元年	1	寛永通寶	1626	日本	寛永三年	10
元豐通寶	1078	北宋	元豐元年	3	解説不能				5
紹聖元寶	1094	北宋	紹聖元年	1					計25

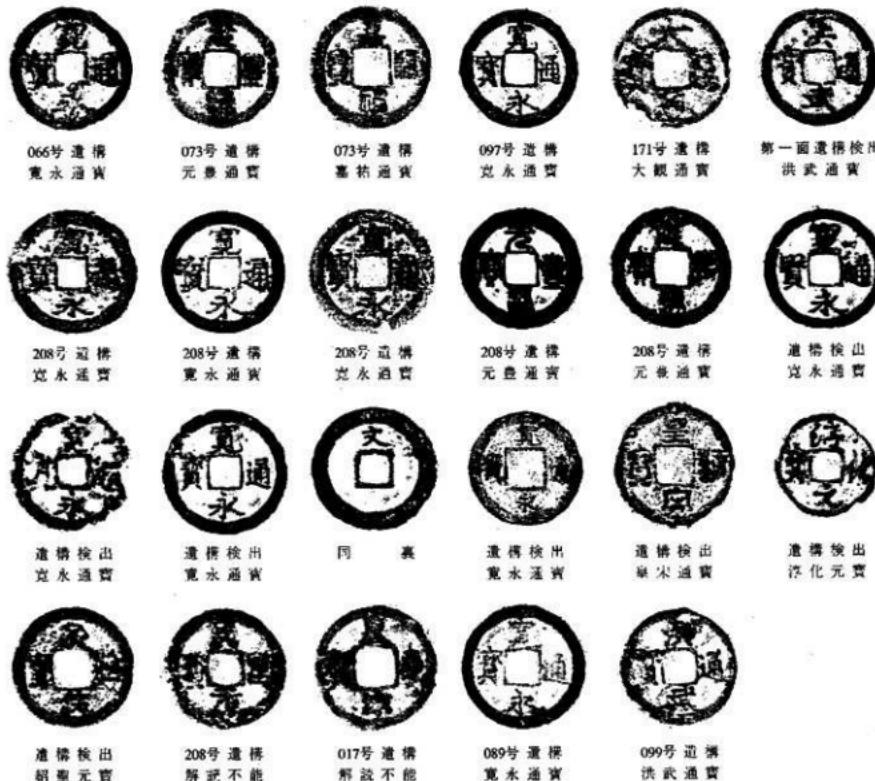


Fig-64 銅銭実測図 (S=1/1)

3. まとめ

以上、簡単ながら博多遺跡群第116次調査の概要について述べてきた。最後に調査の簡単なまとめと若干の問題点の指摘を行いたい。

博多遺跡群第116次調査地点での遺構の初現は、13世紀後半である。本調査区の立地する息浜の陣地化の年代が11世紀後半から12世紀代であることを考えれば、生活領域として開発・機能を始めた時期としては符合するものであろう。本調査区北側で行われた調査での遺構の初現が、湾岸に近づくに伴い時期が下るもの、息浜の開発・都市化の進度を反映したものである。13世紀後半以降は連縫と遺構が構築され、以後「博多」の一部として発展を遂げていく。博多は16世紀末に薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼に帰するが、翌年には豊臣秀吉の行った太閤町割によって復興・区画整理される。現在の博多の街並みは、基本的にこの太閤町割を継承するものである。

以下では、この太閤町割以前に施行されていた「博多」の街区について検討を行いたい。

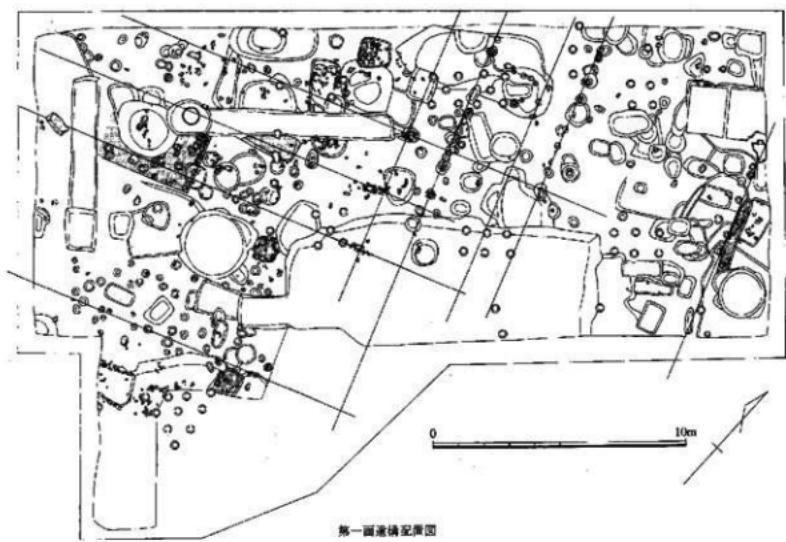
(1) 中世後半における博多の景観

これまで行われた調査成果から、博多浜側では中世後半期の街区については、ある程度復元することができる。博多浜側では、聖福寺の主軸線を基準とし、幹線道路と支線道路が整備され、それに区画された長方形街区が採用されている。後の太閤町割も長方形街区と規則形地割りによって都市整備を行っているが、中世後半期の道路は、太閤町割ほど整然とは整備がなされていない状況である。

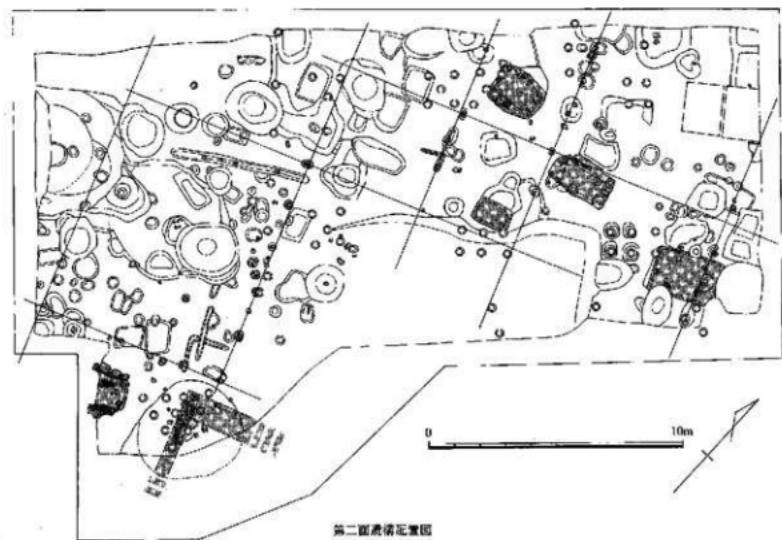
一方、本調査区の位置する息浜側では、中世後半期の街区についてある程度推測はなされてきたが、その様相は部分的にしか判明していないのが現状であった。これまでの調査で街区の方向性を示す遺構が検出されている調査としては、第68次・第108次調査で検出されている防壁状遺構、第78次調査で検出された16世紀後半の建物基礎遺構、第75次・第83次調査で検出された遺構群などが挙げられる。第68次・第108次調査で検出されている防壁遺構は幅10m前後の石垣遺構で、その方向はN-67°-E前後を探る。第78次調査検出の建物基礎遺構はN-6°30'-Eの方向を探り、周辺一帯もこの主軸方向で建物群が展開すると考えられる（街区推定線1）。第75次・第83次調査ではN-19°~26°-E前後の方向軸を持つ柱穴列などが検出されている。これらの調査成果をまとめ、図上で復元すると、Fig-66に示した街区が想定できる。

本調査区は息浜中央部付近に位置しており、近接して第75次・第83次調査地点が位置する。本調査地点でも15世紀後半から16世紀前半にかけてのN-19°-E前後の主軸方向を持つ遺構群が検出されており、付近一帯にこの方向を基本とした街区（街区推定線2）が形成されていたことが推定できる。また、第68次・第108次調査で検出された防壁遺構も、街区推定線2には直交または並行する方向性を持っていることが分かる。第78次調査の成果からは、街区推定線1がこの防壁状遺構によって規制され展開していくことが推定されている。本調査地点一帯で検出された街区推定線2も、おそらく同様にこの既に痕跡となっていた防壁状遺構によって規制されたものと考えられる。

以上のことより、中世後半期の息浜においては防壁によって規制されていた方向を異にする複数の街区を形成していたことが推定できる。防壁遺構が必ずしも直線ではなかったことから、このような複数の街区が形成されたのであろう。博多浜側では聖福寺の主軸線を基準とした街区が採用されており、何らかの基準から街区を展開させていく点では、博多浜・息浜の両地区は類似点を持つ。これらの街区は太閤町割が施行されるまで存続し、現在は聖福寺近辺に痕跡の一部が見られるだけである。



第一面遺構配置図



第二面遺構配置図

Fig-65 調査区内遺構配置・復元図 (S=1/200)

以上、太閤町削直前の博多の景観について述べてきたが、本調査区ではそれ以前の方向軸を持つ遺構も検出されている。第二面で検出した268号遺構などである。これらの遺構はN-60°-E前後の方向で構築され、その時期は14世紀前半に比定できる。これらの方向軸を持つ遺構の検出例はあまりなく、今後の調査に期待したい。

(2) 元寇防壁遺構について

本調査区付近は、防壁遺構の推定線上に位置している（Fig-66参照）。第68次・第108次調査で検出された防壁遺構の延長線も本調査区北側付近を通る。本調査区内での防壁遺構の検出はなかったが、調査区内北側には砂丘の尾根線があり、この尾根線上に構築されたものと考えられる。

本調査区西側に位置する第111次調査地点では、防壁遺構に類似した構造を持つ石垣遺構が40m程度の範囲で検出されている。この石垣遺構は、第68次・第108次で検出された防壁遺構の延長線上に位置しており、何らかの関連性が考えられる。

防壁遺構は、大量の石材を使用して構築されたものであるが、防御施設としての役割を終えた後は街区展開の規制の一要因として「博多」に影響を及ぼしているが、その他にも生活の一端の中で貢献している。博多遺跡群で検出されている方形石組遺構は、その用途が解明されていないが、第116次調査地点付近でも大量に検出されており、隣接する第83次調査地点、大博通りを挟む地点に位置する第113次調査地点、石垣状遺構が検出された第111次調査地点などが挙げられる。これらの調査区は「元寇防壁」の推定線上に位置しており、これらの石組遺構が15世紀代以降の年代を示していることから、防壁の石材を転用して構築されたと考えられる。

今後の調査で、都市「博多」がより一層解明されることに期待したい。



Ph.40 調査区出土墓石



Ph.41 048号遺構完掘状況（南から）



Ph.42 063号遺構完掘状況（北から）

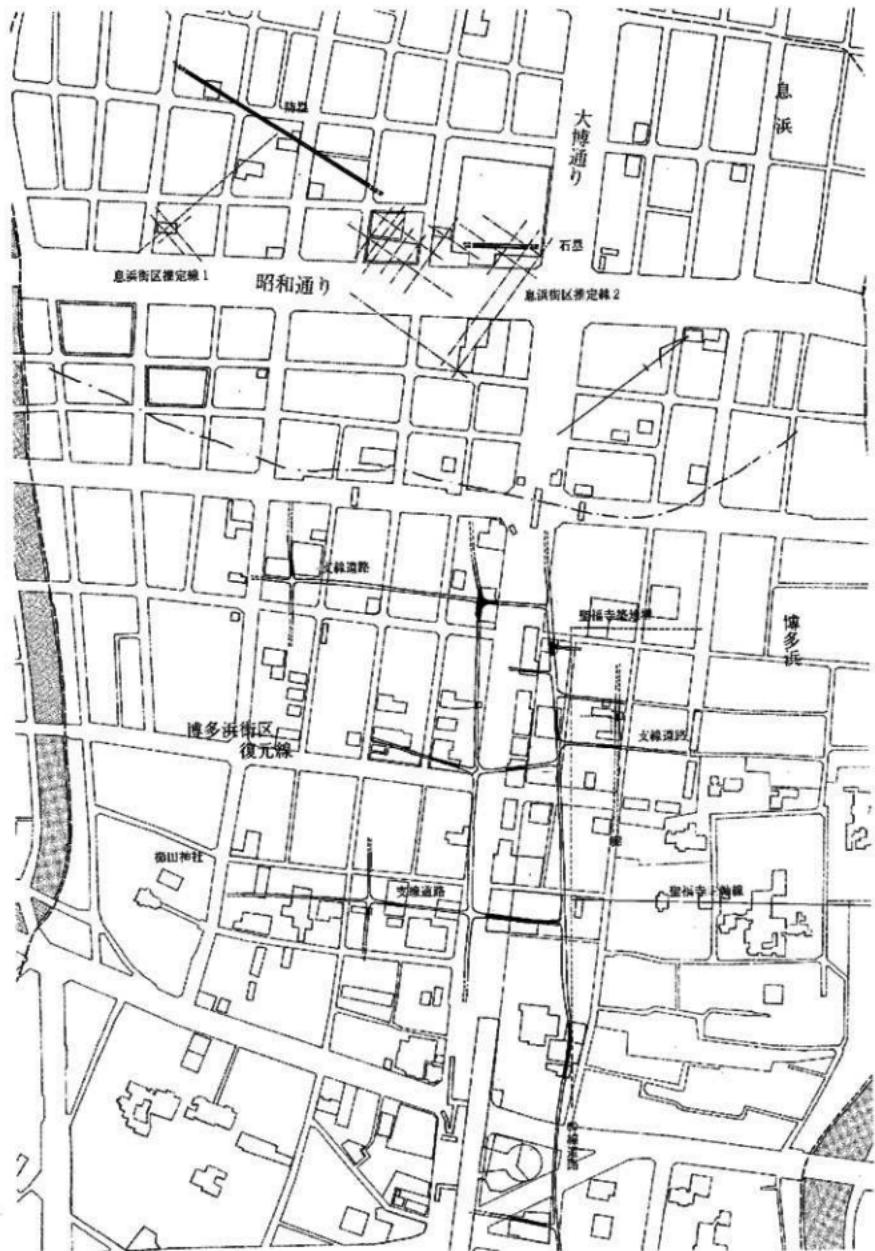


Fig-66 博多遺跡群内中世後半期街区復元図 (S=1/5000)

第三章
博多遺跡群第119次調査



031号遺構出土遺物 (Fig-74-1)



038号遺構出土遺物 (Fig-78-5)

2001

福岡市教育委員会

1. はじめに

(一) 調査にいたる経緯

平成11年4月9日、株式会社井上組より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区中呉服町119-2他地内における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は既知の遺跡である博多遺跡の北側に位置しており、これを受けて埋蔵文化財課では平成11年6月15日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から200cm程掘り下げる黄褐色粗砂層上面において中世から近世にかけての溝、土坑、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成11年9月27日に着手し、平成11年11月18日に終了した。

(二) 調査体制

調査委託	株式会社井上組	代表取締役社長	井上 弥須男			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	西 憲一郎 生田 征大（現任）			
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長	山崎 純男			
	同	埋蔵文化財課 第2係長	力武 卓治			
調査庶務	同	文化財整備課	谷口 真由美 御手洗 清			
調査担当	同	埋蔵文化財課 事前審査係 第2係	杉山 富雄 加藤 隆也（試掘調査） 本田 浩二郎（本調査）			
調査作業	朝倉浩司 木原保生 中村フミ子 村田敬子 今村佳子 坂本真一	伊藤健太 近藤澄江 西山径子 播磨千恵子 石井淳子 (福岡大学)	岩本三重子 澄川アキヨ 野田淳一 羽岡正春 金子朋子 能登原孝道（以上九州大学）	牛島 靖 三田重人 羽岡正春 平井武夫	人賀規矩雄 豊永裕保 藤野トシ子	越智信孝
整理作業	有島美江	野副けいこ	鳥飼悦子	室 以佐子		

調査期間中には株式会社井上組ならびに株式会社ダックスの方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

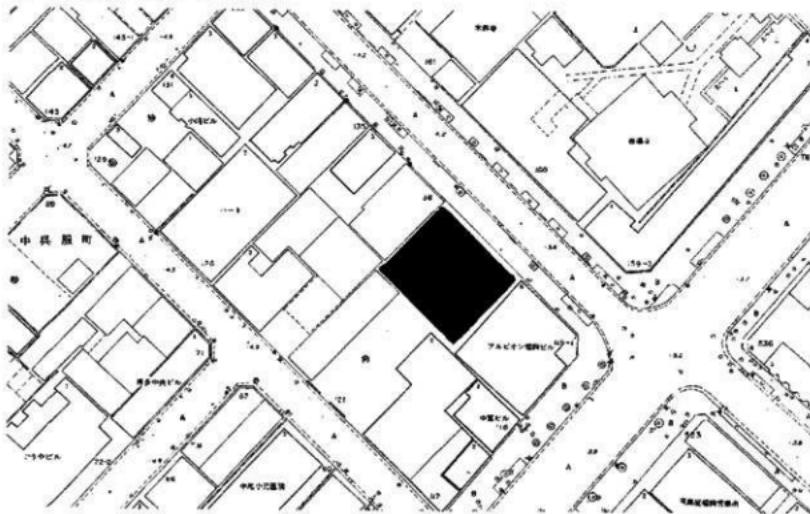
遺跡調査番号	9941	遺跡略号	HKT119
調査地地番	博多区中呉服町119-2他	分布地図番号	千代・博多48
開発面積	639m ²	調査面積	340m ²
調査期間	1999.9.27~1999.11.18		

2. 発掘調査の記録

(一) 調査の概要

第119次調査地点は、博多遺跡群の立地する博多浜と息浜の二つ砂丘のうち、北側に位置する息浜東南端部の落ち際に位置している。博多湾側に位置する息浜は、これまでの調査成果より11世紀末に陸地化がはじまり、それ以後の生活痕跡が検出されることが分かっている。調査区付近は息浜と博多浜をつなぐ陸橋部分東側の低地に位置しており、比較的早い段階に陸地化していたことが想定されている。博多浜と息浜を結ぶ陸橋部は12世紀初頭前後に埋め立てられ形成されたもので、砂丘間の谷部分はその後順次埋め立てられ、近世初頭には完全に埋め立てられる。陸橋部西側での調査では継続的な小規模単位の埋め立てが確認されているが、陸橋東側では調査事例は少なく、都市化の過程では不明瞭な点が多く残されている。調査区西側に接した箇所では第98次調査・第100次調査が行われている。両調査地点は本調査地点よりも息浜内陸側・陸橋部寄りに位置し、調査成果から第98次地点で12世紀前半、第100次地点では13世紀代に都市化が開始されていることが判明している。調査は外堀などの諸条件整備が完了した時点で着手した。調査は建物の基礎工事によって破壊される部分約340m²の面積について行った。現地表面から2m程度掘削するため、調査区周囲は矢板工事で養生されており、調査区壁面の上層観察は部分的にしか行わなかった。発掘調査に先がけて、調査区内には直径1m以上の基礎杭が複数打設してあり、一部の遺構が攪乱・消滅していた。

試掘調査の成果をもとに、現地表面から100~190cmの深さで堆積する近代から現代までの築地層を重機で掘削し、排土は調査区外へ搬出した。試掘成果より遺構面は褐色砂層面上で設定したが、遺構面上には暗褐色砂質土の包含層が堆積していたため、重機による掘削は包含層上面で止め、包含層の調査を行った。包含層は厚さ10cm~50cm前後の厚さではほぼ全面に堆積しており、白磁・青磁などの貿易陶磁器や須恵器片などが出土する。また、包含層最下部付近からは8世紀後半代と考えられる銅鏡・須恵器塊が接近して出土した。



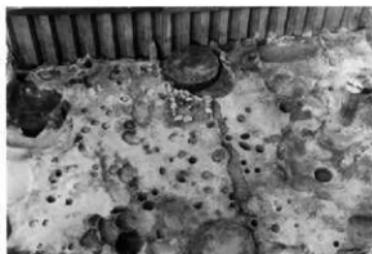
包含層掘削後に褐色粗砂層面上において遺構検出を行った。土層トレンチで堆積状況を確認したが遺構面は褐色粗砂層面上の一面だけであった。遺構面の標高は1.8m~2.1mを測り、全体が西側に向かって緩やかに傾斜している。調査は排土処理の都合から調査区を二分割し、排土を反転移動して行った。調査では8世紀後半から14世紀代までの遺構と遺物を検出した。このなかでも、12世紀から13世紀にかけての遺構の密度が高い。検出した遺構は井戸・石組遺構・溝状遺構・方形土坑・建物としてはまとめきれない柱穴などである。井戸は合計で11基検出したが、井筒に有機質を使用したものについては腐食のため痕跡しか確認できなかった。



Ph.43 調査区西側全景 (南東から)



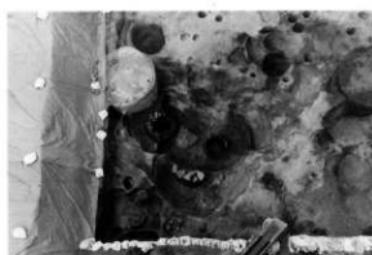
Ph.44 調査区東側全景 (南東から)



Ph.45 調査区西側近景 (南東から)



Ph.46 調査区南西側近景 (南東から)



Ph.47 調査区南側近景 (南東から)



Ph.48 調査区南側近景 (南東から)

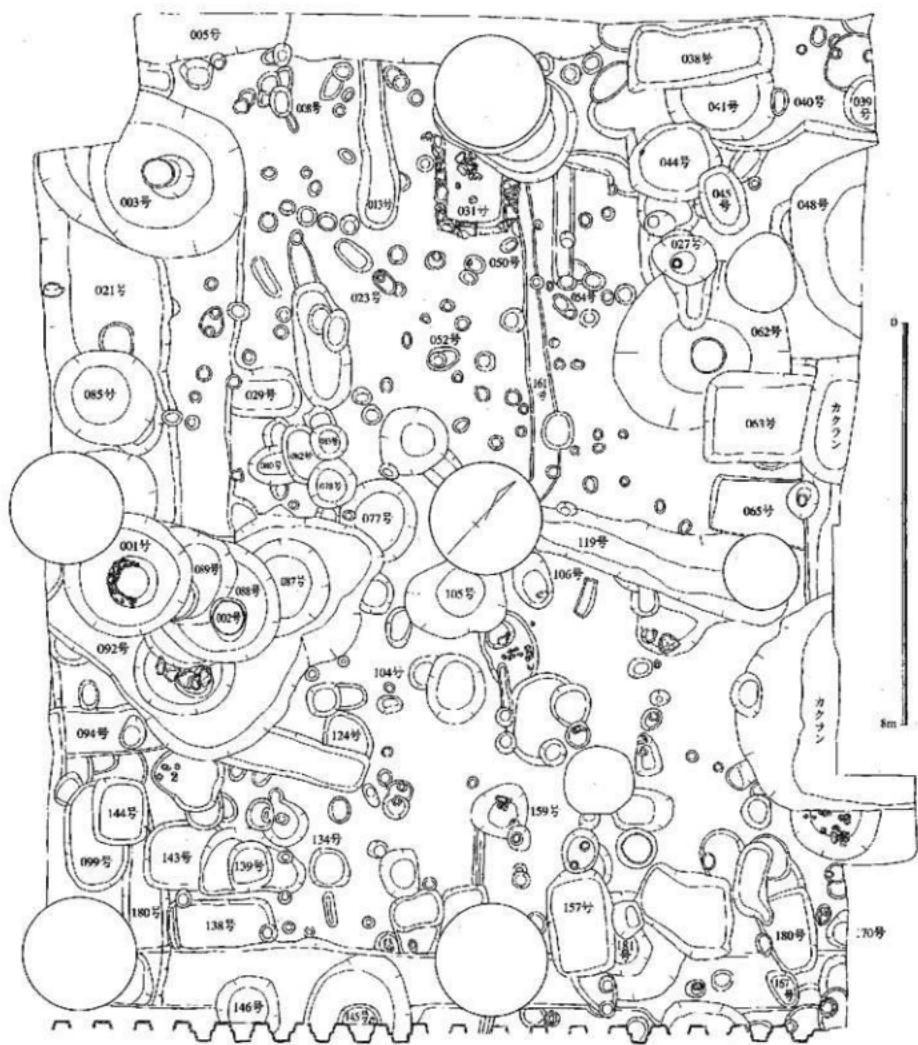


Fig-68 遺構配置図 (S=1/100)

(二) 遺構と遺物

次に、今回の調査で検出した主要な遺構と遺物の概要について述べる。

調査では遺物の出土した遺構にのみ遺構番号を付して、出土遺物の取り上げを行った。遺構番号は001号から185号まで付した。出土遺物はコンテナケースで40箱分が出土した。遺物としては、土師器、白磁・青磁などの貿易陶磁器、国産陶器、銅鏡・銅製品、石錘などの石製品、墓石などがある。注目すべき遺物としては、包含層から出土した銅鏡と須恵器壇の他に、8世紀後半代のものと考えられる銅製巡方などがあり、調査区近辺に律令官人・それに伴う施設の存在が推定される。

001号遺構・002号遺構・089号遺構・155号遺構・184号遺構 (Fig-69)

調査区南側で検出した5基の井戸遺構群の切り合いである。構築順序は調査成果より184号→155号→089号→002号→001号の順である。184号・155号遺構は同一の掘方内で検出された井筒で、掘り直しの可能性が考えられる。両遺構とも有機質の桶などを井戸枠として使用していたと考えられる。井筒内には人頭大の礫が投棄されていた。184号の上面には列石遺構が検出された。この中には梵字と年号を線刻するものがあり、構築年代がある程度推測できる。002号遺構は瓦を井戸枠として使用している。10枚の平瓦を円形に配置し井戸枠とする。001号遺構では小砾を配して井戸枠としている。各井戸の平面形は円形で直径は2.0m～2.5mを測り、検出面から底面までの深さは1.2m～1.4mを測る。本調査地点での涌水は標高1m前後の地点である。

Fig-70に出土遺物を示した。

1は土師器の壺である。復元口径15.8cmを測る。底部はヘラ切りされ、内器面はヘラ磨きが施される。2は瓦器碗である。復元口径17.8cmを測る。3は青磁碗である。口径11.6cm、高台径5.0cmを測る。4は李朝粉青沙器壺の肩部である。5は青磁碗の口縁部片である。6は須恵質土器片口鉢である。7は土錘である。残存長4.4cmを測る。8は瓦器碗である。9は青磁香炉の脚部片である。脚には獸面を施す。10は白磁口縁部である。11は青磁碗の底部片である。いわゆる龍泉窯系青磁碗である。高台径は5.4cmを測る。12は瓦質土器の鉢口縁部片である。13は土師皿である。口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されていたことが分かる。14は須恵質土器の鉢口縁部である。外器面はナデ調整される。15は土錘である。残存長4.0cmを測る。16は土錘である。残存長4.4cmを測る。17は土錘である。残存長3.5cmを測る。18は瓦質土器の火鉢である。復元口径30.2cmを測る。口縁部下の文様帯には押型で菊花文を施す。



Ph.49 001号遺構検出状況（北から）



Ph.50 002号遺構検出状況（南から）

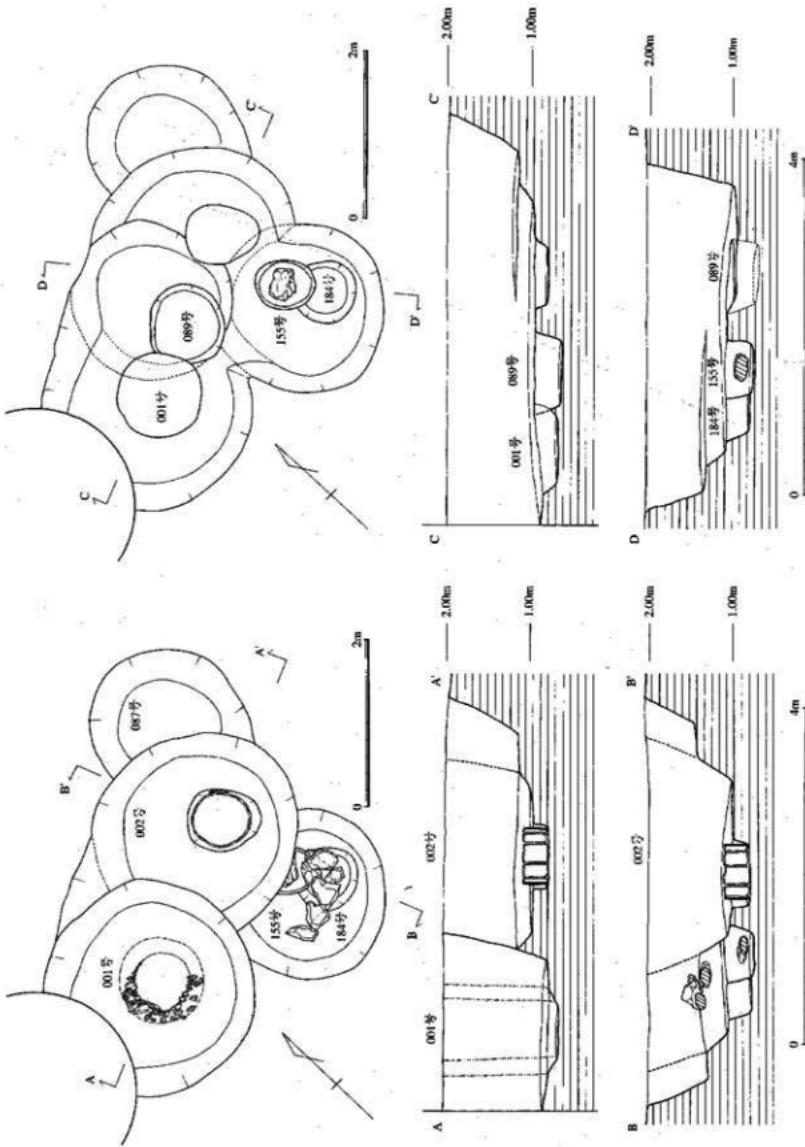


Fig-69 001・002・088・089・096・155号遺構実測図 (S=1/60)

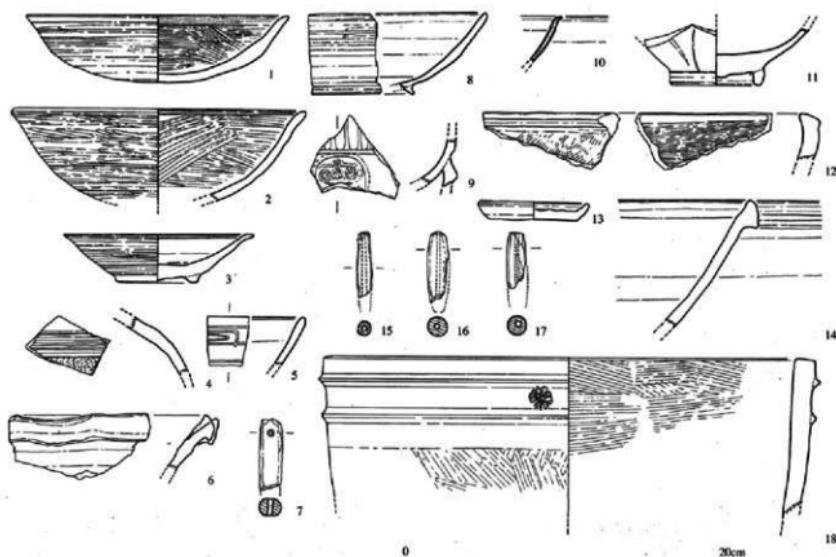


Fig-70 出土遺物実測図 (S=1/3)

003号遺構 (Fig-71)

調査区西側隅部で検出した井戸遺構である。平面形は円形で、掘方の直径3.1mを測る。検出面から40cm程掘り下げた地点で重複する井筒が検出される。掘り直しが行われたものと考えられる。新しい方の井戸枠には有機質の桶などが使用されていたものと考えられ、井筒内にはスポンジ状に腐食した木質の一部が残存していた。井筒の直径は60cm前後を測り、井筒内部には暗褐色粘質土と灰色細砂、有機質が腐食した黒褐色粘質土層が交互に堆積する。古い方の井筒は掘り直し時に井戸枠が抜き出されたのか、痕跡も確認できなかった。直径は90cm前後を測り、暗褐色砂が堆積していた。標高1m前後の高さで涌水する。

Fig-72に出土遺物を示した。



Fig.51 003号遺構検出状況 (東から)

1は白磁合子身である。口径3.9cm、底径3.4cm、器高1.7cmを測る。型抜き成形される。体部上半部・内面に施釉し、体部下半部を露胎とする。2は土師器の壊である。口径13.4cm、底径8.0cm、器高3.2cmを測る。底部は糸切り調整され、内面はコテアテ調整される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。3は青磁碗である。いわゆる同安窯系青磁碗である。外器面・内器面には柳描文が施される。釉調は明緑色を呈する。4は瓦質土器の捏鉢である。口径19.2cm、底径9.5cm、器高1.1cmを測

る。底部はヘラ切り調整され、外器面はナデ調整、内器面はナデ調整の後、不定方向への刷毛目調整が施される。この他には白磁碗・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・陶器等が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代として12世紀後半頃の時期を考えることができる。

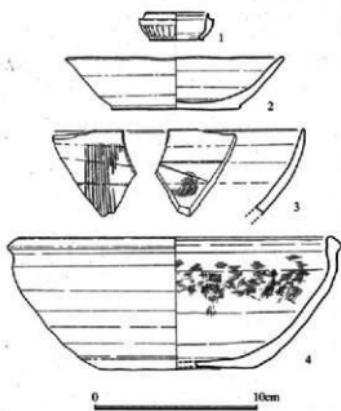


Fig-72 出土遺物実測図 (S=1/3)

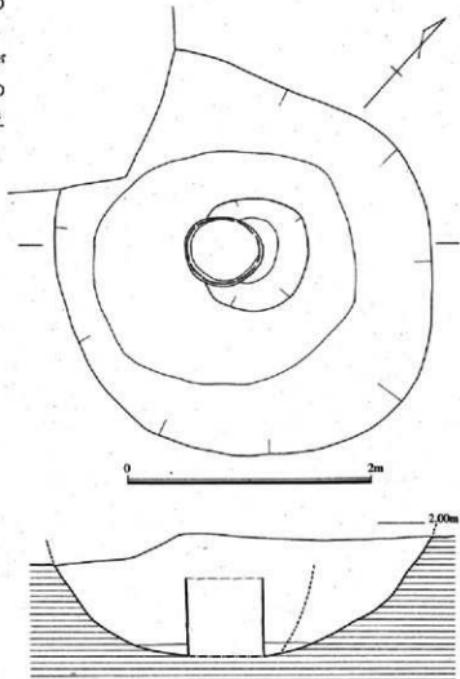


Fig-71 003号遺構実測図 (S=1/40)

031号遺構 (Fig-73)

調査区北西側で検出された石組遺構である。北西側を調査に先行して行われた基礎工事によって擾乱される。短辺1.5m×長辺2m以上の長方形土坑の周囲に拳大から人頭大の礫を配する。土坑は検出面から20cm程度の深さを測り、石組の上面は標高2.2m前後にならぶ。上面は削平され、最下部の一段のみの残存と考えられる。土坑内部では底面から15cm程度浮いた状態で砾と土師皿が検出される。このような石組土坑の用途は現在のところ特定されていないが、貯蔵用施設の下部構造と考えられよう。遺物は土師皿などが出土した。

Fig-74に出土遺物を示した。



Ph.52 031号遺構検出状況 (北西から)

1は石組の外側で検出した線刻を持つ砾である。砾石と考えられる。長径19.5cm、短径18.5cm、全高6.0cmを測る。2は石組内から出土した土師皿である。口径9.6cm、底径6.7cm、器高1.9cmを測る。底部は糸切りされる。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は15世紀代の時期が考えられる。



Ph.53 031号遺構遺物検出状況（北から）

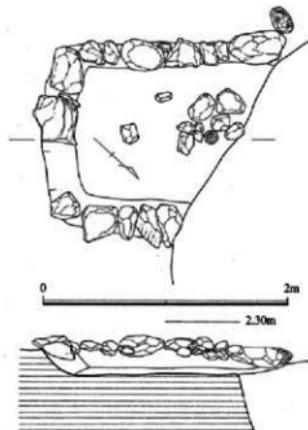


Fig-73 031号遺構実測図 ($S=1/40$)

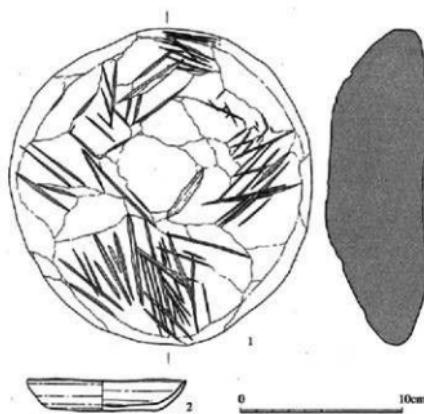


Fig-74 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

032号遺構 (Fig-75)

調査区北西側で検出した井戸遺構である。西側は基礎杭で大きく搅乱されており、東側の一部が残存しているだけで完掘はできなかった。残存部分から復元すると掘方の直径が2.2m前後の円形となる。検出面から90cm前後の深さまで掘り下げを行った。遺構の埋土は褐色砂の割合が高い暗褐色砂質土で、暗褐色粘質土をブロック状に含む。出土遺物としては、青磁碗・白磁碗・土師皿・黒色土器・瓦器椀・国産陶器などがある。

Fig-76に出土遺物を示した。

1は白磁小皿である。口径8.5cm、底径5.4cm、器高1.7cmを測る。2は瓦器皿である。内器面に密にヘラ磨きを施す。3は白磁碗の口縁部である。口縁部は玉縁状を呈する。4・5は白磁碗口縁部である。ともに玉縁状口縁を呈する。6は瓦質土器擂鉢の口縁部である。口唇部には指頭圧痕が観察できる。これらの出土遺物より、この遺構の年代は12世紀前半頃の時期が考えられる。

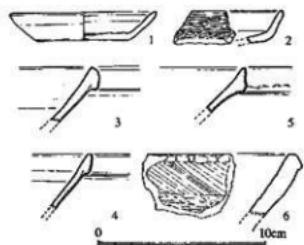


Fig-76 山土遺物実測図 (S=1/3)

038号遺構 (Fig-77)

調査区北側隅部付近で検出した土坑である。平面形は長方形で3.0m×1.2mを測る。検出面から底面までの深さは40cm~70cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で炭化物を多く含む。検出時には土壤基の可能性も考えられたが、掘り下げの結果、廃棄土坑であることが判明した。

出土遺物をFig-78に示した。

1は瓦器碗である。口径16.2cm、高台径6.3cm、器高5.2cmを測る。内外器面共にへラ磨きが密に施される。2は白磁碗である。

3は白磁碗である。4は白磁碗高台部片である。高台部は露胎である。5は滑石製の石錘である。全長5.4cm、全幅4.6cm、厚さ1.2cmを測る。

この他には龍泉窯系青磁碗・陶器・須恵質土器等が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は12世紀後半の時期が考えらる。

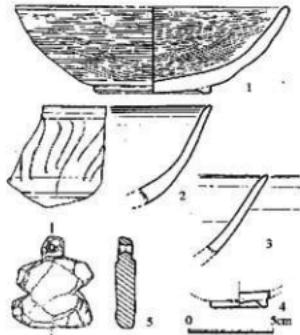


Fig-78 山土遺物実測図 (S=1/3)

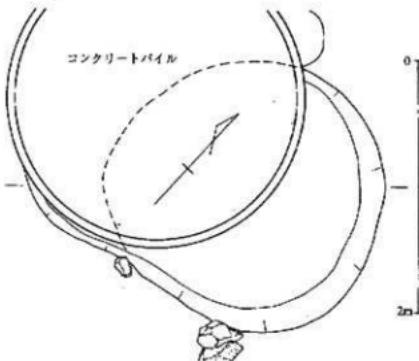


Fig-75 032号遺構実測図 (S=1/40)

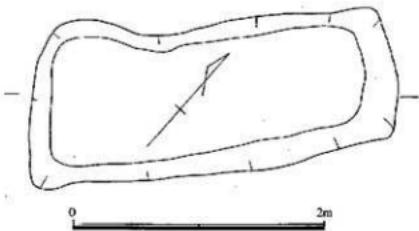
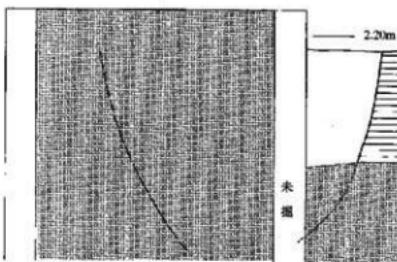


Fig-77 038号遺構実測図 (S=1/40)

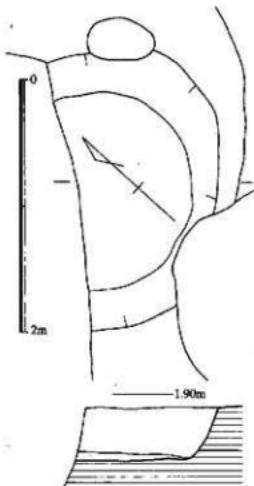


Fig-79 041号遺構実測図
(S=1/40)

041号遺構 (Fig-79)

調査区北側で検出した土坑である。東側は調査区外になり、西側半分の調査を行った。平面形は検出された部分から復元すると円形となり、直径は2.2m程度と推測される。検出面から底面までの深さは40cm前後を測る。遺構の埋土は上層で暗褐色砂質土と黒褐色粘質土が交互に堆積し、下層には黒色粘質土と暗褐色砂が堆積する。上層部分には拳大の躰・陶器などが大量に包含されており、埋没過程で廃棄土坑として転用されていたことが推定される。

Fig-80に出土遺物を示した。

1~6・8・9・11・12は土師皿である。1の底部はヘラ切り調整の後、ナデ調整が施される。他の土師皿の底部は糸切り調整される。7・10は瓦器小皿である。7は口径9.4cm、底径6.5cmを測る。10は口径9.1cmを測る。13は瓦質土器の高杯である。復元口径22.0cmを測る。内外器面とも刷毛目調整が施される。色調は灰褐色を呈する。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は12世紀代の時期が考えられる。

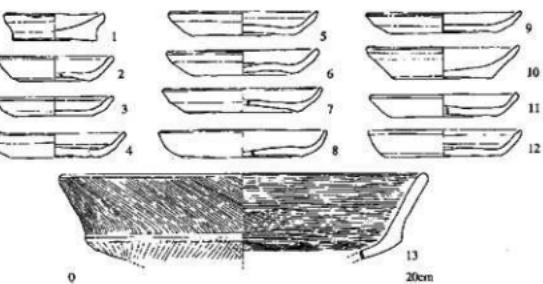


Fig-80 出土遺物実測図 (S=1/3)

Fig-82に出土遺物を示した。

1~5・8・9は土師皿である。口径は1が5.8cm、2が6.4cm、3が7.2cm、4が8.4cm、5が8.8cm、8が7.6cm、9が8.5cmを測る。底部はすべて糸切り調整される。焼成は良好で、色調は褐色～暗褐色を呈する。6・7・10は土師器の壊である。6は口径12.3cm、底径8.4cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りされ、板目压痕が施される。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。7は口径11.1cm、底径7.9cm、器高2.2cmを測る。6と同様に底部は糸切りされ、板目压痕が見られる。10は口径12.2cm、底径8.0cm、器高2.2cmを測る。底部は糸切り調整される。11は土師質土器の平底鉢である。外器面に墨書きをもつ。口径29.0cm、底径15.8cm、器高9.7cmを測る。外器面は刷毛目調整と指押

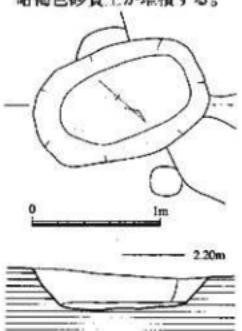
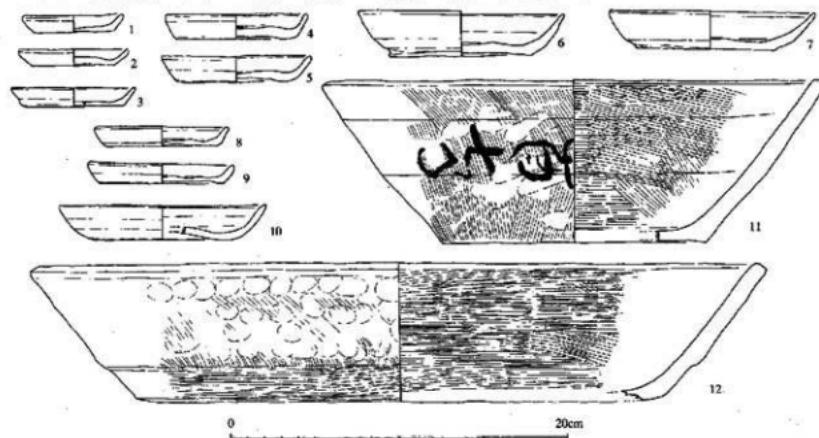


Fig-81 045号遺構実測図 (S=1/40)

えで調整される。12は瓦質土器の桶鉢である。復元口径43.8cm、復元底径31.4cm、器高8.3cmを測る大型の鉢である。この他には、龍泉窯系青磁碗・白磁碗・陶器等の遺物が出土している。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀代の時期が考えられる。



050号遺構 (Fig-83)

調査区中央部北西側で検出した土坑である。平面形は楕円形で38cm×44cm、検出面から底面までの深さは20cmを測る。出土遺物をFig-84に示す。1は土器器塊である。口径15.2cmを測る。内器面共にヘラ磨きが丁寧に施される。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は10世紀の時期が考えられる。

052号遺構 (Fig-83)

調査区中央部北西側で検出した土坑である。平面形は楕円形で44cm×65cm、検出面から底面までの深さは46cmを測る。

出土遺物をFig-84に示す。2は瓦器輪高台部分である。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は11世紀の時期が考えられる。

054号遺構 (Fig-83)

調査区中央部北西側で検出した土坑である。平面形は楕円形で29cm×39cm、検出面から底面までの深さは34cmを測る。

出土遺物をFig-84に示す。3は上師皿である。口径6.5cm、底径5.1cm、器高1.4cmを測り、底部は糸切りされる。この他には白磁碗が出土しており、この遺構の年代は11世紀後半頃の時期が考えられる。

Fig-82 出土遺物実測図 (S=1/3)

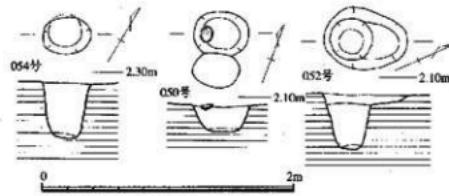


Fig-83 050号・052号・054号遺構実測図 (S=1/40)

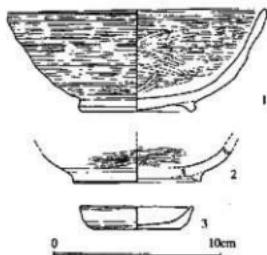


Fig-84 出土遺物実測図 (S=1/3)

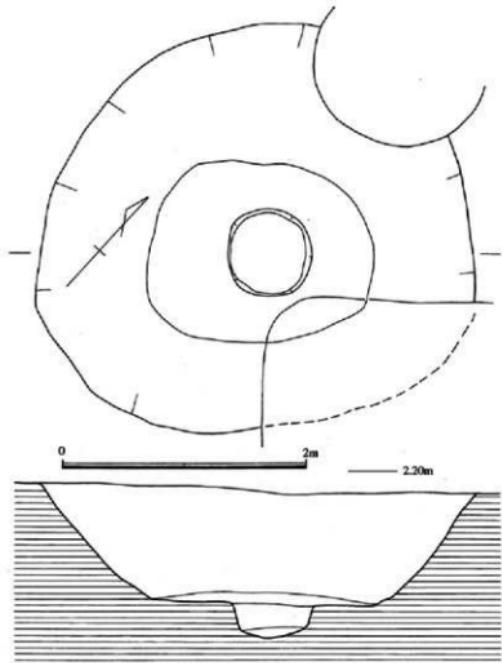


Fig-85 062号遺構実測図 (S=1/40)

星する。3は白磁碗である。口径15.8cm、高台径7.1cm、器高5.0cmを測る。高台部疊付きまで施釉され、高台内は露胎とする。この他には龍泉窯系青磁碗・白磁高台付皿・同安窯系青磁碗・陶器・須恵質土器・瓦質土器・土師器等の遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は12世紀後半から13世紀前半頃の時期が考えられる。



Ph.54 062号遺構完掘状況 (北から)

062号遺構 (Fig-85)

調査区北側で検出した井戸遺構である。上面では他の遺構に切られるが、掘方の平面形は円形で、直径3.3~3.6mを測る。検出面から井筒底面までの深さは1.3mを測る。掘方の土は暗褐色砂で黒褐色粘質土を幾重にも抉むように堆積する。井筒の直径は60cm前後を測り、井戸枠には桶が使用される。すでに腐食しており、桶自体の残存はなかったが、周囲の壁面に痕跡が確認された。

出土遺物をFig-86に示した。

1・2は青磁碗である。いわゆる同安窯系青磁碗である。1は復元口径18.6cmを測る。外器面には櫛描文が施され、体部下半部から露胎とする。内面にも櫛描文で文様を施す。2は復元口径15.2cmを測る。1と同様に内外器面とも櫛描文による装飾を施す。釉調は暗オリーブ色を

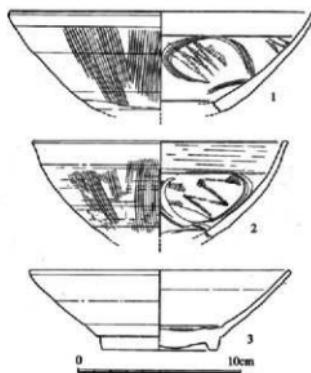


Fig-86 出土遺物実測図 (S=1/3)

082号遺構 (Fig-87)

調査区中央部で検出した土坑である。他の遺構に切られているが、平面形は東西方向に伸びる楕円形で1.3m×0.7m以上を測る。検出面から底面までの深さは30cm前後を測る。遺構の埋土はしまりのある暗褐色砂質土で、粗砂の混入が多い。

Fig-88に出土遺物を示した。1は土師皿である。口径6.4cm、底径4.6cm、器高1.7cmを測り、底部は糸切りされる。この他には陶器鉢などが出土している。

083号遺構 (Fig-87)

082号遺構を切る土坑で平面形は凹形を呈し、直径は70cmを測る。検出面から底面までは40cm前後の深さを測り、埋土はしまりのある暗褐色砂である。

Fig-88に出土遺物を示した。2は土師皿である。口径7.5cm、底径5.8cm、器高1.6cmを測る。底部は糸切りされる。3は土師器壺である。口径11.3cm、底径6.8cm、器高2.6cmを測る。底部

は糸切りされ、板目压痕が施される。この他には陶器・混入した須恵器などが出土地してい。

この遺構の時期は13世紀代と考えられる。

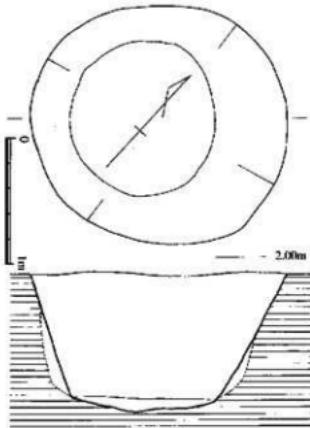


Fig-89 085号遺構実測図 (S=1/40)

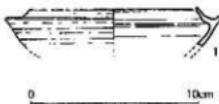


Fig-90 出土遺物実測図 (S=1/3)

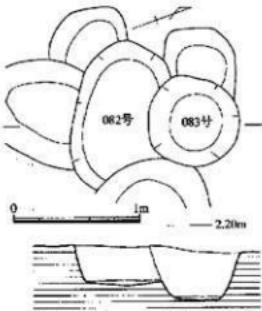


Fig-87 082号・083号遺構実測図 (S=1/40)

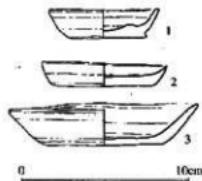


Fig-88 出土遺物実測図 (S=1/3)

085号遺構 (Fig-89)

調査区西側で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、直径は2.0mを測る。検出面から底面までの深さは1.1m前後を測る。検出時には井戸遺構と考えていたが、底面は平坦で中央部が少し陥没するだけで、井戸枠などは検出されなかった。土坑壁面下部は5mm大の玉砂利が厚さ5cm程度貼り付いたような状況で検出される。遺構の埋土は暗褐色砂質土で、下層では粗砂の割合が高くなる。この遺構の用途は現状では特定できなかった。

Fig-90に出土遺物を示した。

1は須恵器の壺である。復元口径は12.6cmを測り、底部は欠損する。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

この須恵器は混入品と考えられ、遺構の時期を直接示すものではない。この他には白磁碗・陶器盤・土師器・土師質上器などの遺物が出土している。

出土遺物より、この遺構の時期は12世紀代と考えられる。

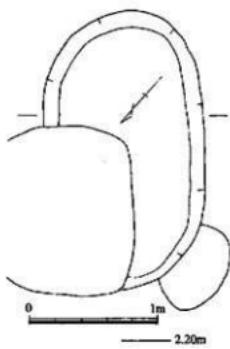


Fig-91 099号遺構実測図
(S=1/40)

この他には白磁碗・白磁高台付皿・白磁壺・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・陶器盤・茶軸四耳壺・土師器・瓦質土器・瓦などの遺物が出土している。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は13世紀代の時期が考えられる。

099号遺構 (Fig-91)

調査区南側隅部で検出した土坑である。平面形は北西から南東方向に伸びる楕円形で、長軸2.2m、短軸1.3mを測り、検出面から底面までは40cm～50cmの深さを測る。遺構の主軸はN-43°W前後の方向を探る。遺構は暗褐色砂層面上で検出され、埋土は焼土・炭化物を少量含んだ黒褐色砂質土である。

Fig-93に出土遺物を示した。

1は瓦器柄である。口径14.6cm、高台径6.0cm、器高5.1cmを測る。外器面は横位のヘラ磨きで調整される。内器面は内周の四分の一単位ずつヘラ磨きが施される。高台は外底部付近に貼り付けられ、断面形は台形を呈する。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

2は瓦器腕底部である。高台径は6.9cmを測る。高台は坏底部に円盤状に貼り付けられる。高台の断面形は台形を呈する。

3・4は白磁碗である。3は玉縁状口縁を呈し、内器面には釉がたれる。

5は白磁碗である。復元口径14.8cmを測る。玉縁状口縁を持ち、釉調は白湯色を呈する。

101号遺構 (Fig-92)

調査区中央部南側で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、直径は70cm前後、検出面から底面までの深さは30～35cmを測る。

Fig-93に出上遺物を示した。

6は土師器の坏である。口径12.8cm、底径9.0cm、器高2.6cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。

この他には白磁碗・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・陶器盤・土師器・土師質土器・瓦質土器などが出土している。

これらの遺物より、この遺構の年代は13世紀代の時期が考えられる。

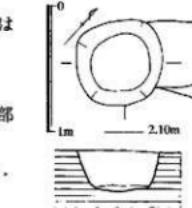


Fig-92 101号遺構実測図
(S=1/40)

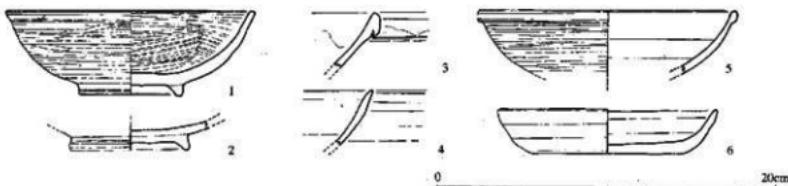


Fig-93 出土遺物実測図 (S=1/3)

104号遺構 (Fig-94)

調査区中央部で検出した土坑である。東側を他の遺構によって切られる。現状から復元できる平面形は楕円形で長軸は70cm以上を測る。検出面から底面までの深さは15cm前後測る。

Fig-95に出土遺物を示した。

1は土師皿である。口径6.2cm、底径5.3cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。この他には白磁碗・同安窯系青磁碗・陶器壺・土師質土器・瓦質土器などが出土している。

これらの遺物より、この遺構の年代は12世紀前半の時期が考えられる。

105号遺構 (Fig-94)

調査区中央部で検出した土坑である。北側を基礎杭によって攪乱される。平面形は歪んだ楕円形を呈し、1.9m×1.5m以上を測る。検出面から底面までの深さは50cm前後を測る。遺構の埋土は暗褐色砂質土である。

Fig-95に出土遺物を示した。

2は土師皿である。口径6.7cm、底径5.4cm、器高1.6cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。

この他には白磁碗・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・茶釉陶器・土師器・土師質土器などの遺物が出土している。

これらの遺物より、この遺構の年代は13世紀代の時期が考えられる。

106号遺構 (Fig-94)

調査区中央部で検出された土坑で、北西側は基礎杭によって攪乱される。平面形は東西方向に伸びた楕円形を呈し、0.7m×1.0m以上を測る。検出面から底面までの深さは30cm前後を測る。遺構の埋土は暗褐色砂質土である。

Fig-95に出土遺物を示した。

3は土師皿である。口径9.4cm、底径5.2cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。この他には土師器壺・瓦質土器の擂鉢・瓦片などの遺物が出土している。これらの遺物から、この遺構の年代は14世紀代の時期が考えられる。

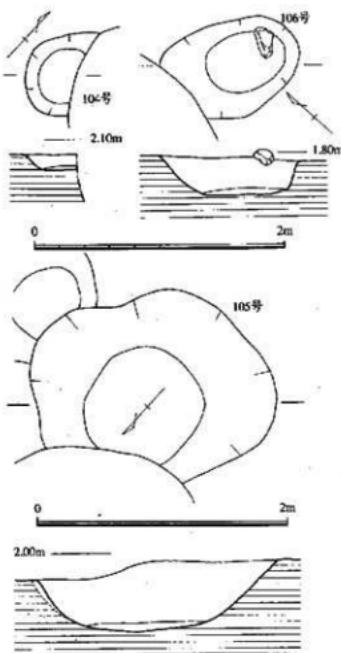


Fig-94 104号・105号・106号
遺構実測図 (S=1/40)

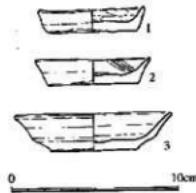


Fig-95 出土遺物実測図 (S=1/3)

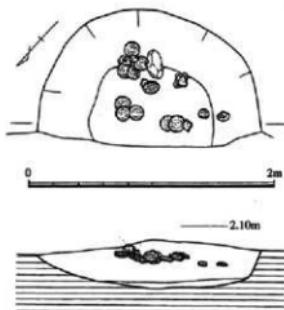


Fig-96 122号遺構実測図 (S=1/40)

る。20は瓦器皿である。遺物の各法量・焼成・色調・底部の調整は一覧表に示した。

122号遺構出土遺物計測表 (単位はcm)

	口径	底径	器高	焼成・色調	底部		口径	底径	器高	焼成・色調	底部
1	8.6	6.9	1.2	良好・褐色	糸切り	15	13.0	8.7	2.6	良好・暗褐色	糸切り
2	7.9	6.0	1.3	良好・褐色	糸切り	16	13.0	9.3	3.0	良好・明褐色	糸切り
3	8.0	5.9	1.3	良好・赤褐色	糸切り	17	12.5	8.5	2.8	良好・明褐色	糸切り
4	12.3	8.7	2.7	良好・赤褐色	糸切り	18	11.8	8.7	2.5	良好・明褐色	糸切り
5	12.3	8.3	2.8	良好・褐色	糸切り	19	12.8	8.8	2.9	良好・明褐色	ヘラ切
6	12.2	9.1	2.3	良好・明褐色	糸切り	20	14.6	6.0	5.1	良好・灰色	糸切り
7	11.7	7.8	2.9	良好・褐色	糸切り	21	12.5	9.0	2.9	良好・明褐色	糸切り
8	12.1	8.1	2.5	良好・明褐色	糸切り	22	12.4	8.2	2.5	良好・褐色	糸切り
9	12.3	8.6	2.7	良好・明褐色	糸切り	23	13.8	9.4	2.5	良好・褐色	糸切り
10	13.0	9.6	2.6	良好・褐色	糸切り	24	11.8	8.6	2.8	良好・褐色	糸切り
11	12.8	9.0	2.8	良好・明褐色	糸切り	25	11.7	8.6	2.5	良好・褐色	糸切り
12	13.5	10.1	2.5	良好・暗褐色	糸切り	26	13.6	10.0	2.5	良好・明褐色	糸切り
13	11.8	7.9	2.2	良好・明褐色	糸切り	27	12.9	8.4	2.9	良好・赤褐色	糸切り
14	12.7	8.8	2.5	良好・褐色	糸切り	28	13.4	9.9	2.5	良好・明褐色	糸切り



Ph.55 122号遺構遺物出土状況 (南西から)



Ph.56 122号遺構遺物出土状況 (南東から)

29	12.2	8.3	2.4	良好・褐色	糸切り	33	12.6	8.2	2.5	良好・褐色	糸切り
30	12.2	9.0	2.0	良好・暗褐色	糸切り	34	12.2	6.7	2.5	良好・褐色	糸切り
31	13.8	9.4	2.5	良好・褐色	糸切り	35	14.0	10.0	2.5	良好・褐色	糸切り
32	12.2	8.2	2.4	良好・褐色	糸切り						

この他に白磁碗・龍泉窯系青磁碗・陶器・瓦質土器などの遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は13世紀後半頃の時期が考えられる。

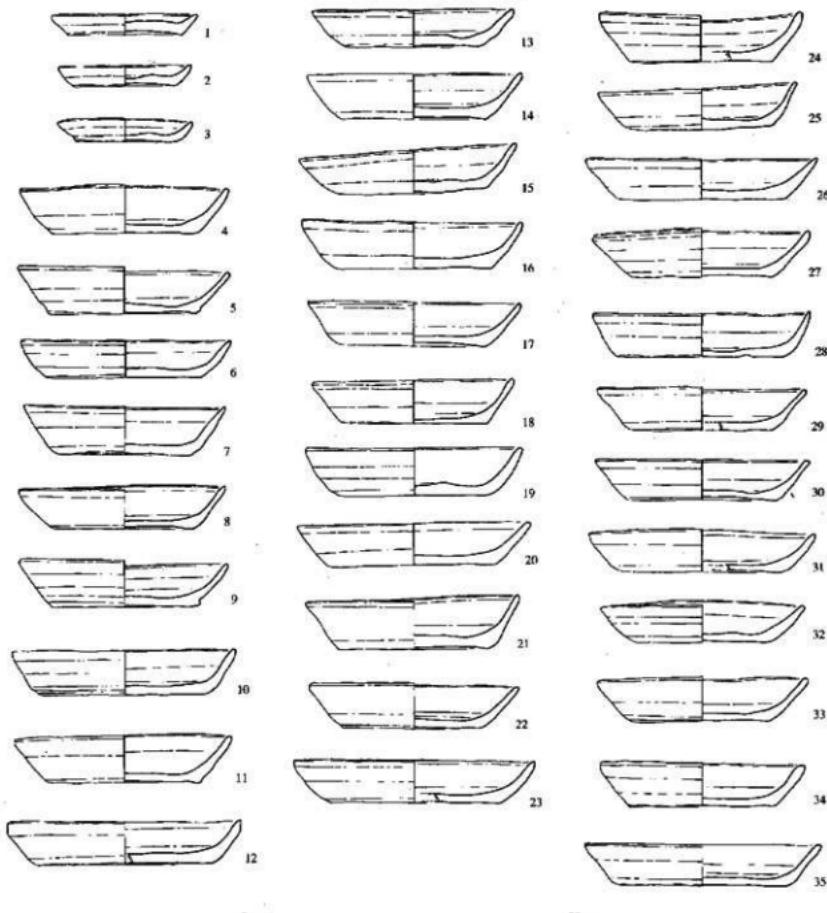
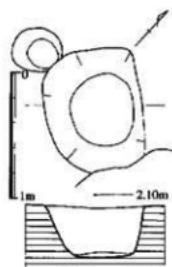


Fig-97 出上遺物実測図 (S=1/3)



132号遺構 (Fig-98)

調査区東側で検出された土坑である。東側を他の土坑に切られる。平面形は梢円形で47cm×52cmを測る。検出面から底面までは40cm前後の深さを測る。遺構は褐色砂層面に掘削されている。埋土は黒褐色砂質土で、粗砂を多く含む。

Fig-103に出土遺物を示した。

1は土師皿である。口径7.9cm、底径6.0cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切り調整される。2は土師器壺である。口径11.2cm、底径8.5cm、器高2.6cmを測る。この他には白磁口禿皿・龍泉窯系青磁碗などが出土している。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀の時期が考えられる。

Fig-98 132号遺構実測図
(S=1/40)

139号遺構 (Fig-99)

調査区南側隅部で検出した土坑である。上面での平面形は梢円形で、2.2m×1.3mを測る。検出面から30cm程掘り下げた平坦面で、直径80cm前後の土坑を検出した。二つの土坑は埋土の差がなく、精査を行ったが切り合いは確認できなかった。単一の遺構と考えられる。埋土は暗褐色砂質土で粗砂を多く含んでいる。円形土坑は梢円土坑の底面から60cm前後の深さを測る。

Fig-103に出土遺物を示した。

3は土師器の壺である。口径13.0cm、底径9.6cm、器高2.9cmを測る。底部は糸切り調整される。この他には白磁碗・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・陶器・青白磁合子などの遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は13世紀の時期が考えられる。

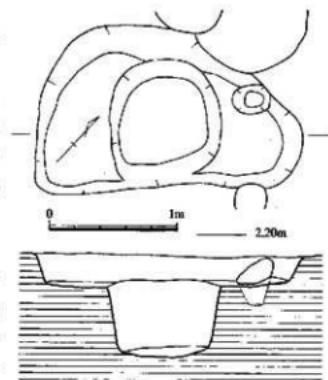


Fig-99 139号遺構実測図 (S=1/40)

140号遺構 (Fig-100)

調査区南側で検出された土坑である。平面形は不定形であるが、直径90cm前後を測る。検出面から10cm程度の深さで平坦面が検出され、その中央部に円形土坑が検出される。円形土坑の直径は20cm前後を測り、平坦面から20cm前後の深さを測る。埋土は暗褐色砂で、炭化物を少量含む。

Fig-103に出土遺物を示した。

4は土師皿である。口径10.9cm、底径9.2cm、器高0.9cmを測る。底部はヘラ切り調整される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。

この他には陶器四耳壺・茶釉陶器四耳壺・青白磁・土師器(糸切皿)・瓦質土器などの遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は13世紀後半頃の時期を考えることができよう。

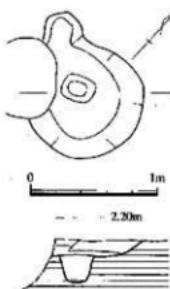


Fig-100
140号遺構実測図
(S=1/40)

144号遺構 (Fig-101)

調査区南側隅部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、 $1.35m \times 1.1m$ を測る。検出面から底面までの深さは50cm前後を測る。遺構の長軸はN 43° -Wの方向を探る。埋土は上層部分が暗褐色砂質土で、下層部分が暗褐色砂である。

Fig-103に出土遺物を示した。

5は土師器の壺である。口径12.5cm、底径8.6cm、器高2.3cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。6は土師器の壺である。口径13.8cm、底径9.0cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。この他には白磁碗・同安窯系青磁碗・陶器・李朝粉青沙器碗・土師器壺(ヘラ切り)等の遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は12世紀後半頃の時期が考えられる。

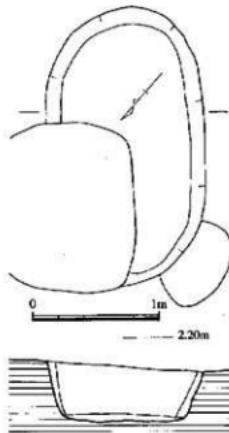


Fig-101 144号遺構実測図
(S=1/40)

157号遺構 (Fig-102)

調査区東側で検出した土坑である。平面形は長方形を呈し、 $2.2m \times 1.3m$ を測る。検出面から土坑底面までの深さは60cm前後を測る。遺構の上軸はN 48° -Wの方向を探る。遺構の埋土は暗褐色砂質土で、黒色粘質土を縦状に挟みこむ。

Fig-103に出土遺物を示した。

7は白磁碗である。内面には梯摺文を施す。8は李朝粉青沙器碗である。この他には白磁碗・白磁口禿碗・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・陶器・混入した須恵器・黒色土器・土師器・土師質土器・瓦質土器等の遺物が出土している。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀中頃の時期が考えられる。

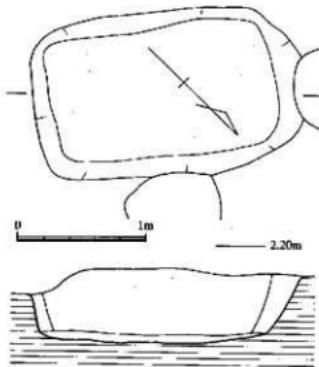


Fig-102 157号遺構実測図 (S=1/40)

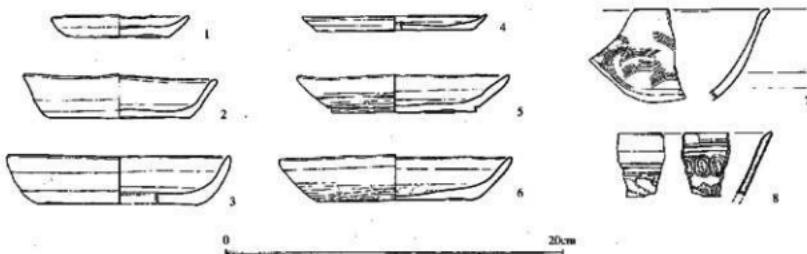


Fig-103 出土遺物実測図 (S=1/3)

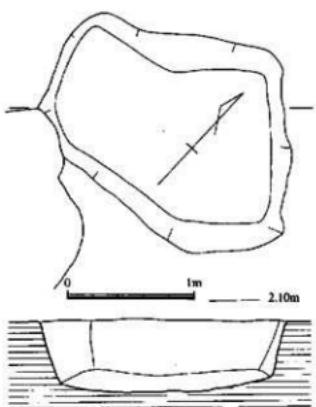


Fig-104 163号遺構実測図 (S=1/40)

163号遺構 (Fig-104)

調査区東側で検出した土坑である。平面形は方形土坑が重なり合ったような形状で、2.3m×1.6m前後を測る。検出面から土坑底面までの深さは60cm前後を測り、底面はほぼ平坦となる。遺構は褐色砂層面に掘削されており、埋土は黒褐色粘質土をベルト状に挟む暗褐色砂質土である。

Fig-108に出土遺物を示した。

1は白磁碗高台部片である。高台内に墨書を持つが、小片のため判読できない。外底部より露胎となる。

この他には白磁碗・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・陶器・茶釉陶器四耳壺・李朝象嵌壺・須恵器・土師器・土師質土器・瓦器椀・瓦質土器などの遺物が出土している。

これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀後半頃の時期が考えられる。

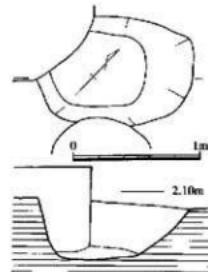


Fig-105 164号遺構実測図 (S=1/40)

164号遺構 (Fig-105)

調査区東側で検出した土坑である。東側を近世以降の瓦井戸によって切られ、西側は調査着手以前の工事によって擾乱される。現状で平面形は梢円形を呈し、長軸1.2m、短軸80cm前後を測る。検出面から底面までの深さは40cm前後を測る。遺構の埋土は炭化物・焼土を少量含む暗褐色砂質土である。

Fig-108に出土遺物を示した。

2は土師器の壺である。口径12.2cm、底径7.6cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切り調整され、板目圧痕を持つ。この他には白磁碗・龍泉窯系青磁碗・陶器・土師器壺・瓦質土器などの遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は14世紀代の時期が考えられる。

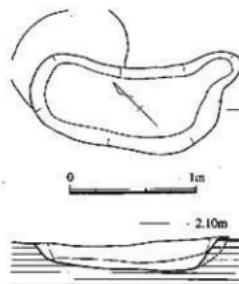


Fig-106 172号遺構実測図 (S=1/40)

172号遺構 (Fig-106)

調査区東側隅部付近で検出した土坑である。平面形は梢円形土坑端部に円形土坑が付いたような形状を呈する。1.7m×0.7mを測り、検出面から上坑底面までは15cm~30cm前後の深さを測る。遺構の埋土は炭化物を少量含む暗褐色砂質土である。

Fig-108に出土遺物を示した。

3は土師皿である。4は土師器の壺である。共に底部は糸切りされる。この他には白磁・青磁・陶器等の遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は13世紀代の時期が考えられる。

181号遺構 (Fig-107)

調査区東側で検出した土坑である。平面形は円形で、直径1.1m前後を測る。検出した段階では他の遺構に切られ平面形を確認できなかったため、周辺を掘り下げて遺構確認を行った。確認面から底面までの深さは40cm前後を測る。検出面から底面までは1.1m前後の深さを測り、底面より高さ1m前後の地点で白磁皿が出土した。

Fig-108に出土遺物を示した。

5は白磁浅碗である。口径13.8cm、高台径5.7cm、器高4.3cmを測る。外底部まで施釉され、墨付きから高台内にかけては露胎となる。

この他には白磁四耳壺・龍泉窯系青磁碗・陶器褐釉壺・須恵器壺・灰褐色上器・土師器壺(糸切り・ヘラ切り)・瓦器碗・瓦質土器などの遺物が出土している。これらの出土遺物より、この遺構の年代は13世紀前半頃の時期が考えられる。

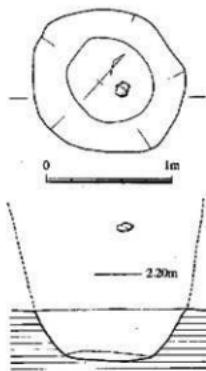


Fig-107 181号遺構実測図
(S=1/40)

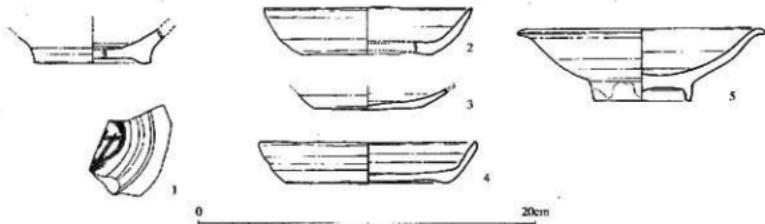


Fig-108 出土遺物実測図 (S=1/3)

その他の出土遺物 (Fig-109・110)

これまでに触れられなかった遺物のうち、重要と思われるものについて、簡単に紹介する。

Fig-109-1は古式土器の壺口縁部である。復元口径14.0cmを測る。摩滅のため、器面調整は観察できない。色調は暗褐色を呈する。2は瓦器碗である。口径9.0cm、高台径5.0cm、器高4.0cmを測る。内外器面とも丁寧なヘラ磨きが施される。色調は漆黒色を呈する。3は須恵器蓋である。古代に属するものである。4は瓦器皿である。復元口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.5cmを測る。内面は丁寧なヘラ磨きが施される。5は瓦器碗である。復元口径14.5cm、高台径6.2cm、器高5.4cmを測る。外器面は横位のヘラ磨きが施され、指押さえが加えられる。内器面は斜格子状にヘラ磨きが施される。6は土師器高壺部片である。復元口径22.2cmを測る。色調は褐色を呈する。摩滅のため器面調整は観察できない。7は土師器の壺口縁部である。復元口径20.6cmを測る。色調は褐色を呈する。8世紀後半から9世紀前半代の遺物である。8は土師皿である。口径6.3cm、底径4.4cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切りされる。色調は暗褐色を呈する。9は土師皿である。口径7.0cm、底径6.4cm、器高1.2cmを測る。底部は糸切りされ、色調は明褐色を呈する。10は土師器皿である。口径8.8cm、底径6.8cm、器高0.9cmを測る。底部は糸切りされ、板目圧痕が加えられる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。11は土師皿である。口径8.9cm、底径6.9cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、

色調は淡褐色を呈する。12は土師器坏である。口径9.6cm、底径5.6cm、器高2.3cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。13は土師器坏である。口径9.8cm、底径6.7cm、器高2.1cmを測る。底部は糸切りされる。14は土師器坏である。口径11.6cm、底径7.0cm、器高2.4cmを測る。底部は糸切り調整される。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。15は土師器坏である。口径12.4cm、底径9.2cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切り調整される。色調は暗褐色を呈する。16は土師器坏である。口径12.8cm、底径7.8cm、器高2.7cmを測る。底部は糸切りされる。17は土師器坏である。口径12.2cm、底径8.6cm、器高2.7cmを測る。底部は糸切り調整され、板目圧痕が加えられる。18は土師器坏である。復元口径11.36cmを測る。底部はヘラ切り調整される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。19は土師器塊高台部片である。高台径は6.7cmを測る。高台高は1.2cmを測る。色調は褐色を呈する。20は瓦器塊高台部片である。高台径は5.5cmを測る。高台の断面形は台形を呈する。残存する内器面では斜格子状のヘラ磨きが観察できる。21は瓦器塊高台部片である。高台径は6.8cmを測る。高台の断面形は三角形を呈する。内器面にはヘラ磨きが施される。22は須恵器塊である。口径18.2cm、高台径11.5cm、器高6.3cmを測る。高台は外底部付近に接合され、断面形は台形を呈する。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

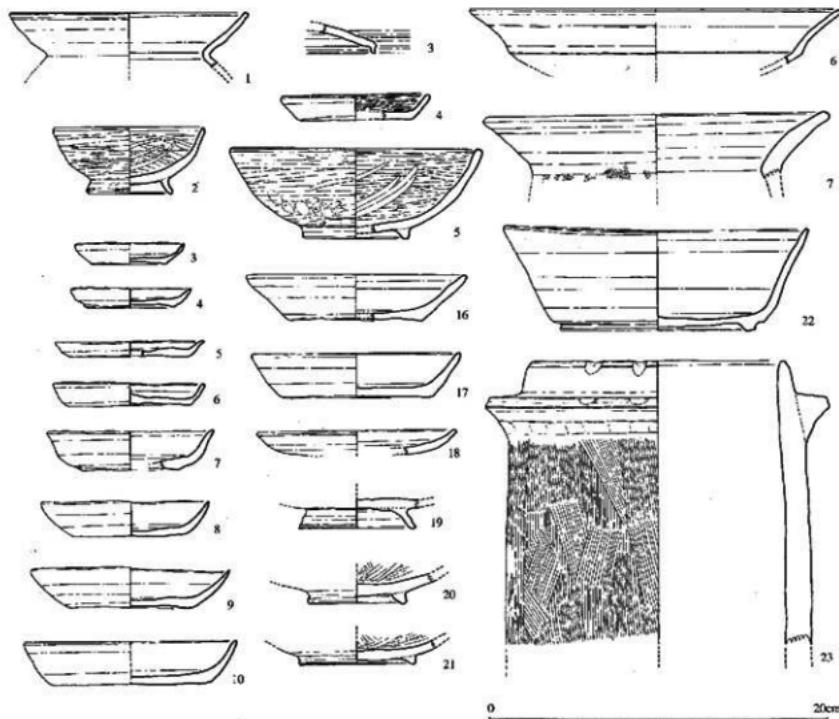


Fig-109 その他の出土遺物実測図1 (S=1/3)



Ph.57 鉄鍋出土状況（南東から）



Ph.58 127号遺構遺物出土状況（北東から）

八世紀後半から九世紀前半にかけての遺物である。23は土師質の水道管である。口径15.0cm、最大径23.0cmを測る。外器面には縦位の刷毛目調整、内面には縦位の刷毛目調整とナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。検出時には円筒埴輪とも考えられたが、口縁部付近に糸通しのための穴が數ヵ所設けられており、また胎土が埴輪のそれと全く異なるものであったことから、水道管の一部と判断した。この遺物は127号遺構の底部から直立した状態で出土したものである。井戸などに転用されたものであろうか。近代に属するものであろう。

Fig-110-1は白磁碗である。2は白磁碗である。1・2はともに玉縁状口縁を持つ。3は白磁小碗である。内器面には櫛描文で文様が施される。4は同安窯系青磁碗高台部片である。復元高台径は4.2cmを測る。外底部まで施釉され、高台部は露胎とする。5・6は同安窯系青磁碗である。内外器面共に櫛描文・片切彫りによる文様が施される。7は白磁碗である。底部は基筒底を呈する。口径8.8cm、高台径4.4cm、器高2.9cmを測る。釉調は潔白色を呈し、内面見込みには治具の痕跡が観察できる。8は白磁碗である。復元口径11.2cm、器高2.8cmを測る。外器面にはピンホールが多く見られる。9は白磁小皿である。復元口径6.4cm、底径2.7cm、器高1.1cmを測る。内面見込みには花弁文が施される。釉は外底部付近まで施され、以下は露胎とする。釉調は乳白色を呈する。



Ph.59 出土遺物 (Fig-109-5)



Ph.60 出土遺物 (Fig-109-22)

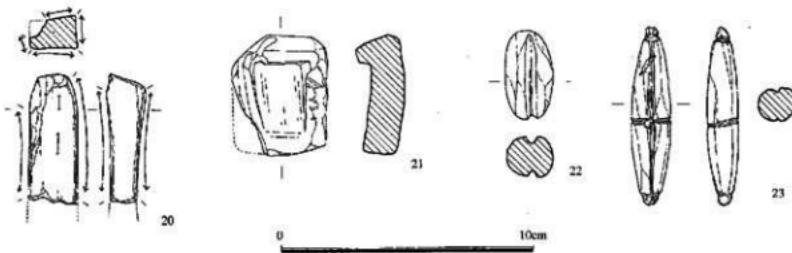
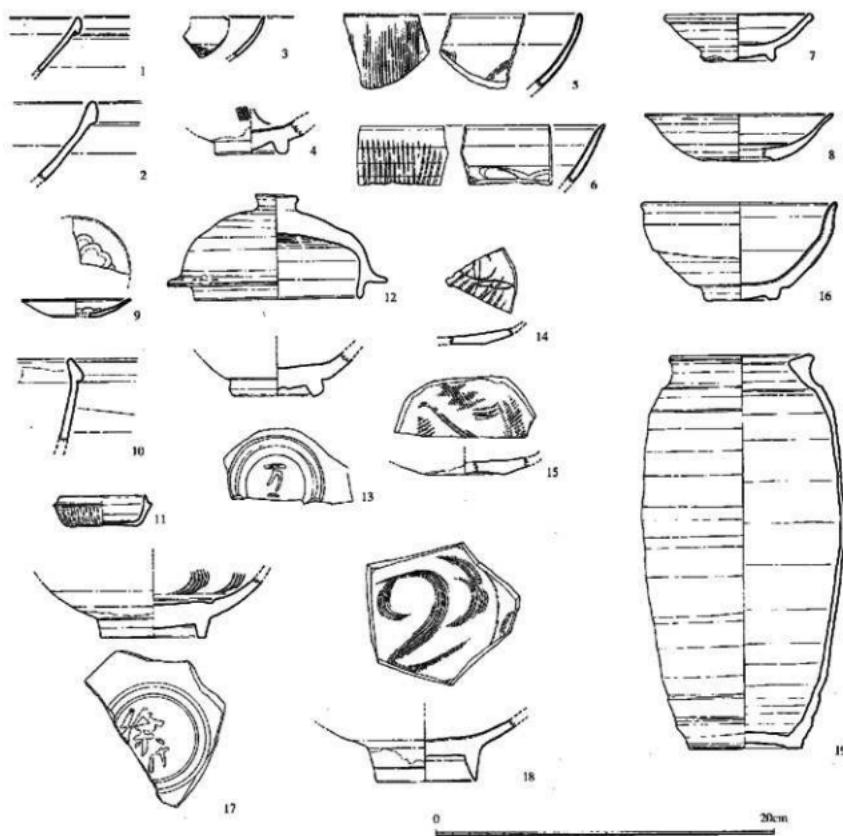


Fig-110 その他の出土遺物実測図 2 (S=1/2・1/3)

10は白磁碗口縁部である。11は白磁合子身である。型抜き成形され、体部上半部まで施釉し、以下は露胎とする。12は褐釉陶器蓋である。口径8.8cm、器高5.3cmを測る。体部はヘラ削りによって成形される。釉調は黄褐色を呈する。13は龍泉窯系青磁碗高台部片である。高台径は5.4cmを測り、高台内に墨書を持つ。現状では「万」の字だけが確認できる。14・15は同安窯系青磁皿である。描文と片切彫りによって文様が施される。16は天目碗である。口径11.3cm、高台径4.4cm、器高5.9cmを測る。外面体部中程まで施釉され、以下を露胎とする。17は白磁碗である。復元高台径6.2cmを測り、高台内に墨書を持つ。欠損のため「徐」の文字だけしか判読できない。18は白磁碗である。高台径は5.8cmを測る。内面見込みには片切彫りによる文様が施される。19は陶器瓶である。口径8.6cm、底径6.8cm、器高23.5cmを測る。釉調は外器面で暗茶褐色、内器面で暗黃褐色を呈する。

20は砾石、21は滑石製の硯、22は土錘、23は石錘である。



Ph.61 出土遺物 (Fig-109-23)



Ph.62 出土遺物 (遺構検出)



Ph.63 出土遺物 (Fig-110-17)



Ph.64 出土遺物 (Fig-110-24)

銅錢 (Fig-111)

第119次調査では、計6枚の銅錢が出土した。これは博多遺跡群内の調査において最も最少の出土数の部類となる。出土した銅錢のほとんどが銷や欠損のため判読できなかった。このうち判読できたものをFig-111に示した。

判読・図化できたのは皇宋通寶と寛永通寶のみで、この他には朝鮮通寶などの銅錢が出土している。



044号
皇宋通寶



001号
寛永通寶

Fig-111 銅錢実測図 (S=1/1)

銅製品 (Fig-112)

1は八花鏡である。包含層の掘り下げ中に出土したものである。直径9.6cm~9.9cmを測る。厚さは3mm~5mm前後を測る。背面には双鳳双獸と雲文を配する。縁の断面形は台形を呈する。鋳上がりの状況は良好であるが、鏡面に向かって大きく歪む。これは亀裂などが見られないため、土圧による歪みと考えられる。

この銅鏡は包含層から出土したが、付近からはFig-109-2の須恵器塊・2の銅製巡方なども出土しており、土坑墓等の遺構が存在していたことが推定される。この銅鏡は八世紀後半から九世紀前半にかけてのものと考えられる。

2は銅製帶金具の巡方である。帯通し部の一部が欠損するが、それ以外の部分は完存する。2.5cm×2.8cmを測り、全高は6.1mmを測る。内面四隅には固定用の鉢が配される。器厚は1.4mm~2mm前後を測る。側面には加工の段階でつけられたと考えられる擦痕が観察できる。鋳造後の面取り作業によるものか。125号遺構から出土した。この銅製巡方も八世紀後半代の時期が考えられる。



Ph.65 出土遺物・銅鏡 (Fig-112-1)



Ph.66 出土遺物・巡方
(表, Fig-112-2)



Ph.67 出土遺物・巡方
(裏, Fig-112-2)



Ph.68 出土遺物・銅製品 (Fig-112-3)



Ph.69 出土遺物・銅製品 (Fig-112-4)

3は銅製品である。
150号遺構から出土した。
両端部が欠損しているた
め、全体の形状は不明で
ある。残存長5.0cm、全
幅4.2cmを測る。器厚は
5mm～6mm前後を測る。
器面には加工痕が明瞭に
残り、下側面は斜めに成
形される。上部には抉り
状の加工がなされてい
る。

4は銅製品である。円
形銅製品の一部と考えら
れ、縁の部分のみが元の
形状を保つ。縁の部分は
本体部分より厚く、断面
形は長方形を有する。厚
さは縁の部分で4.5mm、本
体部分で1.2mm前後を測
る。直径30cm前後の円形
が復元できる。柄鏡の鏡
面部分の一部と考えられ
る。

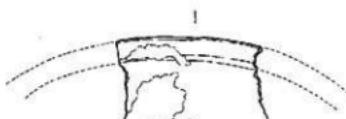
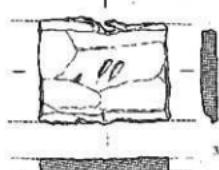
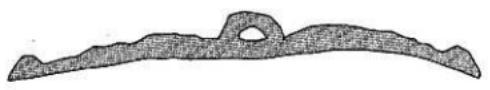


Fig-112 銅製品実測図 (S=1/1・1/2)

板碑

184号遺構から検出した板碑である。184号遺構は井戸遺構であり、この板碑は井筒の上面を覆う人頭大の礫群の中から出土した。これらの礫群は扇形に配置されているものの、他の井戸遺構に残りの部分を切られていたため、本来の形状は不明である。板碑に用いられている礫は、扁平なもので、50cm×38cm前後の大きさを測り、厚さは15cm前後を測る。

礫前面上部には梵字が彫られ、前面右下部分には銘が彫られる。礫は中程から折れ、その割によって銘の一部が欠損する。梵字は阿弥陀如来仏を表す「キリーク」の文字が彫られる。銘の部分は「妙□□□□」と線刻され、供養された者の戒名を記したものと考えられる。文頭の「妙」は女性の戒名に多く用いられていることから、この板碑も亡くなった女性を弔うために、建立されたものであろう。建立された時期などは板碑からは判明しなかった。また、この板碑が井戸枠として転用されていた井戸自体の年代は、その出土遺物より13世紀代と考えられ、板碑自体はそれ以前のものと考えられる。

井戸掘削の際に既に元位置から動かされており、本来調査区内に建立されていたものか、調査区外のいすこから持ち込まれたものは判断できない。

Ph.70 184号遺構出土板碑



Ph.71 184号遺構出土板碑・梵字部分



Ph.72 184号遺構出土板碑・部分

3. まとめ

以上、簡単ではあるが、博多遺跡群第119次調査についての概要を述べてきた。最後に簡単なまとめと若干の問題点の指摘を試みたい。

本調査区の遺構の初現としては8世紀後半で、息浜内の調査区の中では最も早い時期の遺構を検出したことになる。これまで息浜での調査では、11世紀後半以前の時期に遡る遺構は検出されておらず、息浜の陸地化・都市化の過程を考える上で重要な資料と考えられる。

これまでの調査からは、博多湾側に位置する息浜の陸地化の年代は11世紀後半から12世紀前半であること、また、博多浜と息浜を結ぶ陸橋部の形成・埋め立てが開始されたのも、両地区の間を流れている河川の流路が変化したとの12世紀前半頃の時期ということがわかっている。このような立地条件から11世紀後半以降の遺構しか検出されなかった息浜で、本調査区の遺構初現の時期が、突出している理由としては次の理由が考えられる。

本調査区は息浜の南東側端部に位置しており、博多湾からの直接の風浪を受けることのない、比較的安定した立地であったこと、また、博多浜と息浜の間を流れている旧河川の左岸に位置し、ほぼ河口付近に位置していたため、河川堆積による陸地化が他の場所より早い段階で進んでいたと考えられる。博多遺跡の埋没地形は、調査件数の多い西側ではある程度の復元がなされているが、これまであまり調査が行われなかった東側では不明確なところが多く残されている。特に本調査地点も含む博多浜と息浜を結ぶ陸橋部西側の調査は、これまでで数次しか行われておらず、都市「博多」が拡大していく状況には未解明の部分が多い。今後の調査で明らかにされていくことに期待したい。

本調査地点で出土した銅鏡・巡方・須恵器壇などの遺物は、検出された状況から本来は上墳墓に埋葬されたものと考えられる。初現の遺構が埋葬遺構であることは、他の縁辺部の調査区でも同様な事例が報告されている。これは居住地の開発・拡大、都市化の過程をよく表した現象と考えられる。博多浜の東側で行われた調査においても、砂丘端部や湿地帯は当初、墓域として利用されている例が多い。本調査区から南側に200m程のところに位置する聖福寺付近一帯には、8世紀後半の時期には集落が存在していたことがこれまでの調査から判明しており、この集団の上位の者が埋葬されたものであろうか。海岸部に突き出し、集落から離れた位置にあった状況の本調査区付近が墓域として利用されたものと考えられる。

これまでの博多遺跡の調査からは、30点近い鈎帯が出土している。石製・青銅製などの材質があり、その形状は様々である。表1に福岡市内出土の鈎帯を一覧した。このうち、博多遺跡内から出土したものについて概観すると、その出土地点は博多浜中央部から南側に集中する傾向を見せる。付近に官衙施設などの大規模な施設が存在していたことは、これまでの調査から推測されているが、このような遺構は検出されていない。この時期は鴻臚館との関連性が注目される時期であり、今後の調査によって、詳細が明らかにされることに期待したい。

福岡市出土の鉢帶一覧 (単位はcm)

番号	遺跡	器種	遺存状況	長さ	材質	平面形	長さ	幅	厚さ	かがり孔	裏金番号	報告書
1	海の中道遺跡1~3次	遙方	完形	青銅	正方形	透孔	3.0	3.0	0.1	紙4、裏留板	7940	87集
2	二宅庵寺	遙方	完形	粘板岩(黒)	正方形	長方形(1.8×0.5)	4.0	4.1	0.7	4	7703	50集
3	清永2次	丸軸	完形	玉(淡白緑)	D形		2.6	4.1	0.8	3	9072	310集
4	多々良辻田3次	丸軸	完形	石(黒系)	D形		2.7	4.4	0.8	3	7901	53集
5	多々良辻田3次	丸軸	完形	青銅	D形		2.4	3.7	0.7	3	7901	53集
6	多々良辻田3次	丸軸	1/3破片	石(白系)	D形	長方形(2.4×0.4)	(2.3)	(3.9)	0.6	1	7901	53集
7	多々良辻田6次	遙方	完形	石(不明)	正方形		4.1	4.3	0.6	4	8326	121集
8	多々良辻田6次	丸軸	完形	蛇紋岩?	D形		2.6	4.2	0.6	3(貫通)	8326	121集
9	多々良辻田6次	丸軸	接合完形	蛇紋岩?	D形	長方形(2.3×0.4)	2.9	4.4	0.6	3(貫通)	8326	121集
10	多々良辻田6次	丸軸	接合完形	安山岩(黒)	D形	長方形(2.3×0.3)	2.8	4.3	0.7	3(貫通)	8326	121集
11	多々良辻田6次	丸軸	1/3破片	玉	D形	長方形(2.1×0.4)			0.6	1+	8326	121集
12	多々良辻田6次	遙方	1/3欠損	石(不明)	正方形	不明	3.1	4.5	0.6	4+(貫通)	8326	121集
13	都地5次	遙方	一部欠損	青銅	正方形		2.5	2.7	0.1	紙4	9311	434集
14	東入部3次	蛇尾	完形	石(黒色)		長方形(1.8×0.6)				3	9216	118集
15	博多17次・20次	蛇尾	底板付	青銅	偏D形		2.1	2.1	0.1	紙3	8324	118集
16	博多22次	丸軸	半欠	玉軸	D形		2.7		0.7	3	8327	118集
17	博多22次	蛇尾	底板のみ	滑石	長方形		2.6	3.0	0.1	紙孔3	8327	118集
18	博多22次	丸軸	木製品	石(黒色)	O形		3.0	4.0	1.0		8327	118集
19	博多31次	丸軸	完形	石(緑色)	D形		1.9	2.9	0.4	3	8806	150集
20	博多39次	丸軸	未製品	石(黒系)	D形		1.6	2.4	0.7		8806	229集
21	博多39次	蛇尾	裏金具	青銅			2.3	2.3	0.1		8806	229集
22	博多62次	遙方	完形	滑石(黒色)	正方形		3.5	3.8	0.7	4	8963	397集
23	博多62次	丸軸	鉄型	滑石	D形	長方形(1.9×0.5)	3.2	3.8	0.5		8963	397集
24	博多62次	丸軸	底板無し	青銅	D形	長方形(1.7×0.6)	1.5	2.3	0.2	紙3	8963	397集
25	博多79次	遙方	完形	青銅	正方形	長方形(1.5×0.3)	2.4	2.5	0.4	紙4、裏留板	9259	447集
26	博多80次	丸軸	半欠	石(緑色)	D形		2.4		0.3	2+	9309	448集
27	博多80次	遙方	半欠	ガラス	長方形		3.6	0.4	3+		9309	448集
28	博多85次	遙方	一部欠損	石(白~淡緑)	正方形		3.7	4.1	0.7		9433	522集
29	博多85次	遙方	一部欠損	石(白~淡緑)	正方形	長方形(欠損)			0.5	4	9433	522集
30	博多85次	丸軸	未製品	滑石	D形		1.6	3.2	0.6	1+	9433	522集
31	博多86次	丸軸	未製品	滑石	D形		1.0	1.6	0.5		9433	522集
32	博多119次	遙方	一部欠損	青銅	正方形	長方形(2.1×0.3)	2.5	2.8	0.2	紙4	9941	668集
33	博多紫港線2次	蛇尾	底板	青銅	偏D形		3.7	3.2	0.1	紙4	8331	184集
34	博多紫港線2次	遙方	一部欠損	蛇紋岩	正方形	長方形(1.6×0.5)	3.1	3.3	0.6	4	8331	184集
35	博多紫港線2次	遙方	半欠	石(白~淡緑)	正方形		3.4	0.6	1	1	8331	184集
36	博多紫港線2次	丸軸	完形	石(灰・青・黒)	山形	長方形(1.9×0.2)	2.5	3.6	0.6	3	8331	184集
37	博多紫港線4次	丸軸	底板無し	青銅	D形	長方形(1.6×0.6)	1.3	2.0	0.1	紙3	8527	205集
38	博多紫港線4次	蛇尾	底板無し	青銅(黒漆塗)	偏D形		2.4	2.4	0.3	紙3	8527	205集
39	博多紫港線4次	遙方	1/3欠損	石(白色)	正方形	長方形(2.3×0.2)	2.5+	3.6	0.5	2+	8527	205集
40	博多店屋町工区	遙方	完形	石(白系)	長方形		2.1	2.3	0.4	2	7725	105集
41	博多店屋町工区	遙方	一部欠損	蛇紋岩(白系)	正方形		3.2	3.4	0.5	4(貫通)	7725	105集
42	柏原M	丸軸	完形	安山岩(黒系)	D形		2.0	2.9	0.7	3	8346	191集
43	柏原M	丸軸	完形	安山岩(黒)	D形		2.6	4.1	0.6	3	8346	191集
44	柏原M	丸軸	完形	石(白系)	D形	長方形(2.0×2.0)	2.7	4.1	0.7	3(貫通)	8346	191集
45	有田3次	遙方	半欠	蛇紋岩	正方形	長方形(不明)	3.5		0.5	2+	7503	155集
46	有田150次	蛇尾	完形	青銅			4.4	3.6	0.9	紙4	8978	264集
47	鴻臚館	丸軸	完形	石	D形		2.7	4.3	0.6	3		未報告
48	元岡20次	遙方	完形	青銅	正方形	長方形(2.2×0.7)	2.2	3.1	0.2	紙4、裏留板		未報告
49	元岡20次	遙方	完形	青銅	正方形	長方形(2.3×0.2)	1.5	3.1	0.5	紙3		未報告
50	元岡20次	丸軸	完形	青銅	D形	長方形(1.8×0.6)	1.4	2.3	0.1	紙3		未報告
51	元岡20次	丸軸	完形	青銅(黒漆塗)	D形	長方形(2.1×0.4)	2.5	3.7	0.8	紙3		未報告

*この一覧は福岡市文化財部人規模事業等担当課の菅波正人氏が作成したものを改変・資料の追加を行ったものである。

博多 77

一博多遺跡群第116次・119次調査概要
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第668集

2000年3月30日

発行 福岡市教育委員会
印刷 梅人里印刷センター

